

絶対君を見捨てない スクーパーズ来襲編 3 るな充120%

(アニメURAHARA同人小説)

注意

この同人小説は、春奈るなが主演声優を務め、2017年秋に公開されたアニメ「URAHARA」をもとに書かれています。設定や内容はかなり変更されていますが、この小説を読む場合は、アニメ「URAHARA」をご覧になってからの方が、声の感じが掴め、より会話を楽しむことができると思います。ですので、この小説は、アニメ「URAHARA」をご視聴されてからお読みになることをお勧めします。

なお、この小説はフィクションです。実在の人物や団体などとの関係はありません。

目次

- (スクーパーズ来襲編 第3巻)
- 第6章 ラフォーレ奪還作戦
- 第7章 決戦
- 第8章 黒いスクーパーズ
- (スクーパーズ来襲編 第4巻以降の予定)
- 第9章 ラフォーレの決闘
- 第10章 PARK動乱
- 第11章 原宿の結婚式

第7章 ラフォーレ奪還作戦

アメリカ合衆国ハンズコム空軍基地を出発し横田基地に到着したC-17輸送機に乗って日本にやって来た、マサセツチュー工科大学のスコットワトソン教授とハーバード大学のジョンオッペンハイマー准教授は、自衛隊員が同乗した米軍のUH-60A汎用輸送ヘリコプター・ブラックホークで長野県の地下坑道へ向かった。以下は英語での会話であるが、すべて日本語に翻訳して掲載している。

「ジョン、楽しみだな。どうやって、スクーパーズは、光速を越えて地球までやって来るのだろう。」

「わからないです。物理学のレベルが全く違うのかもしれませんが。それとも何か抜け道がある可能性もあります。」

「正直に話してくれるだろうか。」

「日本側の話では、素直に話しているということですよ。技術士官ということですから、超高速飛行に関しては詳しいと思います。」

「おー、あつちに富士山が見える。」

「あれですか。噂通り綺麗な山ですね。教授は、テンションが上がっているようですね。」

「あー、スクーパーズと話せると分かってから上がりっぱなしだ。昨日はよく眠れなかったよ。」

「空軍の輸送機ですから旅客機と違ってうるさくて、私もあまり眠れませんでした。」

「なんだ、つまらないやつだな。」

「そうですね。私もスクーパーズと話せるのはすごく楽しみです。日本政府は、大学教員にインタビューをさせているようですが、賢明な判断だと思います。」

「合衆国だったら、国家安全保障局あたりが尋問しそうだ。」

「はい。そうすると、意思の疎通がとれなかったかもしれません。それでスクーパーズをグアンタナモ湾米軍収容所にも送りそうです。」

「テロリスト扱いか。」

ヘリコプターが到着すると、自衛隊員がやってきて、ワトソンに話しかける。

「お疲れ様です。」

「ありがとうございます。」

「注意事項に関してはお読み頂けましたか。」

「ああ、絶対にフレンドリーに対応するよ。」

「有難うございます。」

「いま、スクーパーズは？」

「朝食を取っています。好みなどが良くわからないため、100種類近い食事を用意していま

す。」

「地球の食べ物でも大丈夫なのか。」

「はい、大丈夫とのこと。基本的にかなり雑食性が高いようです。」

「そうなのか。」

「では、聴取室にお連れします。日本の石橋教授、諏訪教授がお待ちです。事前打ち合わせをお願いします。」

「有難う。お願いします。」

部屋に着くと、そこには石橋教授、諏訪教授のほか、補助のために浦藤助教、桐谷博士課程学生が待っていた。まず、6名がそれぞれ自己紹介をした。そして、今日の質問内容に関して、事前打ち合わせを始めた。石橋教授が話を始める。

「昨日は、スクーパーズ星やスクーパーズ星での生活について質問をしました。浦藤君と桐谷君がまとめた報告書をお読み頂けましたでしょうか。」

ワトソンが答える。

「はい、目を通しました。一般的な生活はかなり普通な感じ。君主制を取っているようですが、やはり、銀河間の戦争のためという感じ。1日の長さは地球とだいたい同じで、1日は24時間で1時間は60分というのが興味深かったです。これは、約数が多く初期に複数の文明を束ねるために適しているという、自然数の性質によるものなのでしょう。」

「そうですね。それで今日は超光速飛行について質問をしていきたいと思えます。軍事的な話より、飛行に集中したいのですが、よろしいでしょうか。」

「はい、私たちも、そこに一番の興味があります。」

「有難うございます。何も知らない私たちが教えを乞う生徒のような立場で話をしていきたいと思えますが、よろしいでしょうか。」

「問題ありません。実際そうなのですから。」

「有難うございます。報告書にも書きましたように、昨日、スクーパーズが使う数式を少し教わったのですが、理解して頂けましたでしょうか。」

「もちろんです。我々が使う数式より、形式的に書いて誤解が少ない、良い書き方だと思います。」

「そうですね。それでは、今日はスクーパーズの数式を交えながら、話を進めていきたいと思えます。」

「望むところです。」

細かい打ち合わせの後、自衛隊員がスクーパーズの2体を部屋に導いた。部屋には、大きなディスプレイがあり、研究室のような雰囲気を出していた。ディスプレイには、スクーパーズの指示にしたがって作成した、スクーパーズの翻訳機から文字や図を表示できる装置が付いて

いた。石橋教授がまず日本語で話を始める。

「お早うございます。昨日お話しした通り、アメリカから大学の先生方もいらっしやいましたので、今日から英語での会話としたいと思います。翻訳機の方を切り替えて頂けますか。」

ボナダ少佐が答える。

「はい、わかりました。」

ここから先は英語での会話である。

「ご飯は美味しかったですか。」

「はい、とても美味しかったです。」

「そうですか。美味しいもの美味しくないものがありましたら、どんどん言って下さい。それを参考にメニューを考えます。」

「有難うございます。」

「それでは、今日は超光速飛行に関して教えて頂ければと思います。スクーパーズ本星は、地球から5万光年程度離れているという話でした。スクーパーズ本星から地球まで、時間にしてどのくらいかかるのですか。」

「主力艦は地球の1日で1万光年ぐらい進むことができます。輸送艦はそれよりも遅いです。今回は、輸送艦を連れてきていないため、航行日数は7日程度でした。」

「5万光年の彼方からたった1週間で着いてしまうのですね。それは速い。」

「はい。銀河間航行用の超高速船はその10倍ぐらい速いですが、あまり荷物を載せることができません。アンドロメダ銀河までは、主力艦で10カ月ぐらい、超高速艦でも1か月ぐらいはかかりません。」

「それは、すごいです。アンドロメダ銀河まで行っちゃうんですね。」

「はい。少し前までは、デストロイヤーズとの交易も盛んで民間船も往来していましたが、今はちょっと途絶えています。」

「戦争のせいですね。」

「はい、その通りです。その戦争のために、既に何億体ものスクーパーズが死亡しています。」

「そうですか。それは、お悔やみ申し上げます。」

ボナダはワトソンとオッペンハイマーの方を見ながら、謝罪する。

「我々も、地球の方々にご迷惑をおかけして、特にアメリカの方々に多大な犠牲を出してしまつたことを大変申し訳なく思っています。ただ、我々としてはデストロイヤーズとの、この戦いに負けるわけにはいきません。負けた場合、この天の川銀河の被害は想像も及びません。そのため我々にこのような命令が下り、我々もそれに従っています。」

ワトソンが答える。

「軍人として命令に従って行動されているボナダ少佐に言うことではありませんが、私たちに事情を説明して頂ければ、もっとうまくできたのではないかとは思っています。」

「はい、以前にはその星の知的生命体に説明と協力をお願いしたこともあったのですが、結局うまく行かなくてこのようなことになっていると聞いています。お詫びにならないかもしれませんが、我々2体で協力できることがあったら何でもおっしゃって下さい。」

「わかりました。そうですね、我々の国でもベトナムという国ではうまくやることができず、そんな意図はなかったのですが侵略者として排斥されてしまいました。ボナダ少佐とダルガ少尉のご協力は大変ありがたいと思います。少なくとも、我々の間ではわだかまりなくやって行きたいと思います。」

「有難うございます。」

石橋教授が話を戻す。

「超高速飛行に關してですが、我々の物理学からの結論では、光速に近づくとどんどんエネルギーや質量が大きくなり、光速を越えられないことになっています。スクーパーズの方々はどういうにして光速を超えるのでしょうか。」

「我々の宇宙船もマイクロブラックホールエンジンで質量を運動エネルギーに変換することによって亜光速、光速の3分の1程度までは出せます。ただ、我々の理論でも物体が光速を越えることはできません。」

「なるほど。では、どうやって地球にいらしたのですか。」

「この宇宙全体の創成期に指数関数的に急激に膨張した時期があります。」

「はい、こちらの言葉ではインフレーションと言います。真空のエネルギーによって引き起こされたと考えられています。細かいところは研究中です。」

「その通りです、細かい理論に關しては、また数式を使ってお話ししたいと思います。そのインフレーションが生じる前の小さな宇宙で、無数のワームホールが形成されたと考えられています。これについては、我々も理論と現在の観測結果からの推定です。」

「なるほど、そのワームホールがインフレーションで引き延ばされた。」

「はい、そして宇宙が膨張した後そのまま引き延ばされながら残っています。」

「そのワームホールを使って航行しているわけですか。」

「はい、ワームホールの出入口は素粒子程度に小さくなっていますから、それを見つけて、ジオデシックダイフォーメーション(測地線変形)により大きくして、そこを宇宙船が通っていくわけです。」

「すごいですね。」

「あまり長いワームホールの測地線を変形させることはできません。また、ワームホールの変形にはエネルギーを使うため1日10回ぐらいが限度です。そのため、1日1万光年が通常の艦船の最高速ということになります。」

「そのワームホールはすぐに見つかるのですか。」

「いえ、古来より千年以上かけて調べてきた結果です。ワームホール自体は極めて多数存在する

のですが、その出入口は、基本的に重力の影響を受けるため、その分布は宇宙の物質の分布と類似しています。ですので、銀河の中心や恒星の中にその出入口がある場合がほとんどで、そのようなものは航行に利用することができません。また、通常の空間にあるものは短距離のものばかりで、長距離航行に使いやすい千光年程度のものは非常に限られます。」

「千年以上もかけて、航路を切り開いてきたというわけですか。」

「はい、その通りです。太陽系には長距離ワームホールは見つかっていません。そのため、長距離ワームホールがある51エリダヌスb星から、10光年ぐらいの中距離ワームホールを9回通ってきます。太陽系のワームホールの出口は木星の衛星軌道上にあります。そこから亜高速飛行で約1日かけて地球に來ます。今回は、その後、月の裏側で艦隊を整備してから、その、申し訳ありませんが、地球に勝手に邪魔しました。」

「ワトソン教授の言われる通り、ボナダ少佐は軍人さんでいらっしゃいますから、命令に従った行動と思います。今回のことは、個人的にはお気になさらないでください。」

「有難うございます。」

ワトソンが付け加える。

「宇宙に行っても、軍人のお偉いさんは、敵にも味方にも無茶な命令を押し付けるんですね。少し残念ではありますが、お気になさらないでください。それよりも、いろんなことを教えて頂けると嬉しいですよ。」

「有難うございます。測地線変形の理論と測地線変形装置、またマイクロブラックホールエンジンに関する教科書を翻訳機で英語に翻訳したものがありません。地球の言葉にない単語も多く、それに関しては解説を付けてみました。このレポートを読んで頂いた方が速いと思います。レポートの電子データは先ほどそちらの係りの方にお渡ししました。質問がありましたら、いつでもお答えします。」

「これはすごいものを大変ありがとうございます。」

「実際にこれを書いたのは、部下のダルガ少尉です。極めて優秀なスクーパーズですので、よろしく願います。」

「そうですか。うちの浦藤助教も優秀ですが、いいですね、若い人が優秀なのは。」

「はい、おっしゃる通りです。」

石橋委員長は受け取ったレポートを回覧した。全担当者がそれを見て、すぐにでも詳しく読みたいと思ったようだった。その雰囲気を知りながら石橋委員長がボナダに話しかけた。

「とてもすばらしい内容で、我々もこれを勉強してから、また質問をした方がよいと思います。今日は短いですが、また明日ということでもよろしいでしょうか。」

「はい、分かりました。美味しい食事のお礼と言ってはなんですが、こちらでもいろいろ準備をさせていただきます。」

「ありがとうございます。欲しいものがありましたら、なんでも言ってください。手に入るもの

は準備したいと思います。」
ワトソンが付け加える。

「日本は美味しいものがたくさんある国ですから、アメリカ人から見ても、ここで投降してラッキーだと思います。」

「そうですね。それは良かったです。」

石橋委員長が締めくくった。

「それでは、また明日お願いします。」

「お願いします。」

スクーパーズと自衛隊員が部屋を出て行った。石橋委員長が他のメンバーに言う。

「それでは皆さん、明日までにこの理論を勉強しておいて下さい。ワトソン教授、オープンハイマー准教授、食事が必要な場合は係りの者に言ってください。アメリカとは政府間で情報共有の合意ができていますので、この資料はアメリカの国内で共有することは構いませんが、機密保持には気を付けてください。」

「おっしゃることは分かりますが、機密保持に関しては、日本側の方が心配です。」

「それもそうですね。我々も自衛隊のデバイスにしか情報を入れることはできませんが、その自衛隊も情報流出を起していますので、ネットにはつながないように注意します。」

「お願いします。機密保持などに協力が必要でしたら、アメリカ政府に連絡しますので、ご連絡下さい。人類にとって有史以来、農業の発明や蒸気機関の発明に匹敵する転換点の一つかもしれない。協力してこの問題に対処して行きたいと思えます。」

「はい、理解しています。恥や外聞を捨てて対処したいと思っています。」

「それにしても、ボナダ少佐はすばらしい人間、人間ではないですが、善悪感や判断力を持ち合わせている人、人ではないですが、良かったです。SFで出てくる、地球人を奴隷にしたり、皆殺しにするような感じではなかったですね。」

「そうですね、話しがわかる方だと思います。しっかりと協力関係を築いて行きたいと思えます。」

「同感です。」

ボナダが翻訳した本をばらばらとめくった桐谷が静かにつぶやいた。

「いいのか、こんな情報を地球人に渡してしまって。まあ、地球人が宇宙に出られるようになっても大したことにはならないだろうけど。それに地球人がスクーパーズと争えば、我々にとっての良い材料だしな。」

次の朝、朝食を終えたPARKでは、今日の作戦に向けて行動を開始しようとしていた。まりがここに話しかける。

「ことこ、準備は大丈夫？」

「うん、大丈夫だよー。その前に、今までの戦闘データからスクーパーズについて分かったことを話すね。」

「お願い。」

ここがタブレットの画像を見せながら説明する。

「スクーパーズには、裏側の奥に弱点、急所みたいなものがあるの。」

「そうなんだ。」

「いろんな力が、ここから出てるみたいで、ここが壊れるとすぐに死んでしまうみたい。」
りどが尋ねる。

「その急所に当たらなくても消えるスクーパーズもいるけれど。」

「うん、急所の力が弱いスクーパーズは、それ以外の部分が壊れても、急所を維持できなくなつて、急所が死んでしまつて、最終的には全体も死んでしまうみたい。逆に、急所の力が強いスクーパーズは、急所以外のところならば再生して死なないみたいなんだ。あと、バリアーの力も強いみたい。」

「分かった。強いスクーパーズはそこを狙えということね。」

「そういうことかな。あと急所が破壊した場合だと余計な信号が出ていない。たぶん、痛みなく眠るように死ねるみたい。」

「そう。じゃあ、普通のスクーパーズもできるだけ急所を狙うようにする。」
まりがりどに言う。

「私には急所だけ狙うって無理かな。」

「それでいい。まりはスクーパーズにむけて散弾でどんどん撃てばいい。残ったスクーパーズは、私が片づける。」

「わかったわ。」

りどが作戦の開始を促す。

「じゃあ。そろそろ始めようか。」

「わかったー。」

変身をした3人は道に出た。そして、3人はここを真ん中にして手を繋いだ。ここが言う。

「じゃあ、また、情報を送るね。」

りどとまりどが答える。

「了解。」「わかったわ。」

ここが情報を送り始めた。まりとりどがつぶやく。

「これが、戦車。すごいわ。」

「これなら、スクーパーズの攻撃を防げそう。」

情報の送信が終わったところで、戦車の製作を始める。ここが言う。

「じゃあ、作ろうー。」

りととまりが答える。

「了解。」「いくわよ。」

原宿の囲いの中が光に満たされて、しばらくすると光が納まっていった。すると、目の前に3台の戦車が出来上がっていた。一番後ろの一台は大きく角ばっていた。もう1台は中ぐらいの大きさで丸みを帯びていた。最後の1台は少し小型だった。ことが順番に説明する。

「これが、ドイツのタイガー2型をヒントに作ったもので、これがソ連のT-34、最後のこれがアメリカ軍のM4シャーマンから考えて作ったの。ビーム攪乱幕をまいたり、風で吹き飛ばしたりできるよ。あと、本物の戦車より小型軽量で、ラフォーレの階段を登れるようになってる。」

りとが言う。

「ここは、一番頑丈そうなのに乗ちなよ。私はこの小型ので動き回る。まりがこの中型のかな。」

まりが同意する。

「そうね。たぶん、それしかないかもね。」

ここは別の意見をいう。

「タイガー2型はまりちゃんのイメージで、T-34はりとちゃんのイメージだったんだけど。」

まりが変なことを言う。

「でも、体の中からT-34にしろという声が聴こえてくるの。」

「そうなの？ やっぱりここが一番頑丈なものがいいと思う。だから、初めの案で行こう。」

ことも同意する。

「わかったー。二人がそう言うなら、そうする。」

まりが動かし方を聞く。

「でも、これどうやって動かすの。」

「簡単だよ。左右2本のハンドルを前後させると、それぞれのキャタピラが前後に動く。」

「なるほど。」

「左右のペダルがブレーキになっている。砲塔は左ハンドルのジョイスティックで動かせる。そのジョイスティックの2つのスイッチで、それぞれ主砲と同軸の機銃が発射できる。右ハンドルのジョイスティックとスイッチで砲塔の上の銃座を遠隔で動かしてビーム弾を発射できる。リモートウェポンシステム、RWSって言うの。」

「ちよっと、複雑ね。」

りとは、早速動かしてみようとする。

「ちよっと動かしてみるね。その方が早い。」

そういうと戦車に乗り込んだ。ことが説明を追加する。

「運転席は砲塔と一緒に回らないところにあるよ。外部の様子は運転席のディスプレイを使って。照準はモノアイディスプレイに表示されるよ。」

りとが戦車の中に入ると、運転席の上にマニュアルが置いてあった。それを手に取って運転席に座った。運転席の周りを見渡すと、ここが説明した以外にも多数のスイッチがあった。りとはマニュアルを見ながら確認する。メインスイッチ、エンジン始動スイッチ、室内の電灯、空調の他、ビーム攪乱幕発射スイッチや、逆に攪乱幕を吹き飛ばすためのファンのスイッチなどが設置されていた。最初に、メインスイッチをいれた。運転席を囲んで配置してあるディスプレイが周りの様子を映し出した。まりやことが左側からこちらを見ているのが見えた。ガソリンエンジンの始動スイッチを押す。スターターの音と共にエンジンが回り出した。同時に、主砲、散弾発射装置にエネルギーを供給する反応炉が始動した。

「反応炉のエネルギーを駆動に使わないところが、ここらしいか。」
りとは少しあきらめ顔で思った。外からここが話しかける。

「りとちゃん大丈夫？」

「うん、マニュアルもあったから、だいたいわかる。ちょっと前進してみるね。」

りとは運転席の両側のレバーを前に押し出した。そうすると、戦車は後ろに進みだした。ここが叫ぶ。

「わー、危ない。」

りとは急いでフットブレーキを踏んで、戦車を止めた。止まったのは、後ろの戦車にぶつかる寸前だった。

「ごめんごめん。レバーの方向が逆だった。ちゃんと、マニュアルを読まなくっちゃ。」
今度はレバーを引いて前進を開始した。そして、どンドン前に進んで右に曲がって見えなくなってしまった。まりがあきれる。

「全く。ここ、りとの位置は分かる？」

「うん、いまキャットストリートをこちらの方向に進んでいる。もうすぐ戻ってくると思うよ。」
まりは、りとのまま一人でスクーパーズに突っ込んで行くんじゃないかと心配していたので、それを聞いて少し安心した。りとは右折4回でキャットストリートを通って1周して、最後はバックしながら戻ってきた。ここに戦車の中から話しかける。

「うん、だいぶ慣れた。すごくいい。」

「りとちゃんすごいね。運転、もうマスターしちゃった。」

「簡単だよ。次は主砲を撃ってみる。」

りとは砲身を上に向けて、主砲のビームを発射する。

「主砲、エネルギー充填よし。照準。」

そうは言っても、特に照準を合わせるものがなかった。とりあえず、主砲軸線上に建物がないことを確認して発射することにした。

「発射。」

ビームが発射され、ビームは天井に当たって跳ね返されていった。その後、主砲同軸の機銃や、

砲塔上部のリモートウェポンシステムの機銃の試射を行った。

「うん、これならいける。」

まりが戦車に乗り込みながら提案する。

「私たちも練習しないと。」

りどが答える。

「じゃあ、ついてきて。さっきの道を一周してみよう。」

「ゆっくり行つてよ。」

「わかっている。」

ことも戦車に乗る。

「まさか、本当に戦車に乗れるとは思わなかったよ。」

全員が乗車し、マニュアルを読んでスイッチの位置を確認した。まりが声をかける。

「それじゃあ、練習に出発しようか。」

りどとことが答える。

「わかった。ゆっくり行くね。」

「バンツァーフォー。」

りどがゆっくりと前進を始めた。そして、同じコースを少しずつ速度を上げながら何周もまわった。途中少し広いところで戦車を止め、りどは全員が射撃練習を行うことを提案した。

「まり、射撃練習をしよう。まりが指示を出して。」

「そうね。でも今回の指示はここからの方がいいんじゃない。戦車に詳しくさうだから。」

「そうだね。まりの言う通り。ここ、指揮をお願い。」

「わかった。やってみるよー」

まりが目標に困る。

「射撃練習といつても、原宿のものはあまり壊したくないし、目標がないわね。」

「さっきもそう思った。さうだ、囲いに標的になる絵を描いてくる。」

「大丈夫？」

「大丈夫。」

「わかった、りどに任せる。でも標的なんだから、あまり熱心にならないでね。」

「うん。じゃあ、行ってくる。」

新宿側の囲いまで到達すると、戦車が見える高さまで上昇した。

「ここなら方が一ビームが囲いを抜けても、東京に被害は起きないよね。高いところにいるとスクーパーズから見られそうだから手早く描かなくちゃ。」

りどは、急いでスクーパーズの駆逐艦と戦艦の絵を描いた。

「でも、これだけだと、やっぱり殺風景。」

それで、宇宙船の周りに木や花、太陽を描いた。

「いい感じ。」

りとは急いで、まりとことこの所に戻って行った。まりがりとを迎える。

「やっぱり、りとね。」

「なんで。」

「スクーパーズの宇宙船まで可愛くなっちゃう。」

「ことこも同意する。」

「うん、なんか標的にするのがもったいなくなっちゃった。」

「二人とも、気にしなくてもいいよ。アマツマラの道具があれば、あのぐらいの絵ならばいつでも描ける。」

その言葉で、まりが気を取り直す。

「そうよね、今はスクーパーズを追い出すことに専念よね。じゃあ、戦車に乗って練習を再開するわよ。」

「了解。」

「ラジャー。」

3人が戦車に乗り、エンジンをかける。M4とタイガー2型はガソリンエンジンをT-34はディーゼルエンジンを始動する。そして、まりがことこへ呼びかける。

「じゃあ、ことこ、指揮をお願い。」

「わかった、タイガーからM4へ、タイガーからM4へ。M4は100m前進。右の小型宇宙船エンジンを攻撃。タイガーからT-34へ、タイガーからT-34へ。T-34は75m前進、タイガーとともに左大型宇宙船エンジンを攻撃する。攻撃終了後は直ちに現在地に戻れ。」

「M4了解。」

「T-34了解。」

「主砲へのエネルギー充填始め。移動開始！」

「M4了解。」

「T-34了解。」

3台の戦車が所定位置についた。

「M4、T-34目標へ主砲照準。」

「M4射撃準備完了。」

「T-34射撃準備完了。」

「M4、T-34撃て！」

3台の戦車の主砲が発射される。ビームは目標にプラスマイナス1mぐらいの精度で命中した。

「M4、T-34初期位置へ戻る。」

3台の戦車がPARKの前に戻った。人が変わってしまったことが今の行動を評価する。

「M4前に出すぎだ。T-34行動が遅い。もっと迅速に動け。」

ここはすかさず次の行動を指示する。

「次は、キャットストリートから攻撃する。射撃精度の問題で、まだお前らには行進間射撃は無理だ。したがって、停止から射撃までの時間を詰めるぞ。」

「M4はT-34、タイガーを先導。タイガーから停止の合図があるまで、キャットストリートを前進せよ。」

「M4了解。」

「T-34了解。」

「主砲へのエネルギー充填始め。目標は追って指示する。移動開始！」

りとを先頭に、3台の戦車が移動を開始する。角を2回曲がって、キャットストリートに入る。

「M4、T-34目標は前回と同じだ。」

「M4、T-34停止、撃て！」

3台の戦車が停止して射撃をする。T-34の発射が遅れ、弾も大きく外れた。

「M4、T-34、300m後退し停止。」

3台の戦車が後退し停止する。

「T-34何をやっている。照準が遅い上に不正確だ。そのつけは、我々の血で払うことになるんだぞ。もう1回同じ行動を繰り返す。一旦PARK前に戻る。M4は先導しろ。」

まりが不思議にそうにここに話しかける。

「ここ、どうしたの？」

「T-34不用意な会話をするな。それに私はここではない。デリカ・ヘクセライド。」

「はい？」

「それより、M4何をしている。直ちにPARK前に戻れ。」

りとも何か変な感じがしたが、オタク的な何かかかと思っただけで従うことにした。

「M4前進開始。PARK前に戻ります。」

まりがりとに話しかける。

「ここ、おかしくない？」

「前に戦車アニメにはまっていたから。」

「そうか。デリカ・ヘクセライドはそのアニメの登場人物かな。」

「T-34、M4不用意な会話は止めるというのがわからないのか。帰ったら営業にぶちこむぞ。」

「こちらM4、申し訳ありません。敵らしき影を見つけたので、T-34と確認していました。」

「そうか、敵を発見したら、まずは私に報告しろ。T-34もいいな。」

「こちらT-34、了解しました。」

こんな調子で1時間ぐらい機動と射撃の訓練を繰り返したあと、PARKに戻ってきた。

「M4、T-34これで訓練を終了する。M4だいたい腕を上げたな。特に機動性が素晴らしい。」

その機動力は遊撃には最適だ。」

「こちらM4、有難うございます。」

「T-34もだいぶ良くなった。これなら作戦で十分役に立つ。」

「こちらT-34、有難うございます。」

「では総員下車。1時間の休憩後、作戦行動を開始する。」

「わかりました。」

3人が戦車を降りた。まりがここに話しかける。

「ここ、何なの、デリカ・ヘクセライって。」

「ここが普通に返事をする。」

「デリカ・ヘクセライ？何？洋服のブランド？」

「ここが言ったんじゃない。私は、デリカ・ヘクセライだ、って。」

「えー、知らないよ。私が言ったのー？」

「戦車物のアニメのキャラか何かじゃないの？」

「そんなキャラ知らないよー。」

あまり物事を気にしないりとが止める。

「まあ、いいじゃない。ここのおかげで戦車の操縦だいぶ上手くなった。」

「それはそうだけれど。」

「今は、休もう。」

「そうね。ラフォーレを取り返して、原宿からスクーパーズを追い出すんだもんね。」

「そう。ここも頑張ろう。」

ここは答えなかった。不思議に思っ、りとが問いかけた。

「どうしたの、ここ。何か心配事？」

「デリカ・ヘクセライ、どこかで聞いたことがあるような気がして。」

「そうかもね。今はいいよ。気にしなくても。」

「それに、思い出そうとしているんだけど、この1時間の記憶がないんだよー。私、大丈夫だった。」

「えっ、この1時間の記憶がないの？うん、でも、なんか軍人さんみたいだった。大丈夫？なんだろう。これもアマツマラの力で、スクーパーズの軍人としての情報が取り込まれたのかな。」

「そんなことあるのかなー。落ち着いたら調べてみるけど。やっぱり少し心配だから、今回の作戦ではまりちゃんが指揮を取って。」

「わかったわ。戦車隊の指揮なんてしたことがないけれど、やってみる。」

「まりちゃん、ありがとう。これで安心だよー。」

りとが休憩を促す。

「まり、ここ、話しがまとまったところで、PARKで休もう。」

「わかったわ。」「わかったー。」

スクーパーズ側でも、朝から攻勢のための準備を進めていた。ガーチューンがアルドアに尋ねる。

「どうだ調子は。」

「順調です。昼までには3台の主砲を用意できると思います。」

「そうか、そのころまでには第11連隊も到着することだ。第11連隊と作戦の分担を決めて、午後には作戦を執行する。」

裏原に隠れていたゴモは囲いに描かれた絵を見て楽しんでた。戦艦と駆逐艦を木や花が飾っている構図が興味深かった。しかし、その後、道を走る砲を装備した乗り物や、それが絵に向けて射撃するのを見ると、絵を鑑賞している余裕が無くなったことを自覚した。

「あの絵は砲撃の練習用の標的なのか。早く連隊に伝えないと。」

ゴモは東急プラザに向かい、仲間をテレパシーで呼び出した。

「こちらは第111分隊のゴモです。聞こえますか？こちらは第111分隊のゴモです。聞こえますか？応答して下さい。」

「おおゴモか。ガジメだ。今裏原から聴こえてくる音の正体のことだな。」

「はい、そうであります。」

「あれは、ビーム砲か。」

「はい。敵はビーム砲を搭載した乗り物を用意しています。裏原の道走って、射撃練習をしているようです。」

「そうか。」

「ただ、空を飛ぶことはできないようです。」

「そうか。スクーパーズには飛べない乗り物など考えられないが、人間は飛べないために、そういうものも考えるのだろう。」

「はい。」

「それで、いつ頃こちらを攻撃してくると思う。」

「わかりません。直ちに攻撃してくるか、明日以降か。」

「そうか、わかった。それでは監視を続けてくれ。敵がこちらに向かうようならばすぐに連絡をしてくれ。」

「わかりました。」

ガジメはそのことをすぐガーチューンに報告した。ガーチューンは敵の攻撃ポイントはラフォーレだと考えた。理由は分からないが、今までの戦闘から敵がラフォーレに固執していることは明らかだった。

「ラフォーレ1階に防弾板を多数用意しろ。ビーム攪乱幕のタンクも増やせ。各階にも設置して

いる防弾板とビーム攪乱幕タンクの数を増やせ。足りない場合は、竹下通りから運び出せ。竹下通りにはビーム攪乱幕のパイプラインが多数設置されているからなんとかなる。押し返すのが無理でも、少しでも時間を稼ぐんだ。」

ガーチューンが第1中隊に命令する。

「敵は、たぶん間もなくラフォーレに攻め入ると考えられる。第1中隊にはラフォーレの守備を命じる。ただし、これは遅滞戦闘だ。犠牲を最小にしつつ、相手の占領を遅らせるんだ。ビーム攪乱幕を有効に使い。無理はするな。中隊の判断で撤退して構わない。」

ガジメが質問をする。

「ゴモは敵の兵器にはかなりの防御力があると推測しています。ラフォーレでなく、迂回して竹下口の入口を制圧されて、外部と遮断されるとやっかいなことになります。」

「軍事的な常識ではその通りだ。その戦術を取られると、ビーム攪乱幕のパイプや戦艦の主砲のパワーラインも切られ、我々には反撃の手段さえ無くなってしまう。何もできないまま、全滅する可能性も高い。」

「はい。それに、あの入口を抑えられると、第11連隊が救援に来ることもほとんど不可能になると考えられます。」

「ガジメの言うことは正しい。しかし、理由は分からないが、敵はラフォーレに固執している。そのため最初にラフォーレを攻撃して来る可能性が高いと考えている。敵はラフォーレの占領後、明治通りから竹下通りに入ってくると思う。確証はない。もしかすると、希望的観測なのかもしれない。もし、先に入口を抑えてくると想定するならば、我々は王女様の救出を諦めて、直ちにこの囲いから撤退する他はない。」

「了解しました。私も、敵のラフォーレへの固執は感じております。ラフォーレでこちらの攻撃準備が整うまで遅滞戦闘に努めます。」

「頼む。」

第1中隊がラフォーレに集まり、竹下通りに置かれていた防弾板やビーム攪乱幕のタンクをラフォーレの後ろの入口から搬入し、各階に設置し始めた。ラフォーレ屋上にいた第111分隊隊員に対してガジメが作戦について説明した。

「ゴモからの情報により、敵は新たな武器を使ってラフォーレに攻め入ることが予想される。こちらの戦艦の旋回主砲を利用する準備がまだ整っていない状態では、敵の武器を撃破することは難しい可能性がある。その準備が終わるまで、戦闘を長引かせることが今回の作戦の目的だ。第1中隊全体がその任に就く。各小隊が各フロアで迎え撃つ。我々は遊撃が任務だ。状況に合わせて、階を移動して迎え撃つ。建物両サイドの窓は開くようになっているので、そこから移動と撤退ができる。現在の戦艦の主砲の準備から考えて、何とか昼ごろまで長引かせる必要があるが、戦闘においては必ず退路を確保し、犠牲は最小限にするように心がける。」

第111分隊の全員が答える。

「わかりました。」

ワクチュン一等兵がゼクール上等兵に話しかける。

「一筋縄では行かしてくれないですね。」

「そんな戦争では当たり前のことだよ。だけど、ここで敵を撃破できれば、それが無理でもラフォーレ内に足止めできれば、王女様のまわりに敵がいなくなって救出が楽になる。」

「上等兵はいつも積極的ですね。見習いたいと思います。」

ガジメが割って入る。

「ゼクール軍曹、すまん、取り込んでいたので忘れていた。」

「軍曹？」

「ああ、お前の活躍が認められて、昇進の通知が来た。今は昇進式はできないが、おめでとう。これが辞令だ。」

「有難うございます。当たり前のことをしていただけですが。」

「いや、あの活躍はなかなかできるものではない。誇っていいぞ。あとゴモも昇進して、上等兵だ。」

分隊の全員がゼクールを祝福する。ゾロモも祝福する。

「同じ階級ね。この作戦頑張りましょう。」

「有難うございます。はい、いつも後方からゾロモ軍曹の支援がありますので、私は前で本当に安心して戦えます。」

「無理はしないでね。」

「はい、わかっています。」

ガジメが話を戻す。

「ゼクルールの言う通りだぞ。王女様の周りに敵がいなくなることは、救出のチャンスでもある。迎撃する場所、攻守切り替えのタイミング、戦艦の主砲の準備ができたら、主砲との連携が重要になる。ワクチュン、連隊との連絡をしっかり頼むぞ。」

「はい、分かりました。」

そして、第111分隊は、まりとりとがあけた屋上の穴を通って、ラフォーレ6階のホールで待機した。ラフォーレの中では、第1中隊隊員が強力な敵を迎え撃つ気持ちを高ぶらせるために、千年以上前に作られたと伝えられる曲「美しき母なる星スクーパーズ星」を歌う声が鳴り響いていた。到着した第111分隊隊員も、それに合わせて歌い始めた。ゼクールは王女様のことを考えながらつぶやいた。

「早く来い。」

PARKでは、出発の時間を迎えていた。りとがみさに話しかける。

「今からラフォーレに行って、ラフォーレをスクーパーズの手から奪還してくる。そして、スク

ーパーツを地球から追い出す。だから安心して地下室で待ってて。」

「わかったですな。行ってらっしゃいですな。」

みきは力なく答えた。りとは、昨日のことがあったからと思っ、あまり気にはしていなかった。それより、相手の特に速いスクーパーズの出方と対処を考えていた。

「ことこのおかげで、サイコレセプターの反応が速くなって、だいぶ自由に動かせるようになった。逆に私の方がまだまだだけど、これでなんとかしなくちゃ。」

まりが出発の準備の号令をかける。

「それじゃ行くわよ。先頭は私、ことが真ん中で、りとは最後をお願い。」
りとは反論する。

「ことが真ん中なのは分かるけど、私が先頭に行く。」

「うーん、それだと、りとは先走りそうだな。りとはいなくなると、ことが先頭になっちゃう。

ラフォーレまでは私が先頭に行く。ラフォーレに入ったら、ことが1階入口を抑えて、りとは先頭。私は両者の間を繋ぐ。」

「さすがはまり。いつもの通り良く考えてある。わかった。まりの作戦で行こう。」

「それでは全員乗車。」

「了解。」「わかったー。」

3人が戦車に乗り込む。まりが通信装置で連絡をとる。

「りと聞こえる?」

「聞こえる。」

「データリンクも大丈夫ね?」

「大丈夫。」

「ここ聞こえる?」

「うん、良く聞こえる。データリンクもバッチリー。」

「わかった。それでは前進開始。ゆっくり行くよ。」

「了解。前進!」「パンツァーフォー。」

まりのT-34を先頭に、タイガー2型、M4シャーマンが続いた。ことが、パンツァーリートを歌い始めたが、りとつまりは歌を知らなかったため、足踏みで拍子をとった。

遠くから3人の様子を観察していたゴモは、戦車3台がキャットストリートを横切ったとき、今度は明治通りの西側に向かうことを確認して、隊への連絡を急いだ。戦車がキャットストリートを渡る間、防衛線の機能が止められていたため、簡単に渡ることができた。そして、先回りして東急プラザの脇に到達して、連隊にテレパシー通信を入れる。

「分隊長!ガジメ分隊長!聞こえますか。敵がやってきます。」

「ゴモ、ゴモか。どんな様子だ。」

「敵は装甲が施された乗り物3台に乗って地上をやっつけてきます。目標はラフォーレだと思われ
ます。」

「そうか、連隊長の予想通りだな。こちらでも迎撃の準備はしている。」

「わかりました。敵が明治通りを渡るときには、防衛線の攻撃が止むと思います。そのときに、
そちらに合流します。」

「頼む。我々は運び込んだ戦艦の主砲の準備が完了するまで時間稼ぎをしなくてはいけない。」
「運び込んだ戦艦の主砲？よく分かりませんが、遅滞戦闘のお手伝いをします。」

「こっちでも、何かが近づく音が聞こえてきた。こっち側に来たら、裏手から屋上に上がり、ラ
フォーレ6階のホールに来てくれ。」

「了解です。敵の隙をみて、6階のホールに向かいます。それでは、ホールの合流まで通信を切
ります。」

「ホールで会おう。」

明治通りの前に到達したまりが指示をする。

「明治通りで3台が横に並んで射撃後、ラフォーレに突入するわよ。ラフォーレでは、手筈通り
先頭はりと、ここは1階からスクーパーズが入るのを防いで。」

「了解。」「わかったー。」

3台の戦車が明治通りで横に並んだ。まりが、攻撃開始を指示する。

「射撃用意。目標、ラフォーレ入り口に設置されている装甲板。照準。」

「照準よし。」「照準、大丈夫だよ。」

「発射。」

「発射。」「ファイエルン。」

戦車からの射撃で装甲板が吹き飛んだ。中のスクーパーズは大騒ぎになった。まりが、再度射撃
を指示する。

「次は、ラフォーレ内部の装甲板に向けて発射。」

「発射。」「ファイエルン。」

建物内部に設置されていた装甲板も吹き飛んだ。無事だったスクーパーズたちは、上の階や横の
通路に避難したが、気を取り直して、戦車への攻撃が始まった。前や上、左右からスクープビー
ムが飛んできた。しかし、戦車は無傷だった。まりがそこをほめる。

「やったわね、ここ。完璧な防御力。」

「えへへ。有難う、まりちゃん。」

「それじゃあ、ラフォーレに突入するよ。」

りとが答える。

「今度は、私が先頭ね。」

りとの戦車がラフォーレ1階に突入し、まりとここが続いた。戦車に向けてビームが放たれた

が無傷なため、スクーパーズたちはすぐに逃げて行った。まりがりとに指示する。

「りとはフロアの右を見てきて。私は左を見てくる。ここは入り口を見張っていて。」

「了解。」

「わかったー。ビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンを作動させるよ。」

「お願い。」

ことがファンを作動させると、視界がだんだん開けてきた。まりとりとが、通路に入っていた。スクーパーズはファンが動作すると退避していったため、抵抗なく建物の端まで到着したりとがあまりに連絡する。

「こつちにスクーパーズはいない。」

「こつちもそう。それじゃあ、まず、地下を制圧しましょう。」

「ここを残していくのは心配だけれど、了解。」

2台の戦車が階段を降りて行った。

司令部に、戦車の映像や情報が届いた。ガーチューンはいそいで戦艦主砲の移設作業をしているアルドアのところへ持っていき、緊急に指示を出す。

「アルドア、これが敵の武器だ。作業中で申し訳ないが、至急対応を検討してくれ。」

「わかりました。戦艦主砲の移設は部下に任せて、至急対応を検討します。戦艦のパワーラインと同時に通信ケーブルを引いていましたので、それで戦艦のコンピュータを使わせてもらいます。」

「頼む。急いでくれ。」

早速、アルドアは戦艦のコンピュータにアクセスして分析を開始した。武器の威力、装甲の強度などを計算した。装甲はスクープビームで破壊できそうもなかった。唯一、地面に接している帯状のもの（履帯、キャタピラー）の継ぎ目が弱点で、そこにスクープビームを当てれば、動きを止められそうなのがわかった。その結果をガーチューンに伝えた。そして、ガーチューンは、いそいで、ガジメに連絡する。ワクチューンがガジメを呼び出す。

「分隊長、連隊長から連絡が入っています。」

「わかった。」

そう言って、ガジメは回線を受け取った。

「ガジメ、よく聞け。敵の武器の弱点を伝える。ただ、実行はかなり困難だ。それをできるのは、ゾロモだけだと思う。」

「わかりました。どんな作戦でしょうか。」

「敵の武器が進むために使っている、帯状のものがあるだろう。その継ぎ目が弱点とのことだ。そこを狙って、スクープビームで撃つてくれ。それで、敵の武器は動けなくなる。」

「了解しました。あの強力な武器の動きさえ止めることができれば、だいぶ楽になります。」

「頼む。」

ガジメが分隊員を集め、作戦の趣旨を説明した。そして、最後に付け加えた。

「この作戦は、分隊全員で行う。ゾロモ、ゼクール、ゴモ以外の隊員はゾロモをカバーする。敵の砲の威力から考えて、我々のサイコバリアーではどうにもならない。今回は、ゼクール、ゴモは休んでいろ。それ以外の隊員は、ゾロモが敵に見つかった場合に多方向へ退避して敵の照準をゾロモからそらすんだ。いいな。」

「敵の照準をこちらに引き付ければ良いわけですね。はい、わかりました。」
ゼクールだけが反論する。

「私も、行きます。」

「いや、敵の兵器自体を破壊できるわけではない。ただ、動けなくなったら必ず棒人間が外へ出てくる。そのときが、お前の出番だ。それまで6階で待機していろ。」

「わかりました。分隊長は。」

「おれは、少し離れたところで指揮をとる。あの武器が動けなくなったら呼び出す。それまで待っている。」

「わかりました。」

ゼクールはあまり良い予感がしていなかったが、6階で待機することにした。

りととまりが、地下0.5階に降りた。地下からは逃げるところがないため、何体かのスクーパーズが残っていて、攻撃を仕掛けてきたが、戦車の装甲を破ることができず、砲塔上のRW S（リモートウェポンシステム）で簡単に制圧することができた。ファンを使ってビーム攪乱幕を吹き飛ばし、赤外線画像でスクーパーズがいないことを確認しながら、フロアを制圧した。そして、地下1階、最下階の地下1.5階のフロアを制圧した。

ガジメの分隊は、ラフォーレ通路の北側の壁の穴から1階に入って行った。ファンのために、ビーム攪乱幕はなかったが、お店の商品に隠れながら接近した。そして、タイガー2型が見える位置に来ると、攻撃を指示した。

「射撃が確実な位置まで、おれとゾロモが前に出る。もし、敵に気付かれたら合図するから、敵を攪乱するために全員一度前に出てから退避しろ。ゾロモ、そうになったら俺たちは全力で下がるぞ。」

「わかりました。」

ガジメとゾロモが少し前に出た。

「ゾロモ、目標は1センチメートルぐらいしかないが、当てられるか？」

「はい、静止していますので、可能と思います。」

「撃ったら、後退する。」

「はい。」

「撃て！」

ゾロモがスクーパービームを発射する。狙い通り帯輪ピンに当たり、履帯が切れた。

「総員撤収！」

ガジメの指示と共に全員が来た道を急いで撤収した。

ここが1階入口の方を監視していると、左後ろの方で軽いショックがあった。そちらの方向を見ると、スクーパーが逃げていくところが見えた。

「追わなくちゃ。」

エンジンをふかして追おうとしたが、戦車が回り出した。

「あれ、あれ。」

前を見ると、左側の履帯が外れていくのが見えた。

「履帯を切られたのかー。」

ここはエンジンを停止して、りととまりに連絡した。

「りとちゃん、まりちゃん、履帯、キャタピラがスクーパーに切られて動けなくなっちゃった。

気を付けて。」

りとが尋ねる。

「大丈夫？」

「うん、車体は無事。切ったスクーパーは逃げて行った。りとちゃんたちは、そのまま作戦を続けて。」

まりがりとに話しかける。

「私と撃ち合ったスクーパーかな。」

「そうだと思う。あのスクーパーはとても射撃が正確。どうする。」

「地下の制圧は終わったから、1階に戻るわ。」

「うん、それがいい。」

2台が1階に戻ってきた。りとがここに尋ねる。

「ここ、どう？」

「動けなくなっちゃった。アマツマラで直すには、全部作り直しになっちゃう。それに、また履帯を切られるかも。」

「そうか。」

「ここで、入口を見張っているから、りとちゃんとまりちゃんは上の階を制圧してきて。そして、全部制圧したら、建物に散弾発射装置を設置して、スクーパーが近寄れないようにするよー。」

「わかった。」

まりも同意する。

「とりあえずスクーパーのビームでは装甲は打ち抜けないようだから、このまま作戦を続けましょう。」

「了解。ここ、周りを見て、何かあったらすぐ連絡して。」

「わかったー。大丈夫だと思う。全周を監視しているよ。」

「そうして。できるだけ急いで制圧する。」
りとがあまりに話しかける。

「スクーパーズが少しだけ残って攻撃してくるけど、目的はなんだろう。」

「無理に攻撃を続けなくてもすぐに撤退しているわよね。うーん、時間稼ぎじゃないかな。」

「やっぱり、そうか。とすると、稼いだ時間の後に、何かあるということ。」

「もう、本当にしつこいわね、スクーパーズ。」

「うん。だけど、今はラフォーレを取り戻す。」

「賛成。じゃあ、上の階に行くわよ。」

2台は1. 5階に上がった。1. 5階のスクーパーズはすぐに逃げて行った。そして、2階、2. 5階、3階と制圧していった。スクーパーズの抵抗はなかった。3階の制圧が終わったところで、りとがあまりに提案をする。

「このまま進むと、2台ともことこの距離が遠くなりすぎると思う。まりは3階にいて。私が上の階を制圧する。」

「1台で大丈夫？」

「うん、なんとかする。」

そして、りとは3. 5階の制圧を開始した。まりも、慎重に周辺の監視をしていたが、店のものが多数あり、完全に見張ることはできなかった。そしてその時、かん高い「カン」という音がして、右後ろからショックを感じた。戦車を動かそうとしたが回転するばかりで、外を見ると履帯が外れていくのが見えた。

「りと、りと、ごめん。私もキャタピラーをやられた。今は動けない。」

「大丈夫？」

「撃った奴らはすぐに逃げて行った。」

「わかった。気を付ける。」

「ただ、洋服の店の中から撃ってくるから、赤外線でも発見が難しいわ。」

「どうしようか。」

「ここにも攻撃はないようだから、このまま作戦を続けられる？」

「うん、ここで逃げてでも振り出しにもどるだけだから、やってみる。私の戦車の履帯も切られたら外に出て戦うだけ。ことこのおかげで、ボードの反応速度が上がっているから、なんとかなる。」

「慎重にね。」

りとは4階に上がり、4階の制圧を開始した。まりは4階フロアの配置を考えていた。

「りとどの戦車を狙うとしたら、どこから狙うかな。やっぱりファッションの店だわよね。前列のふわっとしたスカートの後ろ。とすると、あそこかな。ここから狙えるかな。」

まりはその位置に戦車砲の照準をつけた。1階上だけれど、そのフロアの下を狙うことができた。りとが4階の制圧をしている途中、やはり「カン」という音がした。まりは間髪入れず戦車砲

の引き金を引いた。

ガジメの部隊は、1階の敵の移動兵器を動けなくした後、偵察をしている他の分隊からの連絡で、3階で停止している敵の兵器を攻撃することにした。ビーム攪乱幕はかなり薄かったが、敵の移動兵器の観測装置が回る隙間を利用して、ガジメとゾロモが移動兵器に対して射線がとれる店の中に隠れることができた。そして、最前列の大きな服のすぐ後ろに前進した。観測装置が、反対側を向こうとしたときガジメが命じる。

「撃てー！」

ゾロモのビームが正確に履帯のピンを打ち抜き、3階の兵器も動けなくなった。ガジメが撤収を命じる。

「下がるぞー！」

「はい、分隊長。」

「さすが、ゾロモだ。やったなー！」

「有難うございます。」

「あと1台、いくぞ。」

「はい！」

一度、ラフォーレの外に出た。そこで、もう1台の移動兵器が4階に上がった報告を受けた。4階に入ると、その1台は反対側に向かっていたため、容易に店の中に隠れることができた。やがて、その戦車が戻ってきた。少し離れていたガジメが少し前に出て指示をする。

「俺が様子を見る。ゾロモは隠れてろ。」

「わかりました。」

ゾロモは、そういつてスカートの後ろに隠れた。

「綺麗な色、面白い柄。今度、着てみようかな。」

そんなことを考えながら、ガジメの指示を待った。

「よし、撃てー！」

ガジメから指示が来た。半身を乗り出して照準し、得意の細くて強力なビームを発射した。ビームは狙い通りに飛んでいき、正確に履帯のピンに命中した。

「やったー！」

ゾロモが喜んだ瞬間、下から強力なビームが床を突き抜けてゾロモを貫通した。ガジメはビームが床や天井を突き抜けるときの衝撃で吹き飛ばされた。

「ゾロモ。」

ガジメは叫んだが、ゾロモはガジメの方を見ながらも、何も言い残せず消えて行った。吹き飛ばされたガジメは、店の中の壁に当たって止まった。サイコバリアーのために怪我はなかった。ゾロモが消えたことを悲しむ時間はなかった。残った隊員に命じた。

「敵の移動兵器から距離をとって隠れる。」

移動兵器も回るだけで、動けなくなったことを確認したガジメがワクチュンに命じた。

「ゼクール、ゴモを呼び出せ。4階の外、北側で待機するように連絡してくれ。やつが出てくる。」

「わかりました。」

ジャモチャは、リコに続いて女性隊員のゾロモが消えてしまったことに衝撃を隠せなかった。

「このやろう。」

砲撃のために4階フロアにあいた穴から、まりの戦車の方に向かって行った。ガジメは止める。

「戻れ。隠れて相手の様子を見るんだ。戦闘の目的を忘れるな。」

「大丈夫です。3台とも動けません。死角から狙ってみます。」

「わかった。まかせる。だが、無理はするな。」

「わかりました。」

ジャモチャはまりの戦車に取り付き、同じところに何度も何度も、何回も何回もスクープビームを撃ちこんだ。

「この。この。この。」

装甲がだんだんと赤くなってきた。

「生きてる限り、何度でも撃ってやる。」

履帯を切られたりとがまりに連絡をした。

「私も履帯を切られて動けなくなった。でも、下から撃ったのはまり？戦車を撃ったスクープビームは消えたみたい。」

「ほんと？！良かった。隠れるなら、あそこかなと思って撃ってみたの。」

「うん、ドンピシャだった。ありがとう。スクーパーズは一度下がって様子を見ている。そっちはどう。」

「1体に取りつかれた。こちらからは、攻撃できない位置にいるわ。そして、ビームを何発も連続して撃たれている。」

「大丈夫？」

「だんだん、装甲が赤くなってきている。」

「ここ、まりの戦車だけ大丈夫。」

「同じところに300回ぐらい撃たれると、装甲に穴が開くかもしれないかな。」

「そうか。わかった。」

まりを助けるために、りとが車外に出ることを決心する。ただハッチから出ると集中的に狙われる可能性があった。

「ここ、戦車を壊してごめん。」

そう言いながら、りとは戦車の砲塔と車体の継ぎ目一周を切り裂き、砲塔を押し出しながら飛び出た。それを見た、ガジメがゼクールとゴモに言う。

「来るぞ。作戦開始だ。」

少しだけ離れた、3体がりると同時攻撃をかける。

「今日は、3体か」

りとはビームをかわしながら、真ん中のガジメに迫った。簡単にビームが当たるとは考えていなかったが、スピードを落とさずにガジメに迫るりを見てゼクルルが叫ぶ。

「分隊長、避けて下さい。動きが昨日より速いです。」

それを聞いたガジメは速めに退避行動を開始し、りとの攻撃をなんとかかわした。ゼクルルが後ろからビームを発するが当たらない。りとは反転してゼクルルに向かう。ゼクルルはビームを放つが当たる気はしなかった。

「じゃま。」

りとがゼクルルに迫るが、ゼクルルも早めに退避した。りとはゼクルルを追わずに、まりの方へ向かった。ガジメがジャモチャに連絡する。

「ジャモチャ、そこから離れろ、棒人間がそっちに行く。こちらでは抑えきれない。」

ゼクルルとガジメが追いかけながらりとを狙うが、ことごとくかわされてしまう。尋常な手段では勝てる相手ではないと悟ったゼクルルがガジメに進言する。私がああビームが出るタンクを抑えます。ビームの反対から出る移動用のガスジェットぐらいならば、私のバリアーで防げます。あとは、ゴモとで棒人間をお願いします。

「それは、危険すぎ……。分かった、頼む。」

尋常な手段では勝てないことはガジメもわかっていた。

ガジメから退避の指示が出されていたが、ジャモチャはまりの戦車にくっついたまま同じところにビームを撃ち続けていた。

「この。この。」

ビームが当たっている場所に、もうすぐ穴が開こうとしていた。

「あと、もう少し。」

りとがガジメ、ゼクルル、ゴモを引き連れてやってきた。ガジメが叫ぶ。

「ジャモチャ、そこを離れろ。」

ただ、ジャモチャは離れずにビームを撃ち続けていた。まりからりと連絡が入った。

「戦車に穴が開いたわ。私も外に出て戦う。」

「その必要はない。」

戦車に達したりとはジャモチャを右足で蹴とばした。装甲が弱くなっている戦車を傷つけるといけないと思って、ビームや棒は使わなかった。この階もビーム攪乱幕で煙ってはいたが、戦車の穴の方を見るとまりが少しだけ見えた。

「中にビーム攪乱幕を張って、穴から離れていて。」

まりに伝えた。りとは反転して3体の方に向かっていった。

「3体をここから引き離したけれど、穴の開いた戦車のまりをおいていくわけにもいかない。」

まりは車内に攪乱幕を張りながらも、RWS(リモートウエポンシステム)操作盤に飛びついた。「りとー!りとを援護したいけど、速すぎて狙えない。」

「じゃあ、銃身は固定して。その前を通るから、私の後を追うスクーパーズがいたら撃って。」

「わかった。」

まりは斜め横に銃身を固定して、射撃のチャンスを待つことにした。ガジメが叫ぶ。

「来るぞ。」

りとは一番強敵と思うゼクルルをルナ銃で狙う。

「まず、あいつ。」

ガジメとゴモが迎撃の準備をする。ゼクルルは少し上昇して、ビーム攪乱幕の濃い部分に隠れる。

「避けた。じゃあ、あいつ。」

りとはガジメを狙う。その瞬間、ガジメとゴモが射撃をする。りとは難なくかわしてルナ銃を撃とうとする。

「何?!」

ルナ銃が勝手に動き出したのがモノアイディスプレイの情報でわかった。ゼクルルがルナ銃を捕らえて、床に押し付ける。それを見たジャモチャが加勢して、銃身を抑える。ゼクルルがジャモチャに注意する。

「ジャモチャ、銃身を抑えると危ないぞ。」

「射線にはいないので、大丈夫です。撃ったら銃身が熱いかもしれませんが、離しはしません。」

バンクスもやってくる。ゼクルルが指示をする。

「おれを上から押さえろ。」

バンクスはゼクルルに覆いかぶさった。りとは推進用のガスジェットを最大出力で噴射してみたが動かなかった。ルナ銃を撃ってみたがやはり動かなかった。

「アチーな。」

ジャモチャはつぶやいたが、ルナ銃を離さなかった。ガジメとゴモは3体の前にいて、ビームを連射して、りとは3体の方に進めないようにしていた。

「絶対に前に進ませるな。」

りとは、ビームをかわしたり、棒やボードで防いだりしていたが、ビームが使えない状況で、前に進むのは危険だった。そして、ザトム、バンクス、ガビーも集まってきた。ガジメが指示をする。

「一斉射撃をするぞ。」

全員がりとを狙った。

「撃て!」

りとは一度棒を手放しまりの戦車の方に向かった。ザトム、バンクス、ガビーが、後を追った。ガジメが、大声で命じる。

「追うな。戦闘目的は遅滞だ。」

ザトム、バンクスは迷いながらも減速したが、だが、若いガビーは追うのに夢中でガジメの指示に気が付かなかった。ガビーたちはT-34のRWSの射線に近づいていった。りとがあまりに支援を依頼する。

「スクーパーズが射線に入る。お願い。」

「まかせて。」

RWSが火を噴いた。ビームがガビーに命中して消滅した。ザトムとバンクスは急停止して、なんとか射撃をかわした。ガジメから悲嘆の声が漏れる。

「ああっ。」

しかし、続けて命令を発する。

「全員退避だ。ゼクルルはやつタンクを持って行け。」

ゼクルルたちはルナ銃のタンクを抱えたまま、柱の陰に隠れた。ザトムとバンクスは棒の方を押さえた。まりは、RWSの銃口を前部に向け、再度射撃した。ただ、部屋全体がビーム攪乱幕で煙っているため、有効な攻撃にはならなかったが、スクーパーズをけん制することには成功した。まりがりとに指示する。

「砲塔のハッチの上に来て。リア銃を渡すわ。」

「ありがとう。」

そう言いながら、砲塔から顔を出しているリア銃を受け取った。

「モード6ポジション1でエネルギーは充填済みよ。」

「了解。」

りとは、棒を押さえているスクーパーズを狙った。それを見たガジメが指示を出す。

「やつは、ゼクルルたちを狙っている。棒をビームで吹き飛ばして、退避しろ。」

ザトムとバンクスが離れると、ゼクルルが棒をビームで吹き飛ばした。その瞬間、リア充の強力なビームが飛んできたが、ザトムとバンクスはぎりぎりビームを避けることができた。棒はゼクルルのビームで跳ね飛ばされてラフォーレの西側の壁に当たって床に落ちた。りとはまりから離れられないため、棒を取りに行くことはできなかった。ビーム攪乱幕のため、リア銃の1発は有効かもしれないが、散弾の有効性は低いと考えた。りとは戻って戦車の砲塔の後ろに立ちリア銃を持って、様子を見ていた。ビームがあまり有効でないことはスクーパーズも同じだった。そのため、柱の陰に隠れてりとの様子を見ていた。ゼクルルがガジメに尋ねる。

「どうします。」

「我々の目的は遅滞だ。向こうが動くまで様子を見る。」

りともまりに相談する。

「どうしよう。敵も接近できないみたいだけれど、こっちも動けない。」

「あまり時間をかけると、別のスクーパーズが応援に来るかな。」

「やっぱり、棒とルナ銃を取りに行くしかないわね。」

「私も出てリア銃で援護するから、取りに行ける？」

「でも、速いスクーパーズがいるから危ないよ。」

「大丈夫。そいつら、りとのストーカーのようだから、きつとりとを追いかける。」

「そうか。私がそいつらを引き付けばいいのか。わかった。」

まりはRWSを発射した。りとは、リア銃をまりに渡して、少しでも速度を落としてルナ銃に向かった。まりは、戦車からでて、通路の入り口まで進みながら散弾を乱射する。他の隊員がさらに奥の柱に退避する中、ゼクルルが叫ぶ。

「今、武器を持っていません。チャンスです。」

そう言っておりとを追った。ガジメがゴモに指示する。

「おれも追う。ゴモは、射撃手を頼む。」

「了解。」

りとが後ろを確認した。

「2体しかない。」

強敵の3体のうち1体はまりの方に向かったことに気づいた。

まりが散弾を射撃していると、スクーパーズ1体が散弾をかわしながら自分の方に向かってきた。た。

「りとが前にいる。ここで下がるわけにはいかないわ。」

ボードを自分の前に置いて盾にして、その1体に向けて散弾を集中して発射した。ゴモもビームをかわしながら接近していったが、接近すると散弾の威力も上がり密度が高くなるためあまり接近できないでいた。散弾の数発ならば大丈夫でも、近くから多数の散弾を受けると危ないと思えた。そのとき、ゴモにガジメから連絡が入った。

「棒人間がそっちに向かった。丸腰だが抑えきれなかった。」

りとはルナ銃を取りに行くことをやめて、ガジメとゼクルルの攻撃をかわして、まりの方に戻ってきたのである。りとはゴモに向かって真つすぐ向かっていった。ゴモは攻撃すべきかどうか迷ったが、退避することにした。りとはそれを見て、再度ルナ銃を取りに行こうとして反転したが、

「まって、つぎは3体でまりを攻撃するかもしれない。」

と思ったりとは再度反転して、まりに連絡した。

「今もどる。早く戦車の中に退避して。」

まりに状況はわからなかったが、りとの指示通り、戦車にのりこんだ。戻ってきたりとはルナ銃を持っていなかったため、まりがりとにリア銃をわたし、りとが再び戦車の砲塔の後ろに立った。ガジメがジャモチャとバンクスに命令する。

「2体で、棒を外へ運び出せ。」

様子を見ていたジャモチャとバンクスが、西側の壁に向かおうとした。それを見たりとは、ビー

ムをかわして3体が追いつく前に棒を取り返せると考えた。まりに告げる。

「少しだけ待って。少しだけ、戦車の中で待って。」

そして、リア銃をまりに返して、タイミングを計って西側の壁に向かってダッシュした。通路にでると、ガジメ、ゼクール、ゴモがビームを撃ってきた。りとはダッシュしたままビームをかわして、棒を取りに向かった。ゼクールは驚いた。

「3体のこの同時攻撃をかわすのか。」

ガジメは、ゼクールとゴモに命じる。

「ジャモチャがあけた穴から射撃手を攻撃するぞ。」

ゼクールが反対意見を言う。

「しかしそれでは、棒人間が棒を取り返して、ジャモチャとバンクスがやられます。」

「くそっ。」

ガジメには迷っている時間はなかった。すぐに戦闘の目的を思い出して指示した。

「ジャモチャ、バンクス、棒人間が追ってくる。作戦を中止して横に退避しろ。ゼクール、ゴモ、通路に攪乱幕をまけ。」

りとは先行するスクーパーズ2体を、ビームをかわしながら蹴り飛ばすつもりで接近していたが、その直前に2体は左右に分かれて隠れた。そのまま進んだりとはルナ銃に達するとそれを取って、まりのところへ急いで戻った。途中にスクーパーズがいたが、ビーム攪乱幕が濃いため攻撃してはこなかった。

「まり、ルナ銃を取り返してきた。」

「良かったわ。これで少し安心。」

「うん、手ぶらで突っ込むのは緊張した。でも、これで大丈夫。今度は棒を奪われない。りとはまた砲塔の後ろに立ったが、さっきよりかなり余裕があった。」

「今はあいつらをラフォーレから追い出すこと。」

すこし時間が経過した。何も起きなかったため、りと言おう。

「向こうは攻撃を仕掛けてくるつもりはなさそうだから、行ってくる。」

「でも、それは向こうの罠じゃない。」

「大丈夫、無理はしない。1体倒したら戻ってくる。もし危なくなったら呼んで。すぐに戻ってくるから。」

「うん、わかった。待ってる。」

「あと、ビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンもお願い。」

「わかった。」

ガジメが残った隊員全員に指示をする。

「棒人間が棒を取り戻した状況では、こちらから攻撃を仕掛けるのは無理だ。遅滞のため、隠れて待ち伏せをする。ジャモチャ、一番前で棒人間が来たら連絡してくれ。攻撃はしなくていい。」

連絡したら隠れる。攻撃は俺とゼクル、ゴモが担当する。他の隊員は、必要と判断した時に攪乱幕の援護を頼む。」

「了解しました。」

「いいか、退路を確保するんだぞ。それと、ビーム攪乱幕のタンクの場所を覚えて、逃げるときには有効に使いえ。」

「わかりました。」

全員がそう答えて配置に着いた。

階段のあたりにスクーパーズがいなかったため、りとはゆっくりと通路の方に向かい、通路の方をのぞいた。通路がビーム攪乱幕で煙っていた。

「まり、ファンをお願い。」

「了解。」

T134に備え付けられていたファンが作動して、後ろから風が来た。そして、通路の攪乱幕が少しずつ晴れて行った。通路の方を覗いたが、スクーパーズは見えなかった。

「待ち伏せをするつもり。」

通路だけ晴れていると不利と思って、まりに連絡する。

「ごめん、ファンを止めて。スクーパーズは隠れているみたい。」

「わかった。無理はしないでね。」

「うん。」

部屋から流れ込む攪乱幕のため、また、通路が煙っていった。

ゼクルがガジメに話しかける。

「慎重ですね。」

「待ち伏せをしているのが分かっているようだ。だが、そのうち仕掛けてくる。」

「その時がチャンスですね。」

「ああ、今度はあのビームが出るタンクを自分から離すようなことはしないと。今度は我々で近寄って3方向から攻撃する。」

「了解です。」

りとは通路の左端をゆっくりと進み始めた。ジャモチャがガジメに報告する。

「棒人間、前を通過しました。」

「了解。奥へ下がっていきな。」

「了解。」

ジャモチャが奥に下がって行った。そのとき、攪乱幕の煙が乱れたことを、りとは気付いた。そして、そちらを良く見るとスクーパーズが見えた。

「普通のやつ。でも、あれを追えば、あの3体が出てくるかもしれない。」

りとは、そのスクーパーズに迫って行った。ジャモチャもそれに気付いた。

「棒人間！」

ガジメに連絡した。

「棒人間、こっちに来ます。」

「いそいで、退避しろ。」

言われるまでもなく、ジャモチャは商品を挟んで棒人間の脇を通って通路に出た。棒人間も通路に出てきた。みんながいる方向にりとがいたので、反対側に逃げるしかなかった。それを見たりとが、まりに連絡する。

「まり、ごめん。1体がそっちにいった。」

「わかったわ。」

まりは、RWSで通路側を狙う。スクーパーズが1体来たので、それに向けて射撃した。ジャモチャは死角になっている下側にかわして、そのまますすぐ進んだ。まりは、りとが見えた瞬間に射撃を止めた。りとから連絡があった。

「まり、ありがとう。あとは任せて。」

ジャモチャは、低空を必死に逃げる。

「こんなところでやられてたまるか。リコのかたきを討つんだ。」

しかし、棒人間がどンドン迫ってきた。三日月のアクセサリーと星のアクセサリーを繋げたアクセサリーを見てつぶやいた。

「リコ、俺に力を貸してくれ。」

ゼクールがガジメに進言する。

「ジャモチャを助けに行きましょう。」

だが、ガジメは苦渋の決断を下す。

「こちらを誘いだす。棒人間がジャモチャ1体を追いかける理由はそれだろう。いま出ていくと、こっちが不利だ。」

ジャモチャもそれは分かっていた。

「よし、みんなちゃんと隠れてるな。よかった。じゃあ、行くぞ。」

ジャモチャは、逃げながら、スクープビームで店のものを手当たりしだい引き寄せると、反転させて、棒人間の方に加速させた。りとは、店のものをあまり壊したくないため、それを上手にかわしながら進んだ。それを見たジャモチャは驚いた。

「これかわせるのか。」

りとは、飛んでくるものをかわすため接近が遅れたが、スクーパーズのすぐそばにまで接近していた。りとはこのスクーパーズを早く片づけてまりの所に戻ることを、ジャモチャはなんとか一矢を報いることを考えていた。ジャモチャは、最後にまた店のものを引き寄せてりとの方に飛ばした。そして、一番たくさんの物を飛ばした後にディスプレイの棚の後ろに隠れた。棒人間がかわした瞬間に横から撃つつもりだった。しかし、冷静に見ていたりとはそれに気付いていた。

「あの後ろにスクーパーズ。」

そして、柵ごと棒で真つ二つにした。真つ二つにされたジャモチャはビームを放つことなく消えてしまった。

「リコ！」

他の隊員もその最期の声だけを聴くことができた。ジャモチャが消えた床には、三日月と星が二つに切り裂かれて分かれたアクセサリーが落ちていた。柵が倒れた衝撃でアクセサリーがまた転がって、壁の隅で重なつて止まった。

まりのところに戻ったりと言った。

「1体片づけてきた。商品が散乱しちゃったけど。」

「お疲れ様。片づけはお店の人に任せましょう。私たちじゃ配置が分からないし。」

「うん、今はスクーパーズを追い出すことが先。」

ゼクルルが上申する。

「今度は私が見張りに着きます。やり過ぎせたら、後ろから攻撃できます。そうでない場合も、私ならば逃げることはできると思います。」

「分かった。頼む。」

ゼクルルが前方の店の中に潜んで前の様子を見始めた。

りとがまりに尋ねる。

「ここは大丈夫？」

「うん、連絡は取っているけど、周りにスクーパーズが少しいても、今は様子を見ているだけだ。」

「そうか。良かった。」

「スクーパーズはこの階と、後は上の方の階にいるみたい。」

「こちらを攻撃してくるのは、あいつらだけということ。」

「そうみたいね。」

「あいつらさえ、何とかすれば、ラフォーレを奪還できるね。」

「うん。普通のスクーパーズならば、私でもなんとかできる。二人で追い出しましょう。」

「わかった。今はあいつらを1体1体片づけていく。」

「ごめんね。りとはっぴかり無理させて。」

「ううん、私が始めたことだから。」

「がんばって。」

「ありがとう。」

そう言うと、りとは、また通路の方に向かった。

ちょうどそのとき、ワクチュンに連隊から連絡が入った。ガジメに伝える。

「戦艦の旋回主砲の準備ができた。第111分隊は、直ちにその護衛にあたれ。とのことす。」

「そうか。何とか間に合ったか。」

「はい、そして最後に連隊長からの伝言がありました。遅滞戦闘ご苦労だった。まだ、苦しい戦闘は続くが、感謝する。とのことす。」

「もつたいない、お言葉だ。ゾロモ、ジャモチャ、ガビーを失ってしまったが、ここから残ったみんなを無事に連れ出すぞ。」

その時見張りをしていたゼクルから連絡が入った。

「棒人間が来ます。目の前を通過していききました。」

「くそっ、こんな時に。ゼクル、戦艦主砲の準備が整った。建物からの撤退命令が出ている。」

「わかりました。私がおとりになります。隊長は残りの隊員を撤退させて下さい。」

「いや、おれがやる。お前は撤退しろ。」

もう、隊員を失いたくないガジメは、棒人間に向けて突撃していった。

「竹下通りで集合だ。全員、退避しろ。ゴモ、撤退の指揮を取れ。」

他の分隊の隊員も建物の各所にいるため、ガジメは3分は時間を稼ぎたいと思っていた。

りとは前からスクーパーズが接近してくるのを見て、後ろを気にした瞬間、後ろからビームが飛んできた。それを棒で防いだ。

「2体で挟み撃ち。もう1体はどこ？」

りとは、後ろからのビームをかわしながら、全速で前のスクーパーズに向けてダッシュした。だが、まりから離れたくないため、牽制だけして急速Uターンして、まりがいる方に向かった。ガジメが叫ぶ。

「ゼクル、そっちに行った。」

ガジメが言った通り、ビームが出るタンクをあまり離さずに接近してきた。ゼクルは店側に避けて、棒人間をやり過ごした。ガジメとゼクルが横に並んだ。ゼクルがガジメに言った。

「あと、2分は稼ぎたいですね。」

「お前の言う通りだ。」

「じゃあ、行きましょうか。」

「ああ。」

そう言った瞬間、ゼクルが壁の穴の方に飛ばされ、建物の外に出てしまった。ガジメがゼクルに逆スクープビームを放ったのである。ゼクルが叫ぶ。

「分隊長！」

「お前は、主砲を守れ。時間を稼ぐのは俺一人で十分だ。」

そう言い残して、ガジメは単身、棒人間の方に向かって行った。

「分隊長！」

ゼクルは、後ろからそう声をかけたが、自分の役割を認識して、振り返り第111分隊の残存

兵をまとめて、建物のそばの物陰で待機した。しかし、3分経ってもガジメが出てこなかったため竹下通りの方に向かっていった。

ガーチューンが第111分隊のゼクルたちの労をねぎらう。

「ご苦労。戦艦主砲の移設は完了した。これより、明治通りの防衛線の敵散弾発射装置を破壊する。お前たちには、その援護を命じる。」

「はい。わかりました。全力で戦艦のビーム砲を守ります。」

涙を流している隊員を見て、哀悼の意を述べる。

「ゾロモ少尉が戦死したそうだな。3台の移動兵器の活動を停止させ、ゾロモしかなできない任務を全うした。連隊長として、ゾロモ少尉に天の川銀河勳章を推薦することにした。」

「はい、有難うございます。ゾロモ少尉も喜んでいと思います。」

「ガジメはどうした。」

ゼクルが答えた。

「全員が撤退する時間を稼ぐためと言って、隊長が私をビームで押し出して、1体で棒人間に向かって行きました。」

「それで、どうなった。」

「最初、ビームの発射音があり、戦闘があったと思われませんが、すぐに止んでしまいました。建物の外で待機しましたが、3分経っても出てこなかったため、命令に従いここに集合しました。」

「そうか・・・あいつが・・・」

「第111分隊はどのようにすればよろしいでしょうか。」

「ガジメがいなくなった以上、ゼクル軍曹、お前が指揮を取れ。主砲を棒人間から守るんだ。お前の気持ちも分かるが、相手を倒すより、今は主砲を守る方を優先してくれ。」

「わかりました。王女様を助け出すことを優先させます。その後で敵を殲滅し、ガジメ隊長の仇を討ちたいと思います。」

そのとき、突然、後ろから声がかかった。

「おいおい、勝手にスクーパーズを殺すなよ。」

第111分隊のみんなが声の方向を見て、喜びながら叫んだ。

「ガジメ隊長！」

ガーチューンも顔をほころばせて呼びかけた。

「ガジメ、無事だったか。」

「連隊長、遅れて申し訳ありません。棒人間を攻撃すると見せかけて、残っていたビーム攪乱幕のタンクを破壊して、隠れていました。棒人間が居なくなったのを確認するのに手間取ってしまいました。戻るのが遅れてしまいました。」

「そうか、さすがだな。遅れたことは問題ない。ただ休む暇もなく申し訳ないが、主砲の守備に

ついでくれ。」

「了解です。ゼクール、ゴモ、俺について来てくれ。他の隊員は我々の近くで身を潜めて、異変があったら知らせしてくれ。」

全員が元気に答えた。

「わかりました。」

ゼクールがガジメに話しかける。

「隊長、幽霊じゃないですよね。」

「何を言っている。ちゃんと体に色がついているだろう。」

「ほんとですね。」

ゴモがゼクールに話しかける。

「私は、最初から隊長は無事だと思っていましたよ。」

「本当か。さっき、しょんぼりしていなかったか。」

「それは、ゾロモ・・・」

途中まで言いかけて、2体はそれ以上話すことができなかった。ガジメが注意する。

「おしゃべりは、そのぐらいにしろ。油断できる相手ではないぞ。それに王女様を助けた後、ゾロモの仇を討つんだ。」

ゼクールが答える。

「申し訳ありませんでした。ゴモ、集中だ。」

「わかりました。」

3体は、ラフォーレと竹下通り途中のビルの陰に隠れた。ちょうどその時、運んだ戦艦主砲による攻撃が開始されようとしていた。アルドアが指示をする。

「ビーム攪乱幕の濃度を調整する。こちらの砲の威力をなるべく落とさないため、敵の散弾の攻撃を無力化できるぎりぎりの濃度にする。」

技術参謀直下の部隊員が濃度の調整を行う。

「濃度調整終わりました。」

「ありがとう。正面の敵の散弾発射装置を破壊しだい砲を押し出す。敵の攪乱幕を散らすファンも動作も始まる。防弾版も使うが、濃度調整に最新の注意を払ってくれ。」

「はい。」

「目標位置入力。これは、第3連隊や我々の連隊の第4中隊の犠牲の元に得られたデータだ。絶対にミスをするな。彼らの犠牲が無駄になるばかりか、われわれも無事では居られなくなる。」

「わかりました。」

砲の位置や、散弾発射装置の位置が入力された。距離が短くビームは直線に飛ぶため、補正が不要で入力は短時間に終わった。

「入力完了しました。」

「早いな、二重にチェックはしたか。」

「はい、三重にしました。」

「そうか。では、この状態で待機。」

「わかりました。この状態で待機します。」

アルドアがガーチューンに連絡する。

「準備はすべて終わりました。後はエネルギーを注入し、安全装置を外して引き金をひくだけです。」

「わかった。第11連隊の到着にはまだ少し時間がかかるようだが、先に敵の防衛線の破壊を行う。計画にしたがって敵の攻撃装置を破壊してくれ。指揮はお前にまかす。」

「わかりました。」

ガーチューン自身は、ラフォーレにいる敵を抑える任にしている第111分隊と協力する必要があるかもしれないと思い、第111分隊の後方、ラフォーレと竹下通りの中間で両方の様子を見ることにした。

アルドアが発射を指示する。

「初めに、3台のうち2台で攻撃する。1号砲が左側、2号砲が右側を攻撃する。エネルギー注入開始。」

「エネルギー注入開始。エネルギー注入正常。エネルギー注入完了しました。」

「安全装置解除。」

「安全装置解除しました。」

「この砲は2秒間隔で撃てる。照準選択は各班に任せるが、敵が反撃してくる場合、脅威レベルが高いものから攻撃するように。」

「了解です。反撃があった場合は脅威レベルが高いものから攻撃します。」

「よし。では、各班攻撃開始だ。撃て！」

「攻撃開始。」

戦艦主砲による攻撃が始まった。1基また1基と建物に置かれていた散弾発射装置を破壊していった。散弾が砲に向けて発射されたが、ビーム攪乱幕のために、大きなエネルギーが到達することはなかった。少しして、現在位置から攻撃できる防衛線の発射装置を破壊したため、各班とも砲撃を止めた。アルドアが戦果を確認する。

「よし、ここから見えるものは全て破壊した。5メートル前進するぞ。ビーム攪乱幕の班は濃度に気をつける。」

「はい、わかりました。」

各砲の班は主砲を5メートル前進させ、再度発射体制に入った。アルドアが命じる。

「撃て！」

スクーパーズが撤退していくとき、1体のスクーパーズがりとに向かっていったが、ビーム攪乱幕のタンクを撃って、そのまま隠れてしまった。ビーム攪乱幕の濃度が濃く、そのスクーパーズを見つけることがすぐにはできそもなかったため、りとはまりのところへ戻ることにした。

「まり、まり、スクーパーズは撤退したみたい。」

「それは良かったわ。りとは大丈夫？」

「うん、大丈夫。ことこのサイコレセプタの改良のおかげで、ボードヤルナ銃の反応が早くなった。跳ね返ってくる衝撃も大きくなったけれど、私が頑張ればもっと速く反応できそう。」

「そう、それは良かった。これからどうする。」

「まりとことこはラフォーレの防衛力の強化をお願い。その間、私はまわりを監視する。」

「わかった。ことこ！ことこも大丈夫？」

「大丈夫だよ。そこに散弾の発射装置を設置するね。それで、ラフォーレの奪還完了だね。」

「うん、やったわ私たち。と言っても、りとおかげだけ。」

「ううん、戦車はことこのおかげだし、まりがここに来てくれて、帰れる場所があつて助かった。」

「一人じゃできなかった。」

「りとの役に立って良かったわ。」

ことこもその意見に賛成する。

「3人いれば、宇宙最強だよー！」

「うん、ことこの言う通り。」「そうだね。」

まりが作業の開始を告げる。

「じゃあ、私はことこのところに行つて穴を塞いでくる。りとはまわりの監視をお願いね。」

「わかった。二人から少しだけ離れたところに居るから。」

「そうね。その方が安全ね。じゃあ、いっしょにことこのところに行こう。」

「うん。」

1階に着くと、ことこが戦車から出てきた。3人は手を取り合った。そして、ラフォーレを塞ぐ作業を開始することにした。戦車についているビーム攪乱幕を吹き飛ばすファンを回して、りとは1階のフロアを確認し、その後、まりとことこが、1階フロアの壁の修復と散弾発射装置の設置を行った。設置の間、りとは1.5階に上がって、そのフロアを確認していた。そのような手順で、まりとことこが2.5階で作業し、りとは3階のフロアを確認しているときに、外で大きな音がした。ラフォーレとは直接は関係なさそうだったが、そんなに離れてもいなそうだった。りとは急いで、まりとことこのところに戻った。りとはことこに尋ねる。

「なんの音かわかる？」

「スクーパーズのビーム砲の音かな。なんか、防衛線の散弾発射装置が壊されていってるよ。反撃しているけど、だめみたい。」

「わかった。とりあえず、屋上に上がってみよう。」

まりが同意する。

「そうね。」

3人が屋上に上がった。建物の周りにスクーパーズはいなかった。下の方を見ると、竹下通りから強力なビームが発射され、防衛線の建物の散弾発射装置が壊されていくのが見えた。防衛線の散弾発射装置も反撃しているが、ビーム攪乱幕に邪魔されて、スクーパーズの砲まで届かないようだった。まりが尋ねる。

「りと、どうする。」

「あそこに行つてビーム砲を壊してこようと思うけど、たぶん、あいつらがどこかに隠れている。私が行くと、二人が心配。」

「私は大丈夫。ここで、りとを援護する。ここには戦車の中にもいらおうか。」

「うん、それがいいと思う。ことこ、戦車の中に戻つて。」

「えー、大丈夫だよ。」

「お願い。」

「わかったー。りとちゃんがそう言うなら、戦車の中にいるね。」

「じゃあ、ボードに乗つて。戦車まで連れて行くから。」

「わかった。」

まりが言う。

「私はここで見てるわね。」

「有難う。でも、あいつらが来たら、私に連絡して逃げてきて。」

「一発撃つて、当たらないようならば、そうする。」

「お願い。じゃあ、行つてくる。」

ことこをボードに乗せて、りとが階段をつたつて1階へ向かった。ことこは、りとを信用しているのか、ボードのスピードを上げて飛ばしても喜んでいた。

「すごいすごい。」

一階でことこが戦車に乗った。

「よいしょつと。」

「私かまりが来るまで、戦車から外に出ないでね。」

「わかったー。」

「じゃあ、また。」

りとは、ボードで屋上に急いで上がつて行つた。

アルドアたちの防衛線破壊作業は順調に進んでいった。正面の散弾発射装置を破壊すると、少しづつ砲を押し出し、防弾版やビーム攪乱幕で守りながら、左右の発射装置を破壊していった。そして同時に、防弾版によって守られた通路を構築していった。そのような状況でも、少し前に

ラフォーレ屋上で棒人間を視認したガーチューンは安心できなかった。第111分隊や砲を守備している部隊に告げた。

「いつ、棒人間が出てくるかわからない。油断するなよ。」

屋上に戻ったりとは、まりと作戦を立てていた。

「スクーパーズのビーム砲を壊すことが最優先。」

「ここからじゃ、建物の陰になっているから、竹下通りまで行かないと。」

「わかってる。」

「じゃまをするのは、あのグループかな。」

「たぶん。あのビルの裏側あたりにいると思う。」

「どうする。」

「まりは、あの辺りにビーム攪乱幕を撃って。その煙に隠れてビーム砲に接近する。」

「わかったわ。」

「無理はしない。一撃したら戻ってくる。」

「了解。気を付けてね。帰りもビーム攪乱幕を撃つから。」

「ありがとう。まりも気を付けてね。」

「わかってるって。それにスクーパーズ化が進んで、バリアーも強化されているわ。少しぐらいビームが当たっても大丈夫そう。」

「うん。早く終わらせないと。」

「頼むわよ、PARKの王子様。」

「それ嬉しくないって。せめてジャンヌダルク。」

「それじゃあ、最期に火あぶりで死んじゃうわよ。」

「そうか。」

「りとは、りとね。それ以外の何物でもないわ。頼むわよ、PARKのりと。」

「うん。じゃあ、行ってくる。」

まりがビーム攪乱幕を撃ち始め、りとが砲がある方向へ飛び出した。予想通り、建物の陰から3体のスクーパーズが出てきた。

ラフォーレ屋上からビーム攪乱幕が発射されるのを見て、ガジメが作戦開始を指示する。

「来るぞ。」

ゼクルがりとが出てくるのを確認する。

「来た。」

ガジメが指示をする。

「よし、三方から囲んで攻撃だ。三方ならば、正面に味方はいない。」

3体が三角形になり、りとを向けて連続してビームを放つ。りとはビームが到達するより先に通過して、スクーパーズの三角形の中心めがけて突っ込んでいく。ゼクルがつぶやく。

「速い。」

りとが三角形の中心を過ぎようとするとき、ガジメが命じる。

「追え。」

ゼクルルはすでに棒人間を追い始めていたが、追いつけそうもなかった。正面にガーチューンが現れた。

「強力なビームを撃つやつ。」

りとはそう思ったが、そのまま突っ込んでいった。ビームが飛んできたが横にかわし、ガーチューンを通り越した。4体のスクーパーズを引き連れたまま、りとはビーム攪乱幕の中に入っていた。攪乱幕はそれほど濃くなかったため、すぐに砲が1つ見えた。砲身にルナ銃を放ったが、はじかれてしまった。すると、砲の周りにいたスクーパーズからビームの射撃があったが、軽々とビームをかわしていった。後ろから見えていた、ガーチューンがつぶやく。

「戦艦の砲兵じゃ、棒人間に対応するのは無理だ。」

りとは棒に付いているホースをルナ銃のタンクのスラストで高速に操って、ビーム砲の前にいた8体をホースで切断した。その8体は消滅していった。それを見た残りの砲兵たちは持ち場を離れて逃げに行った。戦艦のダウザ艦長から砲兵の指揮を委任されていたアルドアが命じる。

「逃げるな。立ち向かえ。」

しかし、接近戦をしたことがない戦艦の砲兵には戦うことは無理だった。りとはすこし上昇した後、棒を突き立てて砲身に穴をあけようと急降下していった。ガジメが指示をする。

「棒人間が、ビーム砲を壊す瞬間をねらう。」

最も速かったゼクルルがビーム砲の向こう側に行き、棒人間の上空で三角形になる陣形を取った。りとがビーム砲の砲身に棒を突き立てた。同時に、3体がスクープビームを放った。りとは、棒をつかんで逆立ちして避けた。りとの真上にいたガーチューンがビームを放つ。今までのりとの戦闘経験から得た感で、ゼクルルが叫ぶ。

「ビーム、蹴られます。」

ゼクルルの予想通り、りとはビームをガジメの方に蹴り飛ばした。ゼクルルの予告があったため、ガジメは避けることができたが、りとは体勢を戻した。ゼクルルとゴモがビームを放った。ゴモのビームは蹴られ、再度、ガジメの方に飛んで行った。ゼクルルのビームはボードで跳ね返えさせ、ガーチューンに向かった。2体ともかわそうとしたが、体の端の方にあつた。ガーチューンは無言だった。ガジメは、

「いてっ！」

とだけ言った。反射でビームが弱まっていたため、2体ともかすり傷程度だった。りとは棒を引き抜き、そのまま、ラフォーレの方に飛んで行った。ガーチューンが指示をする。

「射撃手の攻撃もある。追撃はよせ。再度、待ち伏せる。」

ガジメがガーチューンに言う。

「砲を1つ破壊されてしまいました。」

「ああ、次はなんとか止めないと作戦が成り立たない。アルドア、予備の砲を前に出し、防衛線の破壊は続けてくれ。」

アルドアが答える。

「わかりました。」

ガジメが、ゼクールとゴモに命じる。

「三角形での包囲では間に合わない。相手が速すぎる。」

ガジメがガーチューンに上申する。

「壊れた砲、小さな穴があいただけです。穴をできるだけ見えないようにして、移動して撃っているように見せかけていただけませんか。」

「それを棒人間に攻撃させるのだな。」

「そうです。私たちは砲の近くにいて、棒人間が攻撃するところを狙います。」

「わかった。そうしよう。アルドア、さっきの命令は取り消す。2つの砲を下げる。この砲の穴を外から見えないようにしろ。大至急だ。そして、撃っているように見せかけるため、砲の周りに兵を配置しろ。もう一つ、私とガジメが隠れる場所を作ってくれ。そこで待ち伏せる。」

アルドアが答える。

「わかりました。」

ゼクールがガジメに問題点を指摘する。

「しかし、誰も迎撃に上がらないと怪しまれます。私とゴモは迎撃にあたります。」

「頼む。そうしてくれ。無理はしなくていいぞ。砲の近くに來たら、俺が至近距離からビームをかましてやる。」

「俺もガジメの反対側で待ち伏せる。」

ガジメがガーチューンに言った。

「しかし、連隊長。連隊長が倒れると指揮は誰が。」

「私が倒れたら、もうすぐ来る第1連隊の指揮に入ってくれ。もう半分以上の隊員が殺されている。私が先頭に立たんでどうする。」

「わかりました。連隊長は私がお守りします。」

「いや、ガジメは俺より砲を守るんだ。」

「承知しました。でも、こんな戦闘は、ビギール星での戦闘以来ですね。あの時は、デストロイヤーズが我々の3倍いました。」

「そんなときもあったな。私がまだ中隊長のころか。」

「はい、私は上等兵で、いまのゼクールみたいな感じだったと思います。」

「そうだな。それでも生き残った。今回も成功させる。」

「はい。」

「おしゃべりはここまでにして、作戦に取り掛かろう。」

「わかりました。あつ、ゼクルルとゴモは配置についていますし、アルドア少佐もほぼ作業を終えています。」

「おしゃべりしていたのは、年寄りだけか。では我々も配置に付くぞ。」

「刺し違えても倒します。」

「ああ、彼らを死なせてはいけないな。」

「はい。」

ガーチューンとガジメは、覚悟を決め少し微笑みながら、アルドアが作ったビーム砲の隠れる場所に入った。ガジメがつぶやいた。

「扉の開閉も完璧だ。これならば奇襲をかけられる。」

ラフォーレに戻ってきたりとに、まりが話しかける。

「どうだった。」

「ビーム砲の1つに穴をあけてきた。」

「すごい。りが行ってから防衛線へのビーム砲の攻撃がやんでいる。」

「よかった。」

「じゃあ、もう一度行ってくる。」

「休まなくて大丈夫？」

「うん。」

「わかった。ビーム攪乱幕を撃つわね。」

「ありがとう。」

そのときである。竹下通りの入り口から、多数のスクーパーズが入ってきた。

第8連隊の隊員が喜んで叫んだ。

「援軍だ!」「第11連隊だ。」

その声を聞いてガーチューンが隠れていた場所から出てきた。

「モーガンのやつ、やっと来たか。」

ガーチューンが1000体ほど、ほぼ連隊の全数がいることを確認して、第11連隊と作戦での分担を考える。

「第11連隊の隊員は、この敵と戦い慣れていないから、占領したところの防衛が精一杯だろうな。早くモーガンと話して、我々は総力を挙げて王女様の救出に行かなくては。」

しかし、様子を見ていたガーチューンの顔色が変わった。第11連隊は広めの隊列であったが、上空をゆうゆうとやって来ているのである。

「何だ、第11連隊のやつら、データーを見てないのか。」

ガーチューンは連隊付きの通信兵を呼び出した。

「通信兵。第11連隊と連絡を取れ。内容は、やつらは普通の地球人とは違う。そんなところを

飛んできると全滅するぞ。至急、地表近くのビーム攪乱幕の中に隠れろ、だ。」

他のスクーパーズ兵も上空のスクーパーズに向かって叫び始めた。

「危ないぞ！。早く降下しろ。」「建物の陰に隠れるんだ。」

ゼクルルがガジメに進言する。

「ビーム攪乱幕を撃っていた射撃手がラフォーレ屋上にいます。このままだと、やつの散弾に第11連隊がやられてしまいます。牽制に行きましょう。」

ガジメはビーム砲を見ながら、ゼクルルを制止する。

「いや、俺たちに任務は、あの砲を守ることだ。」

そのときである。ラフォーレの屋上から、立て続けに散弾の発射があった。ゼクルルが息を漏らす。

「ああっ。」

しかし、そのスクーパーズの部隊の隊員は、その強力なサイコバリヤーによって、消えるものもばかりか、傷つくものもいなかった。ゼクルルは少し驚いた。

「えっ、すごい。」

そして、ラフォーレの屋上から強力なビームが発射された。そのとき隊の中から、ボードに乗った大きな蟹爪フライのような生命体が飛び出してきた。そして、強力なビームの衝撃は、その生命体を少し後ろに下げさせたが、そのハサミの部分ではじかれてしまった。それを見た第8連隊の隊員が叫ぶ。

「蟹爪ふりゃー様！」「第7連隊だ！」

そう、スクーパーズ最強の第7連隊がやってきたのである。ガーチューンも驚いてつぶやいた。

「第7連隊！大本営がよこしたのか。それにしても早いな。しかし、これで助かった。」

ゴモがゼクルルに向かって叫ぶ。

「第7連隊です。」

「そうだな。散弾ぐらいでは誰も傷さえつかない。さすが第7連隊だ。」

「蟹爪ふりゃー様は、あの強力なビームも跳ね返します。」

「ああ。」

「すごいです。これで、王女様も安心でしょうか。」

「うん、たぶん。でも。」

ゼクルルには第7連隊が散弾をものともしないと見えて、かなり安堵の気持ちを抱くことができた。それでも、高速な棒人間の動きについていけないか一抹の不安が残っていた。その後、棒人間が超高速で竹下通りの上空へ向かっていくのが見えた。それを見たゼクルルがゴモに指示をする。

「棒人間だ。行くぞ。」

「はい。」

「棒人間と砲の間に割って入るんだ。」

「わかりました。」

ゼクル、ゴモがり々と砲の中間の位置に向かっていった。第7連隊が登場しても、戦艦のビーム砲を守る任務は変わらないため、ガジメも同じ所へやってきた。

PARKの地下で戦況を見ていた、エビふりヤーも驚いて叫んでいた。

「姫様、第7連隊、第7連隊でございます。」

「そうですね。でも、おかしいですな。父上が第7連隊を寄こすはずはないと思うですな。作戦が台無しになるからですな。」

「どうなさいますでございますか。」

「そうですね。さすがに、3人では第7連隊には敵わないですな。作戦はここで打ち止めにするですな。」

「それがよろしいと思うでございます。」

「父上にはスクーパーズや天の川銀河のみんなのため、兵士の犠牲を厭うなと命令されていすな。でも犠牲は少ない方がいいですな。ここまで情報が集まれば、戦闘を止めても、りとちゃん、まりちゃん、ことちゃんともスクーパーズの仲間になるですな。ただ、時間はかかるかもしれないですな。戦闘を停止しても、そのままアマツマラは持っけていてもらう必要があるですな。」

「わかりましたでございます。どうやって戦闘を止めれば良いでございますか。」

「そんなことは自分で考えるですな、と言いたいところすな。でも、しかたがないですな。ガーチューンに、第7連隊が戦闘を停止しないと私が殺されると連絡するですな。りとちゃんたちは、たぶん敵わないので一度PARKに戻ってくるですな。あとは、PARKでなんとか時間を稼ぐですな。」

「わかりましたでございます。早速取り掛かるでございます。王族専用の緊急通信機をお貸しくださいませ。それならば、スクーパーズの全通信機が受信するでございます。」

「わかったですな。はいですな。」

エビふりヤーが通信機のスイッチを入れ、第7、第8、両連隊を呼び出した。

「あー、もしもし、もしもし、侍従長のえびふりヤーです。蟹爪ふりヤー、ガーチューン、聞こえていますか。あー、もしもし。」

しかし、通信機が壊れて通話ができないようだった。

「どうしたですな。」

「通信機が壊れているようでございます。」

「乱暴には扱っていないですな。故障ですな？」

「秘密保護回路が働いて、通信機自体が自分で自分を壊したようでございます。」

「直せるですか？」

「自己破壊ですので直すことは不可能かと思うでございます。」

「なぜ、秘密保護回路が働いたですか。」

「わからないでございます。デストロイヤーズのような敵が触れば、壊れる仕組みになっているのですが、地球人では何もできないので壊れない設定でございます。」

「デストロイヤーズが触るはずがないですか。オンボロですか。」

「はい、おっしゃる通りでございます。どうするでございますか。」

「直接行くわけにはいけません。今は見るしかありません。戦闘はすぐに終わって、犠牲もそんなに出ないと思うですか。」

「直ちに戦闘を止められないのは、本当に残念でございます。しかし、そうでございます。すぐに戦闘を止める機会を失ったエビふりャーは残念だったが、みさが危険な目に会うことを考えれば、そうするしかなかった。」

少し時間を巻き戻す。まりがビーム攪乱幕を撃とうとしたとき、りとがそれを止めた。

「原宿駅の方から、またスクーパーズが入ってきた。」

まりがそちらを見ると、多数のスクーパーズが囲いの中に入り、上空を広めの隊列を組みながら進んできた。

「ヨーロッパにいたスクーパーズかな。」

「たぶん。」

「また、1000体ぐらはいそう。でも、いい的。散弾で攻撃するわ。」

「お願い。私はまりをカバーする。」

りとがまりの少し前が出る。まりがリア銃を構える。

「りと、ありがとう。行くわよ。」

そう言いながら、散弾を数回発射した。しかし、スクーパーズは消えることも落ちることもなく、そのまま飛んでいた。

「散弾が効かないわ。ビームで撃ってみる。モード6ポジション1。エネルギー充填。」

スクーパーズがゆっくりとしかし確実に近づいてきた。ただ、まりの攻撃をあまり気にしていないようだった。

「エネルギー充填完了。発射。」

ビームがスクーパーズの集団の方に飛んで行った。しかし、ボードに乗った蟹爪フライのような生物が出てきて、ビームが缺の部分で弾かれてしまった。まりが、驚いてりとに話しかける。

「何あれ。蟹爪フライ星人？」

「その話は後でいい。何かヤバイ気がする。まり、ここを連れてPARKまで下がって。私はその時間を稼ぐ。」

「一人で大丈夫？」

「何とかする。」

りとは、竹下通り上空の方に飛んで行った。そうすると、建物に隠れていた数体のスクーパーズが出てきた。まりは、りとそのスクーパーズの間にはビーム攪乱幕を撃つことにした。出てきたスクーパーズはりとを直接追うことはせずに、ビーム砲とりとの間に位置しようとしていた。

りとは竹下通りの上を通り、新しいスクーパーズの集団に接近していった。第7連隊の連隊長蟹爪ふりやーがその様子を見ていた。第7連隊が撃つと、竹下通りにいる第8連隊に当たる可能性があるため、スクープビームを撃てないでいた。

「あれがデータにあった棒人間か。いい位置取りだ。こちらが射撃できないようにしているのか。」

りとは高速で第7連隊に接近していた。蟹爪ふりやーが第1中隊のダイル中隊長に指示を出す。

「棒人間は私が引き受ける。ダイル、指揮をとって、ラフォーレの屋上にいる射撃手を倒せ。散弾ならば大丈夫だが集束したビームに当たると、第7連隊隊員と言えども耐えきれない。気を付けるんだぞ。」

ダイルが返事をする。

「わかりました。連隊を率いて射撃主を倒します。」

「頼む。」

りとは、蟹爪ふりやーの方に向かっていった。しかし、普通のスクーパーズはラフォーレの方に向かうのが見えた。

「まりが。」

りとそのスクーパーズの集団を見ると、先頭で隊を先導するスクーパーズがいるのが分かった。蟹爪ふりやーと交戦するまでに、まだ0.2秒はあった。

「あれがリーダー。」

そのスクーパーズに向けて、ルナ銃で攻撃した。射撃が終わると同時に、りとの棒と蟹爪ふりやーの銃がぶつかりあった。甲高い音がした。そのまま少し離れた。隊員が叫ぶ。

「ダイル中隊長！」

後ろから撃たれたダイルは消えて行った。中隊長を失い命令をするスクーパーズがいなくなつたため、その場に止まるもの、逆に中隊長の仇を討つためにりに向かうものがいた。りとは蟹爪ふりやーはUターンしながら、再度接近しようとしていた。りとは少しだけ集団の方を見たが、まりの方へ向かうものがいなくて少しほっとした。ただ、まりはこちらを見ているようだった。今度はルナ銃で蟹爪ふりやーを攻撃したが、かわされてしまった。りとは蟹爪ふりやーはすこし離れたところをすれ違つて行った。りとはUターンしながら、向かって来るスクーパーズをルナ銃で1体1体を連続して攻撃した。数体が消滅した。蟹爪ふりやーも、連隊の大部分が静止している状態を避けるために指示を出そうとする。

「ベナ、ダイルに代わって指揮をとれ。お前らがここにいても役に立たない。射……」

指示が終わる前にりとが迫って来た。指示を途中でやめて防戦に入る。りとは蟹爪の鋏をかわして、蟹爪ふりやりのボードに切りかかる。しかし、りとのボードと同じで、ボードは装甲されていて、壊すことはできなかった。蟹爪ふりやりが指示を続ける。

「棒人間は私一人で対応する。その他の隊員は全員で射撃手を攻撃しろ。ベナ、自分の位置は、棒人間に分からないように行動するんだぞ。」

りとの蟹爪ふりやりの攻撃間隔が詰まってきた。りとは爪でないころもの方に切りつけようとしたが、蟹爪ふりやりは、なんとかそれをかわした。第2中隊中隊長のベナは蟹爪ふりやりが心配だったが、命令に従うことにした。

「わかりました。射撃手を攻撃する指揮をとります。」

りとは、棒と爪がぶつかる瞬間に、蟹爪のころもの部分に向けてルナ銃を射撃する。ころもの部分に命中して、ころもが少し焦げたが、本体には影響ないようだった。

二人の戦闘を見ていたゼクールがガジメに話しかける。

「まずいです。パワーはともかく、スピードで負けています。棒人間の方が余裕があるように見えます。大丈夫でしょうか。」

「確かに、だんだん押されてきている。」

「援護に行きますか。」

「いや、我々の任務は砲を守ることだ。蟹爪ふりやり隊長にお任せするんだ。」

PARKで戦況を見ていたエビふりやりが悲痛な声を上げていた。

「ダイルが。あのダイルが。」

兵学校を最優秀の成績で卒業したダイルは、初めから第7連隊に所属し、エビふりやりが第7連隊で鍛えて成長させてきた。そのダイルが消えてしまったのである。

「こんなに悲しいことがありますでしょうか。あんなに真面目で一生懸命だったダイルが。今も隊を先導して任務に当たっていたのに。それが消えてしまうなんて。」

「りとちゃんを恨んではいけないですな。」

「はい、それは承知していただきます。皆を騙して戦わせているのは、我々でございます。本当に悲しいことでございます。」

「休戦に持ち込むための何かいい方法はないですな。」

「私が行って参りまして、話をつけてくるというのはいかがでございます。それしかないように思うでございます。」

「みさも本当に戦いを止めたいんですな。でも、それでは秘密がばれる可能性があります。秘密がばれると反乱が起きて、スクーパーズ軍の一部がスクーパーズの王家を攻撃するかもしれないですな。そうすると、この天の川銀河の内戦に発展するかもしれないですな。それは避けた

いですか。」

「そうでございますね。千体以上のスクーパーズが亡くなっていますから。皆様、お怒りになられるでございます。わたくしめはともかく、姫様と王家は絶対にお守りしないと。どうしたものでございましょうか。」

りとと蟹爪ふりやりの戦闘は続いていた。りとはスクーパーズたちが蟹爪だけを残してラフオーレの方に向かうのに気が付いた。

「また、まりの方。このスクーパーズの部隊の足を止めないとPARKに戻れない。」

りとは、蟹爪ふりやりを今すぐに倒すのは無理と考えた。りとは蟹爪ふりやりの上方に位置して、棒を蟹爪に向けて、蟹爪の方に飛び込んでいった。蟹爪ふりやりは、その棒を払うため一度体をそらした。そして、そらした勢いで最大の力で棒人間の棒を弾いた。その勢いでりとは体勢を崩しながら横に飛ばされていった。蟹爪ふりやりが棒人間を追いかけてとどめを刺そうとしたが、追いかけることができずに、自分は竹下通りの方に落下していった。蟹爪ふりやりはつぶやいた。「なんだ。」

そして、棒人間の方をみると、自分の飛ぶためのボードが棒から出ているホースに巻き取られているのが見えた。みさやエビふりやしもそうであるが、スクーパーズは擬態すると飛べなくなるのである。

「しまった。」

蟹爪ふりやりはそう叫んだが、落ちていく他はなかった。

りとは巻き取ったボードをできるだけ遠くの方に放り投げた。まりに連絡する。

「リア銃の準備をお願い。強いビームの方。」

「了解。」

「合図したら、私に向けて撃って。射線上に敵のリーダーがいるようにする。」

「わかった。気を付けてね。」

「うん。」

ラフオーレに向かった隊員たちも、蟹爪ふりやりが落ちていくのに気が付いた。

「蟹爪ふりやー連隊長が、ボードを奪われ落ちていきます。」

「連隊長がボードを？連隊長は落ちたぐらいでは大丈夫だか。作戦を変更して、我々も棒人間に対処する。そうしないと後ろから攻撃される。ここで対アムロディ用に準備した三日月陣形を使う。」

「ここで、あのフォーメーションを使うんですか。」

「ああ、テストのためにもいいチャンスだ。全員、配置に着け。」

隊列をりとを焦点とした三日月状の形に整えた。りとがつぶやく。

「集中砲火する気。」

りとはルナ銃から目くらましのビーム攪乱幕を発射する。ベナが号令をかける。

「射撃用意。照準。撃て。」

1000本のスクープビームがりとの方に向かってくる。

りとは、超高速で後方に下がって、ボードを盾にして一度収束してから広がったビームを防ぐ。それを見ているゼクルがつぶやく。

「追いついていない。ビームを棒人間に集中できていない。」

りとは落ち着いて横に移動し、三日月の長手方向がラフォーレを向くように誘導する。三日月陣形は方向転換に時間がかかるようだった。ベナが指示する。

「次は、照準を棒人間がいる位置の後ろ20メートルにずらせ。」

そのときりとは右側にビーム攪乱幕を発射した。

「照準を変える。攪乱幕の後ろあたりにビームを発射しろ。撃て。」

1000本のビームが攪乱幕の後ろあたりに突き刺さる。りとは、攪乱幕のさらに右前に出ていた。そして、三日月の先のスクーパーズの方に向けてダッシュした。いくつかのビームが向かってきたが、それらをかわしたり棒で払ったりして、前に進んだ。

「さっきから指示しているのはあのスクーパーズ。」

りとは、りとや隊の陣形の様子を見ているスクーパーズに目を付けていた。そのスクーパーズはこちらを見ていた。自分とそのスクーパーズとそしてまりと同一直線状の寸前に、まりに連絡した。

「まり、撃って。」

まりは、りとの高速な動きに付いて行くのが精一杯だったため、何か言う前に引き金を引いた。そして叫ぶ。

「避けてね。りと。」

リア銃のビームが伸びて、三日月を縦にビームが貫いた。ベナと数十体のスクーパーズが消滅した。指揮官が消滅したため隊の動きが止まった。

「これで二人をPARKに戻せる。」

りとはビームを横にかわした後、三日月の後ろ側を通過して、まりのところへ戻ろうとした。

PARKでは、エビふりやーがまた悲痛な声を上げていた。

「あー、ベナまで。」

「またエビふりやーが知っているスクーパーズですな。本当に悲しいことですな。それにしても、スクーパーズ最強の第7連隊にしてはもういすな。」

「りと様の速さについて行けず、翻弄されているようですよ。」

「そのように見えるですな。しかし、簡単に補充がきかない第7連隊の犠牲がこれ以上増えるのは避けたいですな。」

「おっしゃる通りでございます。たぶん、りとはまり様とことこ様のことを考えて、一度PARKに撤退すると思うでございます。そのときに何とか方法を考えるでございます。」

「わかったですな。」

ゼクルルが悲痛な表情でガジメに話しかける。

「あー、また。やっぱり速さについていけない。」

「隊形の転換が間に合わず、逆に隊形を棒人間に利用される形になっているな。」

「はい。」

「ただ、棒人間はこちらには向かって来ないようだ。」

「ガーチューンは別途対応策を練っていた。」

「アルドア、主砲をラフォーレ屋上を狙える位置に移動し、照準をそこに向けておけ。今までの経験から、やつらの団結意識は固い。必ず仲間が二人いるラフォーレに戻るはずだ。そこを狙う。」

「了解です。照準ラフォーレ屋上で待機します。」

「やつも屋上へ着陸する直前には速度を落とす。そこを狙うんだぞ。」

「分かりました。」

「ビーム攪乱幕散布班、ビーム攪乱幕の濃度を最適化して、こちらのビームは有効だが、向こうから気が付かれないように調整してくれ。」

「了解です。」

「アルドア、チャンスは1回だ。頼む。」

「はい。」

アルドアは機器を操作し、照準をラフォーレの屋上の少し横、棒人間の予想帰還経路と交差するように定めた。

「照準完了です。」

アルドアが緊張して、ガーチューンに伝えた。

「よし、安全装置を解除しろ。タイミングが重要だ。アルドアの判断で発射していい。」

「了解です。安全装置解除。」

アルドアは砲の照準装置を凝視し、自分に言い聞かせた。

「チャンスは1回、集中だ。」

りとがラフォーレ屋上に戻ってきた。急いでさらに通信する。

「まり、ごめん。数が多くて、すぐには追い払うことができない。ラフォーレに戻ったら、ことを連れて一度PARKに戻る。」

「わかったわ。PARKで一休みしましょう。お腹も空いてきたし。」

「いや、うん。」

もうすぐPARKの屋上のところまで来た。振り返って見るとスクーパーズの集団は混乱しながら、建物に隠れるために下降していった。

砲の照準の中心にりとが入りそうなとき、アルドアが砲を発射する。

「発射！」

砲からのビームはりとの方に伸びて行った。まりが叫ぶ。

「りとー！」

りとも横から来る巨大なエネルギーの気配に気付いて、ボードを盾にしてボードに陰に隠れた。その瞬間、りとにビームが届いた。「バーン」ととても大きな音がして、りとが弾き飛ばされ空中を舞った。まりが、一心にボードに乗って飛び出し、りとを空中でキャッチした。

「りとー！りとー！」

返事はなかった。しかし、耳を胸にあてると心臓の音がした。気を失っているようだった。まりは、りとを抱えてPARKまで撤退することにし、ここに連絡をする。

「ここ、りとがスクーパーズの大砲に撃たれて気絶しちゃったの。とりあえず、りとを運んでPARKに戻る。ここも戻れる？」

「わかったー。PARKにもどるよ。ちょっと待ってて。」

「待てない！急いで！スクーパーズが来ているの。」

りとが動けなくなったことを見たスクーパーズが大量にまりに向かってきた。一部のスクーパーズは、ラフォーレの中に入っていた。ただ、りとを抱えているまりには逃げることはできなかった。無念でもことを置いていくしかなかった。それでもスクーパーズがまりのところを迫ってきた。ここから通信が入った。

「まりちゃん、りとちゃん、スクーパーズが戦車の周りにたくさんきたー。」

「ここ、なんとかPARKまで逃げられない？」

「このスクーパーズたち、RWSもきかないの。助けて。お願い。」

まりは返事をするのができなかった。まりの方もすぐ後ろまでスクーパーズが迫ってきていた。そのとき、明治通りの代々木側からとても強力な白いビームが、まりたちとスクーパーズを隔てた。まりたちを追っていた、第7連隊の第3中隊長が叫んだ。

「なんだ、白色いデストロイビームか。」

中隊付きの観測隊員が機器を見ながら答える。

「はい、デストロイビームです。」

「敵はデストロイヤーズなのか。ビームが白かったが、アムロデューのものか。」

「いえ、それがアムロデューのビームより、3倍は強力です。」

「何だって！そんなやつがいるのか。」

「分かりません。ただ照準からしてこちらを攻撃するのではなく、牽制射撃と思われます。」

「そうか。アムロデューかそれ以上の敵がいるとすると、うかつには近づけないな。一度、戻って蟹爪ふりゃー隊長の指示を仰ぐ。」

「わかりました。」

PARKに到着したまりは、背後に強力な白いビームを感じた後、スクーパーズが追ってこなかったことを不思議に思いながら、りとをPARKのソファに寝かせてつぶやいた。

「とりあえず、PARKに逃げてくれて良かった。」

さっきから助けを求めることこの通信が聞こえていたので、PARKの建物の上を上昇してラフォーレの方を見た。たくさんのスクーパーズがラフォーレを取り囲んでいるのが見えた。

「まりちゃん、りとちゃん。まりちゃん、りとちゃん。」

ことが泣きながら何度もそう叫んでいた。まりが、

「ここ、ごめん。絶対助けに行くから。今は頑張つて。」

と連絡した直後、受信機から何かを切り裂く大きな音が聞こえた。そして、

「わー、こっちに来ないで！」

という叫び声を最後に通信が途絶えた。まりにはどうすることもできなかった。PARKに戻ると、りとはまだソファアで気を失っていた。

第8章 決戦

「デストロイヤーズ本星では、皇帝が参謀長を呼び出し、スクーパーズ本星を攻撃する作戦の進行状況を尋ねていた。」

「天の川銀河攻略部隊の様子はどうか。」

「はい、第17、第28、第41艦隊とも順調に航行を続けています。あと100日ほどで目標としている銀河系内のデリッサ星域に到着するものと思われれます。」

「デリッサ星域に我がアンドロメダ銀河からの長距離ワープウェイの出口を、なんとしても構築するんだ。それができれば30艦隊を送り込んで、一気にスクーパーズ本星を急襲して制圧できる。だが、現在の我々の艦隊はわずか3艦隊だ。発見されれば勝利する可能性はほとんどない。」

「はい、艦隊を小さく分け、慎重に天の川銀河に進んでおります。また発見されても、偵察行動と思わせるように配慮しています。定時連絡でも、まだスクーパーズに発見されたという情報はありません。」

「デストロイヤーズ宇宙軍の1艦隊は、空母300、戦艦300、巡洋艦400、駆逐艦7000、揚陸艦100、補給船2000からなり、総数400万人の兵員で構成されている。そして、デストロイヤーズ宇宙軍はそれを約50艦隊を配備し、デストロイヤーズ宇宙軍は兵員2億人地上の補助要員1億人からなる極めて大きな宇宙軍である。その中で半数近い20艦隊はアンドロメダ銀河内や銀河周辺宙域の防衛のために配置されており、それを少し無理して削っても、33艦隊程度が今回のスクーパーズ侵攻作戦のために使える総戦力となる。スクーパーズ側も、ほぼそれと拮抗した戦力を保有している。しかしながら、天の川銀河とアンドロメダ銀河間の移動には艦隊では200日以上を要し、その距離が壁となり、脆弱な補給線を維持し、展開している艦隊へ継続的に補給することは極めて困難となっている。そのため、相手側銀河の辺境の星に前進基地を建設しようと互いに何度が侵攻してきたが、結局はその補給の困難さのために侵攻してきた方が敗退するということを繰り返してきた。今回、デストロイヤーズは初めに3艦隊をひそかに派遣し、デリッサ星域に新規に開発したアンドロメダ銀河から天の川銀河へ1回の超長距離ワープで到達できるワープハイウェイのための拠点を短時間に建設し、アンドロメダ銀河の本星の近く星域との間に、3つのワープハイウェイを構築して、一気に30艦隊を派遣しスクーパーズ本星を急襲する作戦計画を立てていた。」

「よろしい。スクーパーズ本星攻略の鍵となるアムロディーの部隊は今どうしているか。」

「現在は、テロリスト逮捕のために、スクーパーズが支配する天の川銀河オリオン腕太陽系の第3惑星の地球に向かわせているところです。あと10日ほどで到着するかと思われれます。」

「馬鹿な。なぜそんなところに。」

「テロリストの逮捕は特別高等憲兵の仕事ですが、なにせ天の川銀河はスクーパーズが支配する領域です。不意の戦闘において特別高等憲兵を援護するために派遣しました。それにしまして

も、国民にも本人にも知らせてはおりませんが、アムロディイは前皇帝の忘れ形見です。何故、それほどまでに心配を。」

「ゆくゆくは考える必要があるかもしれない。だが、スクーパーズ本星の防衛網は大艦隊でも突破することは不可能だ。少数精鋭部隊が潜入して、短時間でも防衛力を無効化する必要がある。そのとき、スクーパーズのエビふりヤーや蟹爪ふりヤーが出てきたら、アムロディイを当てなくては勝負にならない。スクーパーズ王を捕らえるまでは、生きていてもらわないと。」

「前皇帝の妃は病で亡くなられ、皇女も宇宙船の爆発事故で死亡しています。ただ、皇女が事故死した時に前皇帝派のブルシチュアが先に述べた地球という惑星に皇女と共に逃げ込んだとの情報が入り、その捜索のために特別高等憲兵を地球に派遣したのであります。特殊高速艦を使用していますので、地球からデリツサ星域まで1日で到着できます。作戦遂行には支障はありません。それに、スクーパーズの戦艦に補足されても容易に振り切れます。」

「そうか、わかった。ブルシチュアは当時、最強の兵士で前皇帝への忠誠も強かったな。逮捕できるようならば、是非逮捕してきてくれ。ただ、スクーパーズとの戦いの前だ、つまらないトラブルで、作戦が台無しになつては元も子もない。慎重に行動するように厳命してくれ。特に現時点でのスクーパーズとの戦闘は絶対に避けるようにする必要がある。」

「はい、そのように命じておりますが、再度念を押しておきます。」

本参謀長は皇帝の部屋から出て行った。

「皇帝もお甘い。アムロディイなどさっさと殺してしまった方が、後顧の憂いを断つために良いものを。どこかに前皇帝、王妃、皇女を死に至らしめた自責の念でもあるのだろうか。まあいい、少数の部隊がアムロディイなしで、エビふりヤーや蟹爪ふりヤーと戦うことになれば、敗退は目に見えてる。ここは皇帝のご意見に従う方が懸命か。」

ラフォーレ1階では、第7連隊が戦車を取り囲んでいた。RWSが効かないことが分かったところは、主砲を使うことも考えたが、当たるわけがないので撃つのはやめて、通信が通じるまりと通信していた。心の中は不安で一杯で、名前を呼ぶのが精一杯だった。

「まりちゃん、りとちゃん。まりちゃん、りとちゃん。」

ラフォーレ1階に、蟹爪ふりヤーが2、5階の入口を通って、ガーチューンが正面の入口を通って到着した。

「蟹爪ふりヤー少将、できる限りこの中に残された敵を傷つけないようにして身柄を確保することを上申します。」

「お前の部下を半分以上殺した敵でもか。」

「はい。憎き敵ですが、王女様の安全を第一に考える必要があります。この敵を死傷させた場合、王女様への報復が心配です。また上手いけば、人質の交換に利用できます。」

「もっともな意見だな。わかった。まずは、この乗り物から敵を引きずり出すことにしよう。」

蟹爪ふりヤーがその鉄の部分で、戦車を切りつけた。戦車の装甲がパクッと割れた。再度、切りつけると、戦車が真っ二つになった。

ここは戦車が壊れて周りが見えるようになり、フロアがスクーパーズであふれかえっている、とても動揺した。それでも、

「りとちゃん、まりちゃん。私、どうなるのかな。でも、りとちゃんが、きつと助けに来てくれるはず。だから、今は少しでも生き延びることを考えよう。」

と考えて抵抗せずにじっとしていた。

蟹爪ふりヤーが切り裂いた戦車の方を見ると、中に隅の方に小さく固まっていた人間がいた。翻訳機で呼びかける。

「大人しく出てこい。抵抗すれば、無事ではすまない。」

ここは無言で出てきた。蟹爪ふりヤーがガーチューに命じる。

「これまで戦ってきた第8連隊の方が事情が詳しいだろうから、取り調べはまかせろ。」

「わかりました。」

「敵の拠点の配置について詳しい情報が聞き出せるようならば聞き出してくれ。今まで得られたデータから、我々第7連隊ならば明治通りの防衛線の突破は容易と思われるが、第3連隊と引き換えに得られた情報では、敵拠点の防衛はかなり強固そうだ。それにしても、ギンシア、惜しい隊長を失ったものだ。」

「おっしゃる通りです。ギンシア隊長は不可能を可能にし、敵拠点まで肉薄しました。」

「ああ。」

少しの沈黙の後、ガーチューンが話を戻す。

「敵の捕虜ですが、最初の戦闘時に射撃主の横にいましたが、これまで戦闘に参加したことはありません。今回の戦闘でも、乗り物にこもっていました。また、棒人間とは違い、戦闘訓練を受けているようには見えません。推測では、工兵と考えられますので、こちらの技術将校に尋問を任せようと思います。その中で、敵拠点の防衛線に関する情報取得を試みますが、局所銀河団条約がありますので。」

「無法者になるわけにはいかないな。わかった。条約の範囲でいい。棒人間さえ倒せば、あとはなんとかなる。今から、対棒人間のための作戦を検討する。」

「後は、白いデストロイビームを撃つ何者かに対する対策も必要かと思えます。」

「その通りだ。実は、我々がここに早く来られたのは、アムロディーがこのあたりを目指してアンドロメダ銀河を出たという情報が入ったからだ。」

「そんな。何をしに。」

「目的に関する情報はない。ただ、到着はもう少し先のはずで、迎え撃つ準備をしていたところ、地球で王女様が誘拐されたという情報が入ったため、緊急に駆け付けることができたわけだ。」

「なるほど、それで、王女様の誘拐から4日で到着されたんですね。」

「諜報部の情報だから、時間などに多少の不正確さはあるかもしれないが、さっきのビームを撃つたのはアムロディーの可能性が高いと思う。白いデストロイビームを撃てるデストロイヤーズはアムロディー以外には確認されていない。」

「観測では、棒人間はデストロイヤーズではないようですが。」

「さっきの白いビームも、直接我々を狙ったものではなかった。単に、棒人間たちを逃がすために牽制しようだ。」

「それは、何故です。」

「やつらは地球人だが、デストロイヤーズから武器を供給されているに違いない。特に、棒人間はデストロイヤーズに戦闘訓練も受けている。やつらの目的は基本的には単純で自分たちの住んでいる地球や原宿を守るためだ。それをデストロイヤーズが利用している。」

「何のために、ですか。」

「デストロイヤーズと我々は休戦中で戦闘ができない。だから、あの強力なデストロイビームは我々を狙っていなかった。デストロイヤーズが我々の戦力を削ぐために、地球人を利用していると考えるのが一番自然だ。」

「なるほど。」

「棒人間はデストロイヤーズから直接指示を受けているかもしれない。王女を誘拐したのも棒人間だ。データや先の戦闘を見る限り、それ以外の人間は棒人間にのせられて、本当に自分の地域を守るために戦っているようだ。我々に対する射撃手の照準も、単に棒人間に合わせているようだった。射撃手はどれを目標にしてよいかわからないから、棒人間が目標が自分と射撃手の間になるようにして、自分に向けて撃たせる。そして、自分はビームを避ける。」

「それで、中隊長が。」

「ああ。」

「では、黒幕はアムロディーの部隊とあの棒人間ということでしょうか。」

「その通りだ。ただ、ガーチューン、君は黒幕と言ったが、条約的にはこちらもかなり黒に近い。」

このことが判明しても、デストロイヤーズは、局所銀河群会議で、スクーパーズの不法行為から地球人を守るために武器を渡し訓練したと言いついでできる。」

「局所銀河群会議、実質的には機能していませんが。」

「確かにそうだが、やはり条約違反で大義名分が立たないことを続けると、銀河群での支持が薄れ、人心が離れてゆくゆくは不利になる。」

「銀河間政治の問題ですね。軍人には不向きですが。」

「ガーチューン、出世したければそれでは困る。軍事力は銀河間外交の一つの手段に過ぎない。」

「わかりました。勉強するようにします。」

「現状は、このことが外の銀河にできるだけ知られぬように、秘密裏に解決することが必要だ。」
「承知しました。」

「アムロディーと思われるデストロイヤーズの直接攻撃はないと思うが、万が一の場合に備えて、私が警戒する。従って、残りの私の隊の隊員で棒人間に対応しなくてはいけない。これから、その方策を考える。」

「わかりました。我々もお手伝いできることがあればお手伝いします。」

「うむ。ただ、散弾でやられてしまう第8連隊の隊員では、ビーム攪乱幕の外に出ることは難しいだろう。ビーム砲を使って占領地の確保に専念してくれ。」

「承知しました。」

第7連隊の隊員がラフォーレを後にして、作戦を立案するために囲いの外に出て行った。ことは、多数のスクーパーズに取り囲まれていた。ガーチューンがアルドアに指示する。

「この敵は、工兵か技術支援が担当だと思う。尋問はお前に任せろ。分かっていると思うが、局所銀河群条約に違反しない範囲で尋問してくれ。だが、敵の拠点の防備について聞き出せるようならば是非聞き出してくれ。」

「了解しました。上の部屋を使おうと思いますが、よろしいでしょうか。」

「ああ、好きに使ってくれ。」

アルドアが翻訳機を使って、ことを上の部屋に誘導する。

「上の部屋までついて来てくれ。」

ことは仕方なくアルドアについていく。後ろに2体のスクーパーズが逃亡を警戒してついてくる。2体の護衛をドアの外に待たせたあと、部屋に入った。部屋には、ビーム攪乱幕のタンクや台車がついた装甲板が乱雑に置いてあった。

「人間は椅子にすわるんだったね。では、この椅子にかけて。」

ことはおとなしく椅子に腰かけた。

「整体信号を取る装置を付けるよ。危険はない。ただ嘘を言ったりするとすぐにわかる。そのための装置。いいね。」

「ここがはじめて口を開いた。」

「うそ発見器ね。わかった。」

アルドアは装置を付けながら、話を続ける。

「協力ありがとう。僕はアルドアと言います。技術将校です。君も技術担当？」

「わたしは、ことこ。えーと、綿紬ことこ。PARKというお店でバイトをしています。技術担当と言え、そうかもしれない。」

「そうか、ありがとう。」

「こちらの推測では、ことこさんは地球または原宿を守るために戦っていると思うけどいいかな。」

「うん、そう。原宿に最初にスクーパーズさんが来た時、りとちゃんも話し合おうとしたんだけど、いきなり戦闘になってしまったの。」

「ちょっと待って。こちらから、戦闘を始めた？あつと、そうか。射撃したのはこちらが先か。」
「そうだよ。」

「でも、あれは王女様が棒人間に誘拐されたからで。そうだ。まずなぜ王女様を誘拐したのか教えてもらえるかな。」

「王女様を誘拐。そんなことはしてないよ。」

「でも、棒人間が王女様を連れ去るところは確認している。記録を見せよう。」
そう言って、りとがみさを連れてPARKに逃げ込む映像を見せた。

「これは、誘拐したんじゃないかと、スクーパーズが来て逃げるときに、みさちゃんは足が遅いから、りとちゃんが抱きかかえてPARKへ走ったんだよ。」

「棒人間の名前は、りとちゃんと言うのかい。」

「棒人間？」

「棒のようなものを持った人間だから、棒人間って呼んでる。」

「棒人間というあだ名はひどいけど、そうだよ。須藤りと、PARKでバイトをしているの。イラストが担当かな。とても可愛いイラストを書くのが得意なの。」

「地球の兵隊さん？」

「私と同じ、普通の高校生だよ。」

「学生か。うーん、いずれにしても、地球の兵士とは強さが別次元だし。抱えていた小さな女の子みさちゃんの氏名を知っている？」

「丸野みさ。アメリカ人と言っていたけど。この前日にPARKへ来たんだ。それで、PARKが気に入って、ずうつといっしょだよ。強制しているわけではないよ。」

「名前は合っている。君がみさちゃんと言っている女の子は、スクーパーズが人間に擬態したもののなんだ。スクーパーズコアが強力なスクーパーズはいろんな生物に擬態できるようになるんだよ。あの子は、もともとは丸野みさ王女様。スクーパーズ王の長女でいらっちゃって、今回の我々の部隊の作戦の指揮をとられている。原宿に来た日も合っているけれど。」

「みさちゃん、スクーパーズの王女様なの？いろいろ凄いとこはあったけれど。」

アルドアは事態が理解できなくて混乱していた。逆に、ここは怖そうなスクーパーズでなかったためとても安心していた。アルドアは、もう少し質問を続けた。

「エビふりヤー様、えーと、あの地球の食べ物のエビの天ぷらみたいな生物は、王女様と一緒に来たの？」

「ううん、みさちゃんが来た日の翌日に来たよ。エビフライ星人と言っていた。スクーパーズの宇宙船から逃げてきたって。」

「スクーパーズから逃げてきたって。」

「うん。エビフライ星でスクーパーズにさらわれたって。地球でも何人かさらっていくんじゃないかって。」

「えっ、僕たちはそんなことはしないよ。」
「そうなの？」

「当たり前だよ。本当は僕は文明や文化を奪っていくのもいやなんだ。でも、デストロイヤーズとの戦争では、1億体以上のスクーパーズが死んでいるんだ。だから奪えって、命令で。特に、アメリカでの作戦ではたくさんの人が亡くなっている。僕は本当に申し訳ないと思っている。」

「そうなんだ。いいスクーパーズなんだね。アルドアって。」

「そんなことはないけれど、できればこの戦いを終わりにしたい。」

「うん。」

「協力してくれる。」

「わかった。知っていることは何でも話すね。」

「こちらこそそうする。」

二人は向き合って少し微笑んだ。

「武器のことを聞いてもいいかな。」

「いいよ。」

「こちらでは、それはデストロイヤーズからもらったものじゃないかと推測しているんだけど、他に宇宙人はいなかった？」

「ここが胸のペンダントを見せながら言う。」

「いなかった。エビふりヤーからもらった、このアマツマラで武器を作ったの。」

「アマツマラ？エビふりヤー、エビふりヤー様から？」

「アマツマラは、想像したものを実際のものに変える装置。これがあれば、スクーパーズと戦えるって、エビふりヤーが。」

「エビふりヤー様が。」

「何か作ってみるね。何か欲しいものはある？」

「何でも作れるの？とりあえず、机かな。」

「わかった。じゃあいくよ。Our Otaku, Changed by PARK。」

そういうと、部屋が光に満たされた。その光がおさまると、アルドアの前に机が現れていた。

「すごい。」

「うん、そう思うよ。」

「これで本当に武器も作れるの？」

「うん、簡単なものを作ってみようか。」

「お願い。」

「じゃあ、小さなビームライフルを作るね。Our Otaku, Changed by PARK。」

同じようにして、小さなビームライフルが現れた。

「すごいね。本当に撃てるの。」

「何か物に撃ってみてもいいけれど。でも、アルドア、捕虜に武器を作らせるなんて不信心だよ。」

「ごめんごめん、なんかすごく。それに君が僕と同じ種類のスクーパーズという人間、生物の感じがして、信用できそうだし。」

「私もそう。」

「じゃあ、ことちゃん、あのタンクを撃ってみて。中は空だから。」

「こいう銃は撃つたことがないけど、アルちゃんの頼みならわかった。」

「アルちゃん!？」

ことがタンクに向けて、ビームライフルを発射した。大きな音がしてタンクに穴が開いた。確認すると、後ろの装甲板に大きな傷が付いていた。

「凄いな、装甲板がここまで傷ついている。」

そのとき、外にいた警備の兵が2体が入ってきた。

「アルドア少佐、何事ですか。捕虜が銃を持っている。銃を捨てろ!さも・・・」

アルドアが警備兵を止める。

「大丈夫。敵の武器の威力確認のために、あのタンクを撃ってもらったんだ。」

「それにしても、少佐、不信心すぎます。」

「彼女は戦闘員ではないから大丈夫。」

「しかし、この部屋に入るときにはこんな武器は所持していなかったはずですが。」

「そうなんだ。この机もなかっただろう。何もなしどころから机とか武器を作れちゃうんだ。すごいだろう。」

「すごいだろう、と言われましたも。」

ここはビームライフルを机に置いた。アルドアは、それを取って護衛の兵に渡した。

「これを部下に渡して、分析するように言ってくれ。」

「わかりました。」

護衛の兵が出て行った。アルドアが話を続ける。

「ことちゃん、ごめんね、驚かして。」

「大丈夫。それより、銃の威力に驚いたよ。」

「作った本人が驚くのかい。」

「うん、想定したより威力が高かったの。いろんな情報がアマツマラに集まってきているからかもしれない。」

「そうか、すごいね、そのアマツマラというもの。」

「でも、いろいろ制限があるみたい。オリジナリティーが高くないといけない、似たもの2つは作れないみたい。」

「ふーん。」

「エビふりヤーは、自分は独創力がないから、アマツマラが使えないと言っていた。」

「そうなんだ。ちょっとアマツマラを貸してもらってもいいかな。」

「いいよ。はい。」

ここはアルドアにアマツマラを渡した。アルドアはアマツマラを目の部分にかけてみた。ことが尋ねる。

「アマツマラを感じる？」

「感じるって？」

「うーん、なんか情報をやり取りができるような感じ。」

「残念だけれど僕には感じない。とりあえず、ものを作るにはどうするの？」

「物をできるだけ具体的に考えて、アマツマラに情報を送るように、何か呪文を唱えるの。」

「そうか。机を想像して、Our Otaku、Changed by PARK。」

あたりが光に満たされることはなかった。

「だめだー。僕には無理みたい。返すよ。」

「返すよって。まあ、はい。」

ここはもしかするとアルドアを守るために必要かもしれないと考えて、アマツマラを身に着けた。

「それにしても、エビふりヤー様がスクーパーズと敵対する人間にこんなものを渡すというのもわからない。」

「アルちゃんも渡したけど。」

すこし微笑みながらアルドアが答える。

「そうだね。自分で言うのも何だけど、僕はあまり軍人ぼくはないからかな。でも、エビふりヤー様は軍人の中の軍人、スクーパーズ最強の兵士だったんだよ。そして今は王室の侍従長。今回の作戦では、みさ王女を守るための護衛を務めているんだけれど。」

「そうなんだ。そんなすごいスクーパーズだったんだ。人の良いおじさんみたいな感じだったよ。」

「僕も船で訓示を聞いた時の感じはそうだった。それでも、エビふりヤー様がスクーパーズを攻撃するようなものを渡すというのは考えにくい。何か裏があるのだと思う。整体信号がスクーパーズだったから、偽物の可能性は本当に低いと思う。操られているのか。うーん。」

「操られている？みさちゃんもエビふりヤーも自然な感じだったけど。」

「そうかー。ことこちゃん、アマツマラ、また貸してもらっていい？分析してみようと思う。今はそれ以外に、手掛かりはないし。」

「いいけれど、その前にその翻訳機を貸してくれる？分析してみたい。」

「いいよ。」

「じゃあ分析器を作るね。そしたら、アマツマラを貸すから。」

「わかった。」

ことは、アマツマラで分析器を作成した。アルドアは、できたものを見てまた驚いた。

「こういうものもできるんだ。すごいね。」

「うん。上手に使えばすごい便利。じゃあ、アマツマラ渡すね。」

「有難う。こっちは分析器を運んで来なくっちゃ。そうだ人間は食べ物とか飲み物とかいるんだよね。」

「うん、でも食事を作る時間もないから。そうだ、竹下通りにあるコンビニエンスストアから、ペットボトルとカップラーメンをお願いできる。」

「いいけれど、どんな感じのもの？」

「こんな感じのもの。」

ところが、タブレットを使ってカップラーメンとペットボトルのお茶の画像を見せた。アルドアはそれを写真に撮った。

「わかった。誰かに取って来てもらうね。じゃあ、ちょっと待ってて。」

「ありがとう。」

そう言っ、アルドアは出て行った。ちなみに、手がないスクーパーズは弱いスクープビームを使って様々なものを扱うことができる。アルドアは、現在までの状況をガーチューンに報告した。

「連隊長のお考えの通り、彼女は技術を担当しているようです。」

「そうか。」

「彼女の説明によりますと、武器を作り出すアマツマラというものを、エビふりヤー様から与えられたとのことですよ。」

「エビふりヤー様が。まさか。」

「王女様も誘拐されたのではなく、自分の意志で一緒にいるとのことですよ。」

「どういうことなんだ。彼女が嘘をついているということとは？」

「生体データと態度から、それは考えられません。彼女たちの戦闘の目的も原宿を守るためとのことですよ。最初、話し合おうとしたが、スクーパーズ側から突然攻撃があつて、このような状態になっていると。確かに射撃したのはこちらが先でした。王女様が誘拐されたと考えたからです。また、デストロイヤーズも一緒にはいないとのことですよ。」

「うーん。」

「彼女も極めて協力的で、現在、現状の把握と戦闘を停止する方法を一緒に考えているところですよ。」

「状況はわかった。これから、どうするつもりだ。」

「そのアマツマラというものを分析してみます。その場で本当にいろいろなものを作ることができるすごいものです。このようなものをデストロイヤーズが持っているとは聞いたことがありません。もしかすると、スクーパーズでもデストロイヤーズでもない何かを引いているの

かもしれません。アマツマラを調べれば、背後にいる者たちについて何か分かるかもしれません。」

「わかった。そうしてくれ。ただ第7連隊が攻撃準備をしている。明朝には攻撃を開始すると思う。彼らを止めるには、具体的かつ有効な手段を考える必要がある。」

「わかりました。あと、捕虜に食料を与えようと思うのですが、竹下通りのコンビニエンスストアから、これらのものを持ってくるように手配をお願いしますでしょうか。」

そう言って、ガーチューンに画像を見せる。

「わかった。手配しよう。」

ガーチューンと分かれたアルドアは、観測機器を持って、ここがいる部屋に戻った。ここが話しかけた。

「お帰りなさい。」

「ただいま。」

「重そうだけど、大丈夫？」

「スクーパーズは人間より力があるから大丈夫……。あれ、翻訳機がないのに話せてる。」

「うん、翻訳機を調べて、人間の精神波からスクーパーズの精神波に変換する装置を作ったのだから、私、今スクーパーズと同じように話しているの。」

「本当だ。すごい。」

「この方が意思の疎通が速いし正確になるみたいね。」

「そうだよ。この方が全然いい。」

「ほんと。嬉しい。」

「ぼくも嬉しいよ。人間と気持ちを通い合わせることができて。」

「アルちゃん、ありがとう。私もだよ。じゃあ、アマツマラの分析もいっしょにする？」

「うん、お願いするよ。それにアマツマラの起動はぼくじゃできないし。」

「やったー、いっしょにやろう。」

ことごとアルドアはいっしょにアマツマラの分析を始めた。

夜になって、りとが目をさました。絵を描くアイディアに詰まった時、いつも見ている天井だった。

「PARK？」

そして、すぐに思い出す。

「そうか、横からビーム砲で撃たれたんだ。」

まりが声をかける。

「当たった時にはどうなるかと思ったけれど、外傷がなくてほっとした。大丈夫？」

「うん、大丈夫。」

声をする方を見ると、まりのほかに、みさ、さゆみん、エビふりヤーが心配そうに見ていた。数時間前に起きたことが、頭の中に次々に思い浮かんでくる。一番、気がかりなことをまりに聞いた。

「ここは？」

まりが答える。

「新しいスクーパーズが来たことは覚えている？」

「うん。大きな蟹爪フライみたいなのがいた。」

「PARKに戻るために、りとがラフォーレに戻る途中、ビーム砲に撃たれて。私は気絶したりとをかかえてPARKまで戻ってきた。」

「ここは？」

「逃げるように行ったんだけど、ラフォーレに残っていた。」

まりは、ここからの通信をりとに聞かせた。

りとが起き上がって、出口に向かう。

「まり、ごめん、ちょっと行ってくる。」

「ラフォーレ？無理よ。新しいスクーパーズには散弾が効かないし。それにここは今ラフォーレかどうかもわからない。」

「たぶんラフォーレにいる気がする。ラフォーレにいなかったら戦艦だと思う。ここを見捨てることは絶対にできない。」

「戦艦に飛び込んで行く気？無茶よ。やっぱり、いる場所が分からないと。みさも止める。」

「ここちゃんは、大丈夫ですな。スクーパーズの軍隊は野蛮ではないですな。りとが尋ねる。」

「何でわかるの。」

「今までの行動を見ればわかるですな。」

エビふりヤーが説明を追加する。

「局所銀河団条約によって捕虜に虐待することはないでございませう。それに、ことご様は直接戦闘には参加していませんから、心配はご無用でございませう。」

まりが明日にすることを提案する。

「それに今日はもう暗いから、明日にした方がいいと思う。今、ことご様は書いたリア銃のこの分厚いマニュアルを読んでいるの。有効な方法がないか考える。」

りとは今すぐでも探しに行きたかったが、どこにいるか分からない状況で自分が暴れては、ことが危険になるかもしれないとも考えた。

「わかった。明日にする。何としても・・・」

さゆみんがカツサンドを持っていた。

「今日は戦闘が激しくて、あまり準備ができなかったからカツサンドにしたわ。あと、マカロニサラダ。」

「ありがとう。わかった食べる。明日のためにも。」

「よかった、りとちゃんも元気で。一時はスクーパーズが追ってくるかとひやひやしていたけど、追ってこなくて安心した。」

りとがカツサンドを一口食べて尋ねる。

「おいしい。でも、さゆみん、戦闘を見ていたんだ。」

「えっ、うん。明治通りの代々木側の端の方から。りとちゃんたちが心配で。」

「心配してくれてありがとう。でも危ないからさゆみんは店にいたほうがいいと思う。明日は戦闘がもっと激しくなると思う。」

「そう。なるべくそうするね。でも代々木の方にはスクーパーズが全然いないから大丈夫だと思うけど。それに、いざとなったら最強の助っ人も呼べるし。」

「彼氏さん？気持ちは分かるけど。うーん。」

りとは、
「惚気ている場合ではないのに。さゆみんらしいけど。」
と思っただが続けた。

「確かにさゆみんという通り、スクーパーズはラフォーレから竹下通りに集まっているけれど、お願いします。」

「わかったわ。じゃあ、明日は私は店にずうっといる。嘘はつかないわ。そのかわり、もし本当に危なくなったら店の方に来て。絶対に何とかするから。」

「了解。危なくなったら、さゆみんのお店に逃げ込む。」

りとは危険な時に、たぶんスクーパーズに追いかけて、さゆみんの店に行くつもりは全くなかったが、さゆみんの顔があまりにも真剣だったので、そう答えた。

「必ずよ。」

「はい。」

さゆみんはすこし安心して、

「デザートを作ってくるね。」

と言いながら台所に向かった。りととはさゆみんは変わらないなと思いつつも、なぜか少しほっとした気持ちになることができた。それでも、録音してあったことからの最後の通信が耳から離れなかった。りととは、場所さえ分かっていたら飛び出して行きたかったが、ソファに腰かけて、場所が分かった場合にことを救出する方法を必死に考えた。

夜になる前に第11連隊が到着していた。ガーチューンは蟹詰めふりやと第11連隊の連隊長モーガンに、現在までの取り調べの結果を報告した。

「捕虜は地球人です。生体信号でも確認しました。やはり3名とも地球人と思われ、原宿を守るために戦っているようです。王女様とエビふりヤー様と思われるものは、誘拐したのではなく、自主的にいっしょにいると話しているようです。」

「そんな、まさか。」

「武器は、エビふりヤー様と思われるものから渡されたアマツマラで作っているとのことです。」

「アマツマラ。そんなものは聞いたことがないな。捕虜の話を利用しているのか。エビふりヤー様が敵に武器を作ることができるものを渡すはずがない。」

「話の全部を信用するわけではないですが、アマツマラで実際に武器を作ること捕虜が実演しているそうです。記録もあります。捕虜は嘘をついていないようですので、何か裏がありそうなのですが。」

「それより今は、敵拠点の防衛装置についての情報を少しでも聞き出せ。」

モーガンが口を挟んだ。

「手荒なことをすると、局所銀河団条約にふれます。」

「条約を破るつもりはない。手荒なことをすれば、王女様への報復も心配だ。ただ、最善を尽くせと言っている。モーガン、お前は敵の強さが分かっていない。第7連隊が総がかりでも攻撃チャンスがつかめないんだ。少しでも情報は必要だ。」

「それはそうです。」

ガーチューンも蟹爪ふりヤーに意見する。

「まず、王女様のことを考えれば、捕虜には少しでも元気でいてもらう必要があります。現在の友好的な雰囲気壊すのは問題と思います。それに防衛線もアマツマラで作成されています。そして、そのアマツマラが敵の手にまだ3つあるようです。それを使って防衛線を強化できますので、現在の情報を聞き出しでもあまり意味がない可能性も高いです。」

「うむ、それもそうか。」

「うちの隊のアルドアは、スクーパーズでもデストロイヤーズでもない何かか関与しているのではないかと疑っています。」

「あのデストロイビームもデストロイヤーズのものではなく、偽物ということか。」

「はい。」

「エネルギーがアマロディーの3倍もあったんだな。」

「そうです。まだ若かったアマロディーが成長したとしても、3倍のエネルギーは無理ではないかと思えます。」

「おれもそう思う。しかし、わけが分からんな。大マゼラン星雲を支配するブランエファン一族は分子単位で自由に物体を操作できるということは聞いたことがあるが、それとも違うようだ。それにブランエファンとスクーパーズとは協力関係にある。」

「はい、アマツマラを分析を急ぐ理由も、その背後にいるものを探るためです。」

「わかった。その捕虜の調査に関しては、こちらは何も言わない。アマツマラに関して情報は分析してくれ。それにアマツマラがデストロイヤーズに渡ると、スクーパーズに取って致命的になる気もする。」

「わかりました。分析を急がせます。」

「アマツマラを調べる以外には、あの棒人間が黒幕を知っているような気はする。あれが他の人間を操っている感じだ。」

「こちらでも、これまでの戦闘データを分析しています。蟹爪ふりヤー様のおっしゃいますように、私も棒人間は他の人間と異なつて軍事訓練を受けているように思います。戦闘が非常に効率的で指揮能力も高いです。」

「そうだな。生け捕りにできれば良いが、こちらにもその余裕はない。」

「こちらの損害を最小限に抑えるためには、手加減のできる相手ではありません。戦いが終わった後、原宿やそこに住んでいた者を徹底的に調べるほかはないと思います。」

「うむ、現在は棒人間を倒すことが第一だ。」

「それで、棒人間に対する攻撃隊形の準備はいつごろ終わりますか。」

「今晩中には終わらせるが、何だ。」

「それならば、明朝、捕虜から敵拠点に連絡をさせます。そうすれば、やつらは捕虜を助けにやってくると思います。」

「それは名案だ。是非たのむ。敵の拠点のそばで戦うより、ずうっと有利になる。我々は、棒人間と射撃手とデストロイビームを撃つ謎の敵に対処するが、第8連隊にはビーム砲の運用と移動をお願いする。」

「了解です。ビーム砲の運用と移動を担当します。」

「モーガン、第11連隊は占領地の確保だ。来た早々申し訳ないが、ビーム攪乱幕やビーム砲のエネルギーラインがやられると一般の隊員は敵の散弾でやられてしまう。特に、出口を抑えられると全滅の可能性もある。少なくとも竹下通りは絶対に死守してくれ。」

「了解です。命に代えても竹下通りは守り抜きます。」

「頼む。ビーム攪乱幕の濃度さえ間違えなければ、大きな犠牲を出すことはないと思う。」

「わかりました。」

「ところで、ガーチューン、高速に移動できる隊員を1体借りられないか、隊形変換の訓練のために、棒人間役をお願いしたい。」

「それならば、ちょうど良い隊員が1名います。これまでに、棒人間と直接対決しています。」

「それは都合がよいな。頼む。わかりました。」

「それでは、各連隊とも、明朝のための準備を開始すること。」

「わかりました。」「了解です。」

ラフォーレに戻ったガーチューンは、ゼクールを呼び出した。

「ゼクルル、疲れているところ申し訳ないが、第7連隊の隊形変換の練習相手になってくれ。」
「隊形変換の練習相手と言うと、私が棒人間役ということですか。」

「察しがいいな。その通りだ。第8連隊ではお前が一番速いし、棒人間の動きに詳しい。」
「もちろん、喜んで練習相手を務めさせて頂きます。しかし残念ながら、棒人間の速さは僕をかなり上回っています。」

「分かっている。しかし、実現可能な範囲ではお前がベストであることには変わりはない。」

「分かりました。思いつきり動き回ってきます。」

「頼む。」

ことことアルドアはアマツマラを分析していた。アルドアが現在までの分析結果をまとめた。
「今までの分析によれば、アマツマラは5つのサブシステムから構成されている。コード化された情報から現実世界に作用する生成部、アマツマラを管理する者と情報のやりとりをするインターフェイス部、破壊したのから情報を取り出しコード化する解析部、コード化した情報を蓄積する記憶部、システムの全体の調整をする制御部だ。それぞれの部分の解析をすればいいけれど、記憶部には関門があつて、情報を送り込むことはできても、情報を取り出すことはできないようになっている。そのため、解析が難しい。」

「うん、アルドアの言う通りね。今は、記憶部には記憶している情報を抽象化する部分があり、それと制御部の間には情報パスがあるから、そのパスを使って調べられないか考えているの。」
「そんなパスがあるのか。見せてくれる。」

「うん、この解析結果の31726行目から31953行目を見てみて、これが、データベースの記述だと思う。」

「なるほど。じゃあ、制御部を解析できれば、そこから記憶部も調べられるかもしれない。」

「うん。」

「じゃあ、手分けして調べようか。」

「わかった。」

「ぼくは制御部から記憶部を解析してみる。」

「じゃあ、私は制御部から生成部と解析部、それにインターフェイス部を解析するね。」

「それでいいこう。じゃあ、作業開始だ。」

「ラジャー。」

ことことアルドアは分担を決めて、分析作業を開始した。

蟹爪ふりやーは、第7連隊の作戦参謀と棒人間に対する作戦を練っていた。連隊全体の三日月隊形では棒人間の動きについていけないため、中隊単位で三日月隊形を取ることにした。中隊長を2体失っていたため、その中隊の第1小隊の小隊長が中隊長の任に就くことにしたが、

アムロディーと想定される白いデストロイビームを放つものに対応するため、第1中隊は蟹爪ふりやーが直接指揮し遊撃の役割を担うことになった。いずれにしても、中隊の統率には不安を抱えたままだったが、

「不安を乗り越えるには、訓練しかない。」

蟹爪ふりやーはそう思った。第7連隊にゼクールが到着した。

「君がゼクールか。」

「はい、そうであります。栄光ある第7連隊の連隊長蟹爪ふりやー閣下にお会いできて光栄であります。」

「世事はいい。やることは分かっているな。」

「はい、ガーチューン連隊長から指示は受けています。動いて動いて動き回ります。東急プラザの屋上に射撃手が隠れているという想定にします。」

「頼む。」

第2中隊から第5中隊が配置についた。第7連隊の全員がゼクールを見つめていた。

「いやー、やはり第7連隊の全員に狙われるというのは、背筋が凍るな。」

蟹爪ふりやーが開始を告げる。

「じゃあ、始めてくれ。」

「ゼクール、行きます。」

ゼクールが全速力で出発した。

「陽動しながら、でも最終的に中隊長を射撃手の軸線に持ってくるように動くんだよな。」

ゼクールは全速で動いた。縦に横に。原宿の配置がだいぶ分かってきたので、遮蔽物を使いながら、中隊に接近し、場合によっては中隊を突っ切って動き回った。各中隊の中隊長が指示をする。

「右に移動するぞ。上だ。いや下か。狙いを集中させるんだ。横に動いた。」

「隠れたぞ。気をつける。建物から出てくるぞ。いや、下から来た。くそ。」

蟹爪ふりやーは上から見ながら評価していた。

「何をやってる。第2中隊と第5中隊の中隊長はとっくに、射撃手にやられて死んでるぞ。うーん、射撃手の牽制に1個中隊をさく必要がありそうだ。」

それでも、各中隊とも指揮伝達の迅速化を工夫して、対応の速度が上がってきた。

「よし、今は第2中隊が集中砲火をあびせることができた。今度は第4中隊だ。動きが良くなってきた。」

1時間ぐらいいして、全員に疲れが出てきたため、蟹爪ふりやーは訓練を終了することにした。

「よし、だいぶ良くなってきた。各中隊、今の訓練を評価して改良すること。本日の訓練はこれで終了する。」

隊員の皆がほっとしたようだった。蟹爪ふりやーがゼコールを呼んだ。

「ありがとう。それにしても速さも動きも良かった。我が連隊の隊員をあれほど翻弄するとは。」

「感心した。」

「おほめ頂き、有難うございます。何よりの光栄でございます。ただ、棒人間は私より2倍は速いです。また、こちらが全く考えもしない行動をとってきます。」

「そうだな。平常心を忘れずに、冷静に対処することが必要だ。」

PARKでは、りとが変身したままソファで明日の行動を考えていた。

「ここが、フフォーレにいないとすると戦艦だけど、戦艦のドアを破るために何か考えないと。固く尖ったものを棒の先に付けるか、それとも、細く強くしたビームを押しあてて切断するか。ここが良ければ良いアイデアを出してくれそうだけど。」

まりが話しかける。

「りと、変身を解除しないの？」

「うん、急に何があってもいいように。」

「そうなの。」

「まりの方はどう？使えそうなモードはあった。」

「モードイレブン、ポジションファイブかセブンが使えそう。3分間ぐらいのエネルギー蓄積時間が必要だけれど、散弾の弾数が増えてそれぞれの弾のエネルギーが強化される。」

「わかった。なるべくそれが有効に使えるようにする。」

「あと、モードサーティーツー、ポジションワン。空気砲でビーム攪乱幕を吹き飛ばせそう。ただ、反動ですごい力が射手にかかるみたい。」

「わかった。使うときは私も支える。」

「ありがとう。それにしても、リア銃のマニュアルを見るとことこのすごさがわかるわ。ここがいればここを救出するのが簡単だったと思う。」

「同意するけど今はいない。でも、何としても助け出す。おとりをうまく使うことを考えている。」

「おとり？わかったわ。私がおとりになってスクーパーズをひきつけるわ。」

「ううん、おとりになるのは私とまり。それでリア銃を有効に使えるようにする。」

「私もおとりで、リヤ銃を使うの。良くわからないけど、りととの作戦で行こう。やっぱり、私ももう少し上手にボードで飛べるように、練習してくるわ。」

「だったら付き合うよ。」

「ほんと。りとといっしょだと心強いわ。」

PARKの周りで、りとが先導してまりがボードで飛んだ。最初はゆっくりと、しかし、狭いところなども飛んでコツを掴んでいった。途中で転んだこともあったが、スクーパーズのバリヤーがだんだん強くなってきていたため、それほど痛くはなかった。そして少しずつ、その速さを増していった。

誰も眠れないまま朝になった。ことことアルドアはアマツマラの解析を続けていた。アルドア

がここに話しかける。

「ここは、制御部のバグ（プログラムのミス）かな。」

「どれ。」

「この25321行目から25354行目まで。記憶部からの信号を受け取るところだけ。」

「通信速度のリミッターがないのが問題かな。」

「そう。だから、記憶部から想定外なほど高速にデータが送られて来ると、オーバーフローを起こして、記憶部のデータで制御部のプログラムを乗っ取ることができる。」

「さすがは、アルちゃん。」

「有難う。これを使って記憶部が調べられないか試してみるよ。」

「そうだね。うまくいくといいね。私が解析したものはこれ。」

「すごいよ、ことちゃん。一晩でここまで調べたんだ。」

「えへへ。有難うアルちゃん。」

「ごめん。」

「何を謝っているの？」

「僕は地球人は下等な生物と思っていた。でも、違った。」

「本当に？有難う。でも、私も同じ。スクーパーズって怖い生物と思っていた。だから、この件はなしね。」

「有難う。」

「それより、アマツマラを調べましょう。戦いを止めさせる手掛かりになるかも。」

「そうだね。ことちゃんが調べた部分を見せてもらっていい？制御部を解析する助けになると思う。」

「もちろん。」

アルドアがことが解析した結果を見ると、ガーチューンが捕虜にしたときに取り上げたモノアイディスプレイを持って入って来た。

「アルドア、捕虜に自分の無事を棒人間に伝えるように言ってくれないか。そして、ことさんとみさ王女様で捕虜の交換をします。」

「棒人間？あつ、りとちゃんのことね。」

「誰だ？今私にテレパシーを送ったのは。」

「私です。捕虜のことです。」

アルドアが説明する。

「昨晚、捕虜のことさんが、この翻訳機を解析して、自分の考えをスクーパーズのテレパシーに変換する装置を作ったんです。ですので、スクーパーズと普通に会話することができます。それを使って協力してアマツマラを解析しているところです。」

「そうか。地球人は馬鹿にできないな。」

「はい、連隊長、おっしゃる通り、できないと思います。」

「それでは、ことこさん、この通信機を使って、自分の無事と王女様との交換の説得を始めてくれ。王女様とことこさんの交換が済んだら、我々は地球から引き上げる。そして、3人全員の無事を、この第8連隊の連隊長ガーチューンが絶対に保証すると。」

「連隊長さんに、みさちゃんを誘拐したわけではないことを説明してくれた。」

「ごめん。連隊長には説明したけど、残念ながら信じてはもらえてはいないみたいだ。」

ガーチューンが答える。

「いや、私たちは、たぶん君たちがデストロイヤーズか他の宇宙人に騙されていると思っていて。」

「わかったわ。連隊長さん、りとちゃんと話して何とかこの戦いを止めてみせるよ。」

「お願いする。アルドア、すくなくともことこさんについては、お前の言う通りみたいだな。」

「はい、それは間違いないと思います。」

ことがモノアイディスプレイを受け取ると、りとに向けて通信を開始した。

「りとちゃん、りとちゃん、ことこだよ。」

モノアイディスプレイから聞こえた声に、りとは飛び起きた。

「ことこ！？ことこなの！？」

ことこに、りとの驚きと嬉しさが混ざった声が届いた。

「そうだよ。りとちゃん、まだ良くわからないけど、スクーパーズと私たちで、何か誤解があるみたいなの。」

「それより今どこなの？」

「ラフォーレだよ。6階の奥の部屋。」

りとが通信の発信源を調べていたまりに目配せをすると、まりはうなずいた。

「待ってて。いますぐ行く。」

「りとちゃん、待って。りとちゃんが来るとまた戦争になっちゃう。」

りとからの返事がないため、もう一度呼びかけた。

「待って、りとちゃん。りとちゃん、りとちゃん！」

しかし、りとは返事をしなかった。その様子を見ていたガーチューンが、蟹爪ふりやりに連絡する。

「やつらが来ます。」

「そうか、それはよかった。」

蟹爪ふりやりは第7連隊の全員に命じた。

「全員配置につけ。」

ガーチューンはアルドアに命じる。

「お前は、ここに残って捕虜を見張れ。」

ここはそれでも必死に呼びかを続けていた。

「りとちゃん、一生のお願い。待って。話を聞いて。」

アルドアがここに話しかける。

「ここちゃん、戦いを止めるのは無理だよ。これだけ戦死者が出てるので、棒人間を倒すまで、たぶんこっちも止まらない。」

「そんな。」

「ごめん。」

「アルちゃんが謝ることじゃないけど。でもアルちゃん、アルちゃんはここに居て。お願い。そうしないと死んじゃう気がする。私が絶対何とかするから。」

「棒人間、りとさんが第7連隊を倒してここまでやって来ると思うの?」

「そんな気がするの。だからお願い。」

「わかったよ。それにここに居ろという命令だし。」

「良かった。」

「外の様子は見えるけど見る?」

「スクーパーズさんとの戦いは見たくないけど、争いを止めるために何かできるかもしれないから見る。」

「意外と強いんだね。外の様子を見るモニターを用意するね。」

「有難う。」

外では、明治通り西側の建物の屋上に陣取った第7連隊が、今か今かとりとたちを待っていた。第8連隊の第111分隊を含む第11小隊は棒人間たちへの攻撃は第7連隊に任せて、竹下通りで移動した戦艦のビーム砲の守備に就いていた。ガジメ、ゼクルル、ゴモの3体は、明治通りのすぐそばで明治通りの様子を観察していた。やがて、原宿の東側の奥の方から何発もの線状の煙が打ち出された。様々な色の煙が上下左右散らばって打ち出されていた。第1中隊のなったばかりのアジム中隊長が蟹爪ふりヤーに話しかけた。

「ビーム攪乱幕です。」

「うむ。もうすぐ来るな。」

少しして明治通りの東側の竹下通りから射撃手が現れた。蟹爪ふりヤーが命じる。

「第1中隊照準。」

第1中隊が照準しようとしたとき、射撃手はすぐに曲がって、明治通りの東側に入っていった。ゼクルルがつぶやく。

「陽動か?しかし、射撃手にしては、動きがいいな。」

一番南側にいた、第4中隊中隊長が叫ぶ。

「棒人間、東急プラザの南側脇。」

棒人間が東急プラザの南側の脇から出てきた。

「第4中隊照準。撃て。」

棒人間は少し高度を下げてビームをかわした。そして、蟹爪ふりやーの方に真つすぐ向かってきた。第2から第5中隊が隊形を整え棒人間に照準する。

「蟹爪ふりやー様に近づけるな。撃て。」

棒人間は急上昇してビームをかわし、東急プラザの奥に隠れた。ゼクルルがガジメに言う。

「おかしいです。動きが悪いとか単調で私にも次の行動が読めます。」

今度は高速で東急プラザ北側の脇から地表すれすれの高さを高速で棒人間が出てきた。そして、明治通りを蛇行しながら飛んできた。各中隊は高度を下げ、棒人間の迎撃に当たった。その一発があたり、棒人間は電柱に激突して壊れた。隊員から歓声が上がったが、蟹爪ふりやーは叫んだ。

「これも陽動だ。気をつけろ。」

ゼクルルも大声で叫んだ。

「蟹爪ふりやー隊長！上です。天井近くのビーム攪乱幕の雲の脇です。」

蟹爪ふりやーが見ると、棒人間と射撃手が並んで飛んでいるのが見えた。

「こっちが本物か！第1中隊は射撃手、第2から第5中隊は棒人間を狙え。」

棒人間は蟹爪ふりやーめがけて急降下してきた。射撃手はビーム攪乱幕の陰に隠れた。第1中隊のビームは射撃手がいるあたりのビーム攪乱幕に集中してビームを放った。

「射撃手を攪乱幕から出させるな。棒人間を孤立させるんだ。」

第2から第5中隊は、棒人間に向けて集中してビームを放った。

「蟹爪ふりやーをお守りするんだ。」

第2から第5中隊は自然と蟹爪ふりやーの周りに集まりはじめた。りとも集中砲火をボードや棒ではじき返し、かいくぐるために、最初ほど高速に近づくことはできなかった。それでも機敏に動き回り、ビームの直撃を食らうことはなかった。蟹爪ふりやーが各中隊長に指示をする。

「動きを予想するんだ。今いるところに撃っても当たらない。」

「わかりました。」

「いけるぞ。」

「はい。」

そのころ、最初に出てきて偽物と思われていた射撃手が、明治通りに出てきた。しかし、東急プラザ上空にいる、棒人間とその後で攪乱幕に隠れていると思われる射撃手に気を取られて気が付いたものはいなかった。地上の射撃手は、

「モードイレブン・ポジションファイブ。エネルギー充填完了。いくわよ。」

とつぶやいた後、ラフォーレの前で戦っている第7連隊に照準を定めた。

「発射。」

すると、これまで見たことがないほど強力なビームが打ち出され、途中で細かく散って、散弾となり、第7連隊に襲い掛かった。第7連隊のほとんどの隊員はなにが起きたか分からないまま、散弾が当たって消えていった。蟹爪ふりやーは、散弾が多数当たり、吹き飛ばされながらも、体勢を立て直した。

「なんだ。何か起こった。」

周りを見ると、第7連隊の隊員は蟹爪ふりやーのビームの影の位置にいた数体しか残っていなかった。

「連隊が全滅？どこからの攻撃だ。」

しかし、そんなことを考えている暇はなかった。棒人間が棒を逆手に持って超高速で蟹爪ふりやーに迫っていた。りとが棒で蟹爪ふりやーを突き刺そうとしたが、鉄の部分で払いのけた。

「ちっ。ちよっと遅かった。」

残念に思う気持ちがりととの口からもれた。時間がかかっては、ことが危なくなると思って、まりの攻撃中にも蟹爪ふりやーに迫り、蟹爪ふりやーをしとめるつもりだったのである。そのため、りとはすぐに再度蟹爪ふりやーに突撃して行った。蟹爪ふりやーも叫ぶ。

「くそー。こいつだけは何としても倒す。」

りとも前に使ったボードを奪う作戦は2度と通用しないことはわかっていた。数体残っていた隊員がりとに向かって来た。何体かをルナ銃で、何体かを棒で切り裂き、最後の1体を棒に串刺しにしたまま、蟹爪ふりやーに近づいて行った。蟹爪ふりやーが言う。

「私の攻撃を防ぐ、人質のつもりか。」

串刺しになった隊員が叫ぶ。

「蟹爪ふりやー様、自分ごと攻撃して下さい。みんなの仇を取ってください。」

蟹爪ふりやーはとっさに対応を考えた。棒をボードで防げば、棒人間を蟹爪で攻撃できる。ボードに当たるだけならパリヤーが強力な第7連隊隊員は助かる可能性が高いと。りとが、蟹爪ふりやーに迫り棒で突こうとしたとき、蟹爪ふりやーはボードでその攻撃を防ごうとした。りとは、棒を動かして、串刺しにしたスクーパーズを蟹爪ふりやーのボードのエンジンに押し当てた。

「熱い。熱い。連隊長、助けて下さい。」

そのスクーパーズは、そう叫びながら黒焦げになっていった。そして、焦げたスクーパーズの一部がエンジンに入ったため、エンジンが故障して蟹爪ふりやーは下に落ちて行った。落ちる過程で、黒焦げになったスクーパーズは消滅していった。りとは急降下し落下する蟹爪ふりやーに下から棒で切りかかる。蟹爪ふりやー尾でそれを跳ね返そうとするが、自分が原宿クエストの方に弾き飛ばされてしまった。

モニターを見ていたエビふりやーが悲痛な声を上げた。

「第7連隊が、私の部下たちが・・・」

みさも予想外の事で、声を出せずにいた。エビふりヤーの頭の中には、第7連隊の思い出が駆け巡った。

まだ、普通のスクーパーズの姿だったエビふりヤーが第7連隊に着任したところは、第7連隊もスクーパーズ最強の連隊というわけではなかった。

「カキふりヤー連隊長、この度第7連隊に着任したエビふりヤー少尉であります。」

「ご苦労。デストロイヤーズとの戦争で、今はお前のような若いスクーパーズの活躍が期待されている。第3中隊の第4小隊をお前に任せる。小隊の指揮をしっかりと頼むぞ。」

「はい。小隊を指揮し、デストロイヤーズを打ち破り、天の川銀河の平和を守るために全力を尽くします。」

「うむ、がんばってくれ。」

着任してからエビふりヤーは、自分が指揮する小隊で、人一倍訓練に励んだ。今日は敵拠点への突撃訓練である。

「第3分隊！援護射撃が薄いぞ。どうした。それでは第1分隊がやられてしまう。」

「第1分隊！突撃が遅い。それでは敵に捕捉される。最終的に戦争を終わらせるのは、我々地上軍だ。無駄な犠牲を避けるためにも迅速に勝利しなくてはいけない。落ち着いて、だが、短時間に敵に近づくんのだ。地形をうまく利用することが肝心だ。」

厳しい訓練が続いた。エビふりヤーは自分に言い聞かせていた。

「隊員を死なせないためにも、みんなに嫌われても私が厳しくしなくては。」

着任2年後、スクーパーズ本星から1万年光年ぐらいの距離の惑星系に、デストロイヤーズがひそかに基地を築いていることが判明した。第43艦隊を向かわせたが、デストロイヤーズが惑星に多数の強力な砲台を設置し、宇宙機雷を敷設していたため、大損害を出して撤退してしまつた。デストロイヤーズの砲台を破壊するため、第5、7、9連隊の地上軍が800隻の小型上陸艇に分乗してその星域に向かった。スクーパーズの艦隊が、上陸部隊の侵攻ルート確保のために機雷原に向けてミサイルを発射し、機雷原の中で爆発させた。続いて、ビーム攪乱幕を積んだミサイルを発射し、やはり機雷原の中で爆発させた。そのため、視程が短くなっていった。しかし、デストロイヤーズの砲台の中の超長距離砲の射撃により艦隊にも被害が出ていた。その損害が限界に達しようとしたとき、3つの連隊の小型上陸艇が機雷原に向けて発進していった。それと同時に艦隊は損害を避けるために、後方へ撤退して行った。デストロイヤーズはビーム攪乱幕を吹き払うためのミサイルを発射し爆発させた後、小型上陸艇に向けて、砲火を集中させた。ビームが命中したり機雷に当たったりして、スクーパーズの小型上陸艇は、その数を減らしていった。あまりの恐怖に隊員たちが叫びを上げていた。

「たどり着けるのか？」

「上陸用舟艇右舷に被弾！制御不能。」

「ふん、こんなへなちよこ弾にあたるかよ。」

「お母さん！」

「正面、機雷だ。右にかわせ、右だ。」

「ふはあはは！ふはあはは！」

エビふりヤーが自分の小隊の隊員が乗っている12隻の小型上陸艇に呼びかける。

「全員、落ち着け。ビーム攪乱幕の濃いところをたどっていくんだ。」

小型上陸艇は少しずつ数を減らしながらも、デストロイヤーズの基地から3キロメートルの地点に近づいて行った。

「よし、上陸艇のビーム攪乱幕を散布、着陸する。着陸後はポイントA17D32に集合。砲撃班は、小型ビーム砲を忘れるなよ。」

スクーパーズは、20個ほどのポイントに分かれて集合したが、その数は出発時の半分近くになっていた。デストロイヤーズの基地の守備隊は1個連隊ほどで、基地を攻めるには、兵力が不足していたが、砲台を破壊しないと帰還することもできない状況であるので、スクーパーズ兵は必死に進路を開き、基地に突撃していった。エビふりヤーの小隊も基地に侵入、強化した塹壕を掘りながら一つの砲台のまわりを取り囲んだ。

「ビーム攪乱幕を投射する。敵がそれを吹き払うまでの時間に、一斉に砲台に突撃し、砲台の壁面に砲台爆破装置を取付け退避する。」

一斉に突撃することにより、敵の攻撃を分散させ攻撃の密度を下げ、たどり着く兵を増やす古典的な方法である。確実に犠牲も出るが、強力な支援を得られない状況では、そうするより他はなかった。

「砲台を破壊し、天の川銀河を守って、故郷へ帰るんだ。行くぞ。ビーム攪乱幕投射！」

各方向からビーム攪乱幕が連続的に投射される。ほぼ、同時にデストロイヤーズのファンがビーム攪乱幕を吹き飛ばし始める。

「突撃！」

エビふりヤーが先陣を切って砲台に突撃を開始した。それに呼応して、小隊の隊員が四方から砲台に向けて突撃する。

「エビふりヤー隊長に続け。突撃！」

ビーム攪乱幕で煙る中を、四方、上下から突入していく。デストロイヤーズ側のビーム掃射で、隊員数が次々に倒れる中、エビふりヤーが壁に到達する。

「壁に到達した隊員！爆破装置を壁に取り付けろ。爆発コード2318。繰り返す、爆発コードは2318だ。」

壁に到達した隊員が、壁に砲台用爆弾を取り付けたことを確認したエビふりヤーは、退避開始を指示する。

「よし、ビーム攪乱幕投射だ。一斉に退避するぞ。退避！」

隊員が元居た場所に戻って行った。退避する方が接近するときより犠牲が少なかった。

「よし、爆破するぞ。」

そのとき、隊員の一人が止めた。

「待ってください、隊長。まだ、ゼトシジが壁のところにあります。」

「くそー。怪我して動けないのか。」

エビふりゃーは動けない隊員にテレパシーで呼びかける。

「ゼトシジ！逃げてこれられないか。」

「隊長！動けません。逃げられません。」

「怪我をしているのか。」

「はい。このまま爆破してください。そうしないと皆が家に帰れなくなります。」

エビふりゃーは起爆装置を第1分隊長に渡した。

「私の合図で、爆破してくれ。」

「隊長はどうされます。助けに行くのは無理です。」

「大丈夫だ。少し近づいて、ビーム攪乱幕の切れ目で、スクープビームでやつを引っ張る。」

「わかりました。ただ、それは私がやります。」

「いや、私がやろう。私の方がサイコバリヤーが強力だ。少しなら、敵のビームに耐えられる。」

「わかりました。隊長の合図で起爆装置のスイッチを押します。」

「頼む。」

ビーム攪乱幕の切れ目で、ゼトシジが見えたところで、エビふりゃーが少し前に進みながら上方に飛び出た。そして、ゼトシジに指示をする。

「ゼトシジ！バリヤー最大だ！」

「わかりました。」

間髪入れず、エビふりゃーがスクープビームでゼトシジを引き寄せる。他の隊員は、スクープビームを砲台目掛けて発射する。逆に、デストロイヤーズ側も砲台の銃座や身を乗り出してデストロイビームで応戦する。ビームが飛び交う中、ゼトシジを強化塹壕まで引き寄せることに成功した。エビふりゃーが叫ぶ。

「爆破！」

「爆破！」

砲台が吹き飛んだ。隊員が歓声を上げる中、エビふりゃーがゼトシジに呼びかける。

「ゼトシジ、大丈夫か。」

見ると、引き寄せる途中にデストロイビームが命中したようだった。

「分隊長殿、有難うござい・ま・た。」

そう言って、ゼトシジが息を引き取った。

「ちくしょー。」

ただ、ゼトシジの顔が安らかだったのが救いだった。しかし、すぐに中隊長から別の砲台の破壊の指示が来た。

「エビふりヤー、みごとだ。次は、そこから500メートル東の砲台を破壊してくれ。頼む。」
「ゼトシジが戦死しました。」

「そうか。それは残念なことだ。私の中隊では半分近い部下が戦死している。お前の分隊が一番健在だ。つらいだろうが、砲台を破壊しないと我々はここで全滅だ。」

エビふりヤーが静かに答える。

「わかりました。東の砲台に向かいます。」

「頼む。」

エビふりヤーは部下を連れて、東の砲台に向かった。その4時間後に戦いが終わった。全ての砲台の破壊に成功した。デストロイヤーズは基地の設置を諦め、基地支援艦隊はアンドロメダ銀河への撤退を開始した。しかし、砲台破壊に向かった約三千体の兵員のうち、残った兵員は八百体ばかりだった。エビふりヤーの小隊は4つの砲台の破壊に成功し、本作戦における最も活躍した小隊となった。それでも、45体の隊員のうち戦死7体、重傷10体、軽傷15体の損害を出し、エビふりヤーの心は沈んだままだった。砲台の破壊と共に、スクーパーズの輸送艦と護衛艦がやって来た。スクーパーズ艦隊主力は、逃げたデストロイヤーズ艦隊の追撃戦に入っていた。輸送船がハッチを開け隊員を収容した。それ以外にも見慣れぬ輸送船が着陸してデストロイヤーズの捕虜を運んで行った。

エビふりヤーは順調に出世を続け、少佐に昇進し、第7連隊第1中隊の中隊長になったところ、蟹爪ふりヤーが分隊長として着任した。

「蟹爪ふりヤー、分隊長として着任しました。」

「ご苦労。連隊長閣下の挨拶は済ませたかね。」

「はい。ただ私には連隊長よりも大活躍されているエビふりヤー隊長の部下になれて、大変光栄と存じています。」

「そうか。そう言ってもらえると嬉しいが、連隊長の方が階級が上だ。軍隊だから、階級の違いに注意するように。」

「はい、ご注意有難うございます。気を付けます。ただ、隊長に私の喜びの気持ちをお伝えしたかっただけです。」

「わかった。その気持ちは喜んで受け取っておく。早速だが、君には第132分隊の指揮をお願いします。」

「はい、光栄であります。」

「部下には憎まれるかもしれないが、訓練は手を抜かず、厳しくしっかりとやること。それが部下のためになるし、いつかはきつと分かってもらえるはずだ。」

「はい、訓練は手を抜かないようにします。エビふりヤー隊長も、私に不足してる点がありましたら、ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。」

「わかった。ビシビシいくぞ。」

「全力で頑張ります。」

エビふりヤーは、蟹爪ふりヤーを懸命に鍛えた。それを見ていた隊員の中には、

「名前に中隊長と同じ『ふりヤー』がついているのが気に食わないのかな？蟹爪ふりヤー分隊長をあんなにしごくなんて。」

と考える隊員もいたぐらいであった。

天の川銀河とアンドロメダ星雲との中間点で、お互いの観測所をめぐる戦いが起きた。相手の銀河の近くで戦闘するためには、補給線の長さによる不利を埋めるために大きな補給船団を伴った大作戦とならざるを得ず、そのような戦いはあまり頻繁に生じることにはなかった。しかし、両者の中間に位置する観測点のための小さな星での戦闘は、両者とも小規模の動員でも実行可能なため、かなり頻繁に起きていた。蟹爪ふりヤーが所属してから、2年が経ったころ、第7連隊はスクーパーズが観測所を置いている中間地点の星に駐屯していた。そこは、デストロイヤーズとの戦いの最前線であった。そのころには、エビふりヤーは連隊長に昇進し、すでにエビ天ぶらの形に擬態できるようになっていて、その衣の装甲により普通のデストロイビームぐらいなら命中しても大丈夫になっていた。一方の蟹爪ふりヤーは、また普通のスクーパーズの姿だったが、小隊長に昇進していた。そこに、デストロイヤーズの部隊が急襲した。

戦闘は、デストロイヤーズ側が橋頭堡を築いた後、スクーパーズの駐屯部隊の突出部に攻撃を集中させ、少しずつ占領範囲を拡大していた。

「連隊長、あぶない。」

デストロイヤーズ7体がビームをエビふりヤーに集中させて撃ってきた。蟹爪ふりヤーの言葉で、エビふりヤーは強化壕の中に隠れた。エビふりヤーの上で集まったビームがぶつかりあって、はじけ飛んだ。

「蟹爪ふりヤー、感謝する。油断していた。」

「お気を付けてください。デストロイヤーズの侵攻経路やエビふりヤー様を狙う作戦を考えると、敵はかなり手慣れた部隊です。」

「蟹爪ふりヤーの言う通りだ。多少デストロイビームを跳ね返すことができているので油断していた。敵の状況に対する対応力が速い。このままでは、敵に戦線を突破され、駐屯部隊の戦力が壊滅する危険がある。それを防ぐためには兵員をポイントA2rまで後退させ集中させたいが、撤退中に攻撃を受けると、浮足立って総崩れになる恐れがある。」

「おっしゃる通りです。私の小隊が敵を抑えますので、他の部隊をポイントA2rまで移動させて下さい。」

「これは大変危険な任務だぞ。」

「わかっております。」

「実際お前の小隊にしかできない任務だ。頼む。改めて命じる。第11小隊は連隊の撤退まで防衛線を維持せよ。こちらも、できるだけ速やかに撤退する。」

「了解です。第11小隊は前進し、敵の進撃を食い止めます。」

「では、ポイントA2rで会おう。」

「はい、敵の侵攻を遅らせてポイントA2rに向かいます。」

エビふりやーは蟹爪ふりやーを、

「全体のことを考えていて、本当に見込みのあるやつだ。」

と思った。第11小隊が配置につくと同時に、エビふりやーが撤退開始を指示した。

「第11小隊以外の部隊は、ポイントA2rまで後退だ。そこで、デストロイヤーズの部隊に反撃する。できるだけ悟られないように、壕内を移動するんだぞ。」

各部隊はダミーを配置した後、撤退を開始した。最前線の蟹爪ふりやーが部下に命令する。

「連隊長から合図があるまで、ここを死守する。連隊の他の部隊がA2rポイントに集結する前に突破を許せば、連隊が大変な危機に陥ることになる。なんとしても死守するんだ。」

隊員が答える。

「蟹爪ふりやー隊長とどこまでもお供します。」

「よし。ダミーを使いながら壕内を高速に移動して攻撃しろ。敵に数が少ないことを悟らせるな。ビーム攪乱幕のファンは常時稼働。サイコエネルギーは使い果たしてもいい。砲兵からの支援はある。30分は持たせるんだ。全力で頑張るぞ。」

「了解です。」

デストロイヤーズの集中した部隊の正面に、第11小隊の約50体が距離を取って並んだ。ダミーを使い、デストロイヤーズの部隊からはその10倍程度の数のスクーパーズ兵がいるように見えていた。第11小隊の隊員が素早く動いてビームを連続して発射して、デストロイヤーズを近づけないようにしていた。突撃しようとするデストロイヤーズがいると、そこに集中してビームを放った。しかし、その戦法は体力を急速に奪っていった。バリヤーが弱くなり、動きも遅くなっていった。そして、距離が離れているとは言え、圧倒的多数のデストロイヤーズ側からのビームのため、隊員が少しずつ傷つき倒れて行った。

「がんばれ！がんばるんだ。あともう少しだ。」

本当のところは、蟹爪ふりやーも連隊の撤退がいつ完了するのかは分からなかったが、そう励ますしかなかった。しかし、その後すぐに砲兵による支援攻撃が始まった。デストロイヤーズはすぐに塹壕まで引いて行った。砲火は激烈であったが、その何発は第11小隊の塹壕にも命中した。

「砲兵は何をやっているんだ。」

蟹爪ふりやーはそう叫んだ。ちょうどその時7分後に第11小隊が撤退するための1分半の砲

火の休止時間があるとの連絡が入った。そのため、不満を言うより撤退の準備をするのが先だった。生存者とけが人を確認し、けが人を運搬する隊員を割り当てた。砲火が止んだ。蟹爪ふりやーが命令する。

「撤退だ。」

しかし砲火が止むと、デストロイヤーズの歩兵がビームを撃ってきた。デストロイヤーズの砲は、スクーパーズの砲を狙っていたため、砲撃の心配はなかったが、デストロイビームの攻撃は熾烈を極めた。隊員たちは塹壕のないところは、低空をジグザクに動いて飛んで逃げるが、3体が怪我をして墜落した。

「くそー。」

蟹爪ふりやーは、落ちたスクーパーズに飛び寄り2体を自分の上に載せ、1体をビームでけん引して撤退した。砲撃を恐れて壕から出てくるデストロイヤーズはいなかったが、遠距離からのデストロイビームが多数飛んできていた。数キロメートル離れたところで、砲撃が再開した。とりあえず、逃げきれたと思った蟹爪ふりやーは、負傷者の応急手当をすることにした。しかし、連れ出した負傷者の3分の1が息絶えていた。遺体を持って帰りはしたが、まだ、戦闘の可能性があるため、規則通りに記録だけして遺体を置いていく他はなかった。

「すまん。」

蟹爪ふりやーは、また2体を乗せて撤退を再開した。連隊に帰還して、エビふりやーに報告した。

「第11小隊は、遅滞戦闘を行い、敵の進撃を30分遅らせたまま帰還しました。」

「有難う。第7連隊の本隊は1体の犠牲も出すことなく撤退を完了した。蟹爪ふりやー、本当にご苦労だった。」

「1体の犠牲もなくでありますか。良かった。本当に良かったであります。良かった・・・」
蟹爪ふりやーは涙を流しながら、戦死した隊員を思い、静かに語りかけた。

「よく全力で頑張った。お前たちの犠牲は無駄ではなかったんだ。」

現在から2年と少し前、スクーパーズとデストロイヤーズが休戦する前の最後の戦闘があった。スクーパーズがアンドロメダ銀河周辺のズテラド星域の惑星ゾラに前線基地を設営していた。10個艦隊、10個戦闘連隊、10個工兵連隊による大規模侵攻である。スクーパーズ最強連隊となった第7連隊も派遣されていた。エビふりやーは第二形態への擬態が可能になっていた。蟹爪ふりやーは中隊長に昇進しておりに蟹爪フライの形に擬態できるようになっていた。艦隊では補給の困難さが災いして劣勢であった。大きな犠牲を伴う艦隊の奮戦でデストロイヤーズの大規模な上陸部隊が惑星に降下することは阻止していた。しかし、撃沈または戦闘不能になる艦が増加していった。艦隊の増援もあったが、劣勢を挽回するためには艦隊の補給と整備を行う基地の設営が急務とされていた。

第7連隊は基地の設営をしている10個工兵連隊の直衛部隊として配置されていた。その周

りに、残り9個の連隊が配備されていた。その日も艦隊戦が行われ、スクーパーズの艦隊がデストロイヤーズの攻撃をなんとかしのいでいた。すると、超高速な小型の宇宙船が艦隊の防衛網をかいくぐり、惑星ゾラの基地の近くに着陸したとの連絡が入った。

蟹爪ふりやーがエビふりやーにそのことを報告する。

「デストロイヤーズの高速小型宇宙船が着陸したとの連絡がありました。」

「小型とはどのぐらいの大きさだ。どのぐらいの人数が乗ることができるのか。」

「5名程度ではとのことです。」

「5名か。偵察部隊か。」

「本部ではその考えです。その5名が艦隊に地表の攻撃ポイントを指示するのではないかと。」

「それが妥当な推測だろう。」

「現在、1個艦隊を設営中の基地の前面に展開して、艦隊のバリエーで基地を保護するとともに、地上からの通信に対して最強レベルのジャミングをかけるそうです。」

「そうか、それではこちらの連隊間の通信もできなくなるな。」

「そうですが、相手は5名ですので、1個中隊もあれば十分対応できると思います。」

「そうだな。だが念のため我々も警戒レベルを引き上げるぞ。」

「そこまでしなくても。ここまで来るには2つの連隊を突破する必要があります。」

「そうだが、通信ができない以上、突破されたら敵は突然現れる。こちらの対応が遅れば、甚大な被害が出る。」

「了解しました。休憩中の隊員を呼んで警戒レベルを引き上げます。」

「申し訳ないが頼む。なぜだかいやな予感がするんだ。」

「こっちに來てから最初のお客さんですから、せいぜい歓迎してあげないと。」

「ああ。」

遠くの戦闘の音が静かに聞こえた。

「始まったようですね。」

「そうだな。第21連隊が片づけてくれると思うが。」

しかし、音は止まずに、少しずつ近づいてきた。第7連隊の右前に配置してた第16連隊から信号弾が上がった。

「信号弾です。2つ後方の防衛線まで後退するようです。本当に5人だけなのでしょうか。部隊が隠れていたとか。」

「わからん。第7連隊も戦闘態勢を取る。他の作業を中止して全員防衛線に戻れ。」

「わかりました。その命令を全隊員へ伝達します。」

「頼む。通信が不完全だから、確認は通信に頼らず直接伝令を出すように言ってくれ。」
少しして、蟹爪ふりやーが戻って来た。

「全員配置につきました。」

そのとき、第16連隊から防衛ラインを突破された旨の信号弾が上がった。エビふりヤーが指示をする。

「合戦準備の信号弾を撃て。」

「了解です。」

空に向けて信号弾が撃たれた。そのとき、エビふりヤーから数百メートル前方の第7連隊の最外郭の防衛線に攻撃が始まった。

「攻撃が始まりました。」

遠くの戦場を見ていたエビふりヤーが話しかける。

「何だ、デストロイヤーズが撃つビームが白いぞ。」

「連隊長のおっしゃる通りです。白いビームです。デストロイビームでしょうか。」

「それは分析しないと分からないが。」

第7連隊の最外郭防衛線が突破されたことを示す信号弾が撃たれた。エビふりヤーが驚く。

「まだ、戦闘開始から2分しか経っていないが。本当に5人しかいないのか。」

「はい、5人との情報です。間もなく第2防衛ラインが戦闘に入ります。」

「このままでは、第2防衛ラインもそんなに長く持たないだろう。それが破られたら、最終防衛ラインだ。相手の数が少ないなら我々が直接対応したほうがいい。蟹爪、行くぞ。第2防衛ラインの第3中隊と合流する。第1中隊はここで待機だ。」

「わかりました。」

「私は第2形態になっていく。」

「最初からですか。」

「相手の強さから考えて、この第1形態では対応できない。」

「久々の直接戦闘、高揚します。全力で頑張ります。」

「落ち着いて行けよ。」

「はい。」

第2形態になったエビふりヤーと蟹爪ふりヤーがボードに乗って飛び立つ。

第2防衛ラインに到着すると、すでに突破される寸前だった。白いビームを撃つデストロイヤーズに対して、隊員が必死に攻撃しているが、白いビームの盾で防がれて効果が無いようだった。そして、白いビームで攻撃されると一撃で一個小隊ぐらいが消滅してしまっていた。

「これはいかん。」

エビふりヤーが高速で突撃していった。そのデストロイヤーズ兵が防衛線のスクーパーズ兵に白いビームを放った瞬間、エビふりヤーがその前に立ちふさがり、尾でビームを跳ね飛ばした。それを見た隊員が叫んだ。

「連隊長!」「連隊長が来てくれた。」

エビふりヤーが蟹爪ふりヤーに命じる。

「私が正面から対処する。蟹爪は側面から攻撃してくれ。」

蟹爪ふりやーが側面に周りこもうとすると、1人のデストロイヤーズが出てきて、デストロイビームを放ち、それを阻止しようとした。そのビームの色は普通のデストロイビームと同じで黒かったが、今までに経験したことがないほど強力だった。蟹爪ふりやーはなんとか、そのビームをはじき返したが、自分もかなり跳ね飛ばされてしまった。体勢を崩した蟹爪ふりやーに向かって白いビームが放たれた。それはエビふりやーがカバーに入り跳ね返した。エビふりやーが蟹爪ふりやーに声をかける。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。ただ、あのビームもかなり強力です。」

「わかった。」

白いビームのデストロイヤーズ兵が蟹爪ふりやーを撃った。デストロイヤーズ兵に指示をした。白いビームのデストロイヤーズ兵だけ残して、4体が先に進もうとした。エビふりやーと蟹爪ふりやーがそれを阻止しようとしたが、白いビームを避けながらだと、思うように進めなかった。

「蟹爪、最初にあの白いやつを倒す。それから他の4人を追う。右から近づけ。」
残りの4人に対しては、最終防衛ラインの隊員の頑張りを期待するしかなかった。

「最強の第7連隊隊員だ。頼むぞ。」

前と横から白いビームを出すデストロイヤーズ兵に襲い掛かるが、右手の白いビームの剣と左手の白いビームの盾で防がれ、なかなか倒すことができなかった。ただ、相手にも余裕はあまりないようだった。エビふりやーが指示をする。

「いくぞ、連携攻撃アクレシヨンドィスク（降着円盤）。」

「はい！」

エビふりやーと蟹爪ふりやーは、デストロイヤーズ兵のすぐ傍を周りを回りながら、次々に攻撃を仕掛けていった。

「これならば、反撃できまい。」

デストロイヤーズ兵も防戦一方だった。エビふりやーが命じる。

「ツインメテオアタック。」

2体が並んで、デストロイヤーズ兵に迫った。デストロイヤーズ兵が剣と盾で防ぐが、2体はそのまま下に押し込んでいった。デストロイヤーズ兵が地面に衝突した。エビふりやーが命じる。

「蟹爪ふりやー、先にいった4人を頼む。私は、こいつを片づける。」

「了解です。先の4名の攻撃を阻止します。」

「頼む。」

「全力で、頑張ります。」

蟹爪ふりやーが先に行った4人を追って行った。エビふりやーは倒れたデストロイヤーズ兵に迫って行った。デストロイヤーズ兵が白いビームを撃って来た。エビふりやーは防御体制を取る

が、ビームはエビふりヤーをそれた。エビふりヤーはいやな予感がして振り返ると、蟹爪ふりヤーのボードのエンジン部に命中して、蟹爪ふりヤーが落ちて行った。

「この状況でボードのエンジンを狙ったのか。冷静な対処だ。手ごわいな。うかつに飛び込むのはやめた方がいいか。」

エビふりヤーは突入するのを止めて距離を取った。デストロイヤーズ兵はすこし残念そうな顔をしたが、すぐにボードで飛び立ち、蟹爪ふりヤーの方へ向かった。

「させるか。」

エビふりヤーは横からスクーパーズ兵をけん制して蟹爪ふりヤーに近づけないようにした。デストロイヤーズ兵は時より白いビームを撃つが、積極的に攻撃してくることはなく、足止めをしているようだった。10分ぐらいが経ったところ、建設中の基地で大爆発が起きた。火は天を焦がすほどに立ち上った。

「第2中隊、防ぎきれなかったのか。」

それを見たデストロイヤーズ兵はビーム攪乱幕を出しながら上昇していった。建設中の基地には艦隊のための補給物資も置いてあったため、つぎつぎに誘爆していった。10個連隊いた工兵連隊が壊滅してしまったようだった。

「しかし、やつら、たった5名で基地を破壊しに来たのか。くそー、目的が観測と想定していたため広い範囲に戦力を分散させすぎた。」

建設中の基地の方から、他の4名のデストロイヤーズ兵も上昇していった。白いビームを撃つデストロイヤーズ兵と合流するようだった。

「迎えが来るのか。私のボードのエネルギーがあまりない。上空に上がられると追っていくのは無理か。」

恨めしそうに、デストロイヤーズ兵を見上げた。

「卑怯だぞ！降りて来い！」

そんなことを叫んでも、降りてくるわけではないが、そう叫ぶしかなかった。が、白いビームをデストロイヤーズ兵が、何かを見つけたのかかなり南の方に向けて降下してきた。

「降りてきた。」

エビふりヤーはその降下地点に向けて、ボードを飛ばした。しかし、一般のスクーパーズ兵が立ち入ってはいけないと定められた区域に当たってしまった。

「ここからは入れないか。くそー。」

エビふりヤーは、立ち入り禁止区域の手前で地団太を踏みながら、降下して行くデストロイヤーズ兵を見つめていた。

すると、1個分隊ほどのスクーパーズ兵が上がって行った。エビふりヤーがそのスクーパーズ兵の色が全員黒いことを訝しがった。

「知らない兵だな。宇宙艦隊の陸戦隊か？何で色が黒いんだ。」

その黒いスクーパーズたちは、今までに見たことのないビームを発した。

「なんだ、あの黒みがかっているスクープビームは。」

ただ、そのデストロイヤーズ兵は難なくそのビームをかわしたり、白いビームのシールドで弾き飛ばして進んで、そして白いビームでそのスクーパーズ兵を簡単に倒してさらに降下していった。

「くそー。艦隊の陸戦隊では相手にならない。私が行かないと。」

エビふりヤーは立ち入り禁止区域の標識を無視して、デストロイヤーズ兵を目掛けて進んでいった。上昇したエビふりヤーがデストロイヤーズ兵が向かう先を見てみた。すると、デストロイヤーズの一一般民が、スクーパーズ兵に追い立てられて輸送船に乗せられているところが見えた。「ん。何をしている。建設中の基地の近くで戦闘の危険を避けるために、住民を疎開させるのか。」エビふりヤー、デストロイヤーズ兵に接近していくと、地上の部隊からそのデストロイヤーズ兵に呼びかけがあった。

「現在、我が隊に接近中のデストロイヤーズ兵に告ぐ。こちらを攻撃するならば、デストロイヤーズ住民の命は保証しない。繰り返す。こちらを攻撃するならば、デストロイヤーズ住民の命は保証しない。」

エビふりヤーがつぶやく。

「一般住民を人質にするのか。あまり感心しないな。本当に殺しはしないだろうけれど。」

デストロイヤーズ兵は、低空を飛び攻撃はせずに記録だけしているようだった。下から、スクーパーズ兵が攻撃するが、効果があるようには見えなかった。そして、上空へ去って行った。その後、白いビームを放つスクーパーズ兵は他の4名のスクーパーズ兵と共に超高速の小型の宇宙船で立ち去って行った。去った後、エビふりヤーが心の中でつぶやく。

「しかし、やつかいなやつらが現れたな。いずれにしろ、あの白いビームを出すやつ対策を至急ねる必要があることは確かだ。」

少しして、デストロイヤーズの一一般住民を乗せた輸送船は静かに上昇して行き、見たことがない護衛艦隊と合流した。

基地の建設が失敗し、補給がままならなくなってきたため、スクーパーズの侵攻部隊は撤退を余儀なくされた。デストロイヤーズ艦隊の追撃により、十分な補給がないまま戦うことになったスクーパーズ艦隊は天の川銀河への帰投までに半分近くの艦を失った。

幸運にも第7連隊はスクーパーズ本星に帰還することができた。そしてほどなく、エビふりヤーの近衛連隊への異動と蟹爪ふりヤーの第7連隊連隊長への昇進が決まった。

「連隊長、昇進と近衛連隊への異動おめでとうございます。」

「ああ、王族の方々を直接お守りする名誉ある任務だ。だが、ずうっと過ごした第7連隊に居たかった。しかし、命令だから仕方がない。」

「私では心配でありますか。」

「そんなことはない。お前の強さ、適性を認めたから軍もお前を連隊長に選んだんだ。私も、おまえにはその資格が十分あると思うよ。」

「有難うございます。」

「活躍を期待している。だが、あの白いビームを出すデストロイヤーズ兵に対する対処は考えておいた方がいい。」

「はい、いまあの兵に対する戦術を連隊司令部で検討しています。次に対戦することがあれば、倒してご覧にいきます。」

「それは頼もしいな。」

「任せて下さい。」

「そうか。では、私は出発する。第7連隊を頼むぞ。」

「はい。全力で頑張ります。連隊長もお達者で。」

「今日からは、お前が連隊長だな。」

「私にとっては、エビふりヤー閣下が永遠に隊長であります。分からないことがありましたら、相談に伺いたいと思いますが、よろしいでしょうか。」

「ああ、俺にできることがあったら何でもする。いつでも来てくれ。」

「有難うございます。」

「ではまた。」

「はい、次にお会いできる日を楽しみにしています。」
そう言って、2体は別れていった。

まりの攻撃で第7連隊が壊滅するところを目の当たりに見た第11連隊は、周りが見えないぐらい竹下通りのビーム攪乱幕を濃くした。ガーチューンがモーガンにテレパシーで話しかけた。

「モーガン、ビーム攪乱幕を濃くしすぎた。これでは、相手の動きが分からなくなる。」

「センサーがあるから大丈夫だ。」

「センサーでは全体の動きが分かりづらく、指示が遅れる。」

「しかし、相手の武器は強力だ。ビーム攪乱幕を濃くした方が安全だ。今は戦闘中だ。言い争いをしていて時間はない。わかった、お前の意見を聞いて見張りを出す。以上だ。」

「モーガン！」

モーガンは返事をしなかった。

「ガジメ、おまえの分隊で明治通りを見張れ。棒人間の動きを掴むんだ。」

「ゼクルル、ゴモと私の3体で、もうやっています。しかし、明治通りにやつらはいません。」

「そうなのか、わかった。しかし、やつらはどこにいるんだ。」

ガーチューンはいやな予感がした。

りとは蟹爪ふりヤーを弾き飛ばしたあと、まりと打ち合わせた通りに、竹下通りの原宿駅側の入口に向かった。そして煙の中に飛び込み、近くにいたスクーパー兵たちを棒から伸びているホースを使って静かに手早く切断して消滅させた後、道路に敷設してあったパイプ類を切断し、外から来て煙が噴き出している側のパイプを横に蹴り、竹下通りには煙がこないようにした。まりも第7連隊を攻撃した後、目立たないように迂回して竹下通りの入り口に向かっていた。他のほとんどのスクーパー兵たちは、明治通りで戦闘が起きると考えていて、しかもビーム攪乱幕を濃くしていたため何が起きているかわからないようだった。テレパシーが聞こえなくなったことを不審に思っただけで入口を確認に来たスクーパー兵は、まりとが防弾版に隠れながら、ホースで切断して始末していた。急所を正確に切断しているため、スクーパー兵はテレパシーを発することもできずに消えていった。すぐに、まりがやって来た。りとは、地上に降りたまりの背中に、まりのボードを背負わしながら話しかける。

「うまくいった。」

「本当。すごい、りと。」

「次は、竹下通りのスクーパーズを片づける。」

「空気の充填は完了しているわ。」

「じゃあ、後ろから支えるね。」

リア銃を竹下通りに向けて構えたまりが大声で言う。

「モードサーティーツーポジションワン。空気砲、いけー。」

引き金を引くと非常に強い空気の反動があった。りとに支えられながら、その反動を受け止めた。

竹下通りのビーム攪乱幕が吹き飛んで行った。りとがまりに言う。

「次は散弾。」

「了解。モードエイトポジションセブン。発射！」

まりはすぐ前に現れたスクーパーズに散弾を浴びせた。スクーパーズがどこから攻撃されているか分からないまま、消えて行った。まりは射撃しながらりととのボードに後ろから乗り、左手でりととの脇から前に手を回して、リア銃を自分とりとの肩にも置いて構えた。りとがまりに話しかける。

「じゃあ、行くよ。」

りとがボードを操作して、竹下通りの上に出た。まりが驚いて言う。

「すごい数。」

「ここを助ける邪魔はさせない。全部消す。まりは手筈通り、竹下通りに散弾を撃てるだけ撃つて。スクーパーズが見える範囲、まんべんなく。残ったスクーパーズは私が片づける。」

「うん。わかってる。」

まりがリア銃を次々に竹下通りに向かって発射する。第11連隊と第8連隊の残りの隊員に散弾が上から降り注ぐ。まとまった数のスクーパーズが消えて行くのを見た中隊長、小隊長、分隊

長がそれぞれの隊員に向かって叫ぶ。

「退避だ。身を物陰に隠すんだ！」

スクーパーズは隠れようとしたが、ほとんどはその場に伏せるのが精一杯で、次々にまりの散弾が命中し消えていった。りとは早歩きぐらいの速度でゆっくりと竹下通りの上を進んで行った。りとは、ことこの救出の邪魔にならないように、また、まりがボードに同乗しているため俊敏に動けない状況で、1体でも残して後ろにまわられると、まりが危険になるため、竹下通りのスクーパーズを文字通り全滅させるつもりだった。また、りとは速いスクーパーズたちがいつやってくるかも気になっていた。いろいろな考えが渦巻く中、りとがつぶやく。

「集中しないと。1匹も残しちゃだめ。」

りとは、ルナ充を高速に操作して、左右の店に隠れているスクーパーズを見つけては確実に仕留めて行った。負傷して動けないもの、2体寄り添い隠れるもの、数体のグループが集まって隠れるものに対しても、スクーパーズの急所に対して、1体に1射づつ正確に射撃を行った。第11連隊のモーガン連隊長が、棒人間めがけて飛び出していった。

「くそー、私の大切な部下を皆殺しか。悪魔め。」

モーガンは棒人間めがけて、スクープビームを放ったが。りとは、向かってくるスクーパーズからビームが放たれるのを見て、棒やボードで弾き返し、そのスクーパーズの急所をルナ銃で打ち抜き簡単に仕留めた。

「まりに手は出させない。でも、何？このスクーパーズたち、ゲームより簡単って感じ。」

りとの戦闘能力はこれまでの実戦で飛躍的に向上していた。人間技とは思えないほど高速に処理していった。また、悲鳴のテレパシーを上げながら竹下通りを東に逃げようとするスクーパーズも多数いたが、まりのリア銃の格好の餌食になった。まりは、逃げ惑う多数のスクーパーズが消えて行くので、少し怖くなっていった。それでも、りとを後ろからもう少し強く抱いたら、その不安は減って行った。

「りとの言う通りにすれば大丈夫。」

その悲鳴が重なって聞くのが恐ろしい信号となったテレパシーが竹下通りと明治通りの交差点のそばにいるガーチューンや、ビーム砲を守っている第111分隊に届いた。ガーチューンが状況を把握するために参謀に尋ねた。

「30秒ぐらい前に強烈な風でビーム攪乱幕が吹き飛んでしまったが、何が起きているんだ。ビーム攪乱幕の供給が止まっているぞ。どうした。」

「分かりません。風の直後、伝令を原宿駅側に出しましたが、戻ってきません。」

「やつら、このタイミングでビーム攪乱幕のパイプを切ったのか。」

ガーチューンが、ビーム攪乱幕のタンクを使おうと思ったが、竹下通りにはあまり残っていないかった。

「しまった、ビーム攪乱幕のタンクをラフォーレに運び出し過ぎた。昨夜補充しておくべきだった。」

た。第7連隊の強さを過信していた。」

ガジメの方を向いて言う。

「ガジメ、ビーム砲を死守しろ。これを失ったら我々は攻撃できなくなる。」

ガジメには悲痛な叫び声のテレパシーが重なって聞こえていた。

「みんな消えていく!」「小隊全滅です。救援を!」「ガデ、助けて!」「ビト、今行くぞ。」「くそー、銃がこっちに。」「わわわ。」

「いえ連隊長。この悲鳴は尋常じゃありません。今までに聞いたこともないような。私でも鳥肌が立ちます。」

ゼクールが原宿駅側を見ると、散弾が降り注ぎはじめ隊員がどんどん消えて行った。そして、隠れるスクーパーズを探すように棒人間のタンクが高速に動き回りビームを発射していた。こっちに逃げてくる隊員もいたが、途中で散弾が当たって消えて行った。ゼクールが叫ぶ。

「棒人間と射撃手が来ます。」

建物の影から、竹下通りの上を飛んでいる棒人間と射撃手が見えてきた。りとは一度停止してまりに指示する。

「明治通りの出口の方にも撃って。1体でも逃がすと、ここが心配。」

「了解。」

まりは、ガーチューンや第111分隊がいる竹下通りの明治通りの近くから手前にまんべんなく散弾を撃ち始めた。散弾がガーチューンの隣にいた副官に当たり消えてしまった。ガジメが自分の隊員に叫ぶ。

「私かゼクールの後ろに隠れる。」

ガーチューンも指示する。

「全員、竹下通りから離れる。ここには全滅だ。」

ゼクールが上申する。

「私が、牽制に行つてきます。」

「だめだ。やつらには第7連隊を壊滅させた散弾もある。」

「でもそれでは。隊員たちを見捨てると言うのですが。」

「そうだ。みんな荣誉あるスクーパーズ兵だ。各自で対処してもらうしかない。今お前が消えたら、第8連隊には反撃の手段が完全に無くなる。」

ガジメも言う。

「お前が離れたら。分隊の盾になるやつがいなくなる。後ろのみんなをここから逃がすんだ。」
ゼクールは牽制に行きたかったが、自分の後ろの隊員を見捨てるわけにもいかなかった。

「分かりました。」

再度、ガーチューンが命令した。

「全員、竹下通りを離れる。回避だ。」

竹下通りを離れて良い命令が出たため、隊員は竹下通りから離脱することができるが、もう手遅れだった。すでに、道にいたスクーパーズはほとんど消えていた。店に隠れているスクーパーズは動くことができなかった。第111分隊の隊員はガジメとゼクルが盾になって明治通りに出て、北側に退避した。りとは速いスクーパーズたちを警戒して停止していたが、出てこなかった。なので前進を再開した。

「出てこない？なぜ？でも、好都合。ここを片づけて、ここを助けに行かなくちゃ。」

スクーパーズからの反撃はなかった。それでも気を緩めず、店や物陰に隠れているスクーパーズを1体ずつ仕留めていった。明治通り付近まで達するところで、まりに指示をした。

「まり、あのビーム砲をお願い。」

「了解。」

まりは普通のモードで、ビーム砲を1体破壊した。それを隠れて見ていたガーチューンは、デストロイヤーズの力を取り込む結晶を使うしかなないと覚悟していた。

りとまりは、その後、ラフォーレに向かった。明治通りにはラフォーレに戻ってから竹下通りの方に向かおうとしていた蟹爪ふりやーがいたが、りとたちがラフォーレに向かうのを見て、引き返してラフォーレに向かった。

「くそー。貴様ら絶対に許さん！」

ラフォーレの6階の部屋で、モニタを見ていたアルドアがここに話しかけた。

「棒人間、ごめん。りとさん、散弾で生き残ったスクーパーズを1体に一発で正確にスクーパーズコアを撃ち抜いている。隠れているスクーパーズを探し出すのも速くて1体も見逃さない。攻撃に反応するのも速い。」

「りとちゃん・・・」

「竹下通りにはもう誰も残っていない。第11連隊は1分足らずで本当に連隊長以下1体も残らず殺された。」

「ごめんなさい。」

「ことこさんが謝ることではないけれど。でも、りとさんに殺されたスクーパーズは楽に死ねたと思う。コアに1発だったから。それだけが救いかな。」

「りとちゃんもそう言っていた。スクーパーズが楽に死ねるように急所だけを狙ってみるって。」

「それは・・・」

「りとちゃん、たぶん、ここに来るから、アルちゃんは私の傍にいて。私が絶対に守るから。」

「有難う。情けない話だけど。」

「ううん。そんなことはないよ。アルちゃんは戦う人じゃないから。」

「戦うスクーパーズね。」

「そうね。」

そう言って、二人は少し微笑んでりとを待った。

ラフォーレの6階の壁にはまだ穴が開いていた。

「ここを連れてくる。ここで、蟹爪を防いでくれる。」

「あいつに普通のリア銃は通用しないわよ。」

「でも、後ろに吹き飛ばせるから、近づけないことはできる。」

「わかったわ。頑張る。」

「お願い。すぐに戻る。」

まりは近づこうとする蟹爪ふりやーに、リア銃を打ち込む。ビームは爪の部分で弾き飛ばしたが、その分後ろに飛ばされてしまい、近づくことができなかった。蟹爪ふりやーが射撃主を睨んで叫ぶ。

「おのれー。」

まりはその後もエネルギー充填が終わると、蟹爪ふりやーに向けてビームを発射した。

エビふりやーが、第7連隊が全滅して、それでも必死に戦おうとしている蟹爪ふりやーを見てポツンと言う。

「蟹爪。さすが第7連隊の連隊長だ。」

6階のフロアーにスクーパーズはいなかった。りとが6階の中を走りながら叫ぶ。

「ここここ！ここなの。返事して！」

何回か叫んでいると、返事が聞こえた。

「りとちゃん。ここだよ。」

6階の小部屋から聞こえているようだった。りとは、その小部屋のドアを蹴破る。元気そうなところが見えたので、喜んで思わず叫んだ。

「ここここ！」

同時に、こここの右後ろにスクーパーズが1体見えた。りとに昨日の通信でこここの悲鳴がよみがえった。

「スクーパーズ、よくもここを。覚悟して。」

りとは棒を振りかざして、そのスクーパーズの方に、駆け寄ろうとした。スクーパーズは動けないかのようにじっとりとを見ていた。しかし、りとはとっては意外な行動をここが取った。両手を広げて、りとの前に立ちふさがったのである。それも今まで見たことがないような、強い意志を持った顔で。そして強く叫ぶ。

「やめて、りとちゃん。」

りとが少し驚く。

「ここここ?!」

「やめて、りとちゃん。アルちゃん。アルドアさんはいいスクーパーズだから。」

「いいスクーパーズ!?それより怪我はない?」

「大丈夫だよ。」

「そう。食べ物や飲み物は？」

「アルちゃん、コンビニから持ってきてくれたから。」

「そう。」

りどがアルドアの方を見る。アルドアはビクツとしたようだったが、りどが静かに話しかけた。 「アルドアさんっていうの。何か下心があるのかもしれないけど、ここに優しくしてくれたのね。有難う。わかった、見逃してあげる。早く逃げて。そして、もう二度と私たち目の前に現れないで。今度、私たちの前に現れるときは覚悟して。」

「りとちゃん。アルちゃんは本当にいいスクーパーズなんだよ。」

「そうだね、きつと、そう。じゃあ、行こう。」

「本当だって。」

りとは、ことこのアマツマラを装置から取り出し、ことこの手を引いて、りとはアルドアや周りを警戒しながら部屋から出て行った。ことがアルドアに話しかける。

「アルちゃん、有難う。りとちゃんも、本当は優しい女の子なんだよ。ごめんね。またね。」

アルドアはことこの見つめていたが、何も答えなかった。りとは、ことこの態度が良くわからなかったが、ことが全く無傷だったので、本当にほっとしていた。

まりのところに着いたりどが、外を見ているまりに話しかける。

「まり、どう。」

「うん、何とか蟹爪を追い払らっている。」

そして、振り返って元気そうなことこの見て、うれしそうに言う。

「ことこ、元気そうだけど、大丈夫？」

「大丈夫だよ。それより、りとちゃん、まりちゃん聞いて。」

りどが尋ねる。

「何？」

「なんか誤解があるみたいなの。」

「そうなんだ。わかった。PARKで聞くよ。でも今はここを離れよう。」

「わかった。じゃあPARKで話を聞いて。」

「わかった。」

まりが飛ぶ準備をしながら、ことこの載せて飛ぶ準備をしていたりとに話しかける。

「でも、良かった。ことが無事で。」

「うん。でも、ことこ、いっしょにいたスクーパーズのことを、アルちゃんって呼んでいた。」

「アルちゃん？」

「そう。食べ物とか飲み物とか全部持ってきてくれたみたい。」

「ことこが強く言う。」

「ほんとだよ。アルちゃん。アルドアさんは、本当にいいスクーパーズなんだよ。」
りとが答える。

「わかった。ことがそこまで言うなら、そうだと思う。本当にいいスクーパーズもいるってこと。」

まりがりとことに答える。

「さすが、ことこ、宇宙人にもてるのね。私たちだったら死刑か、運が良くてもくさい飯だよ。」

りとは少し笑いながら。

「そうね。でも本当に無事で良かった。じゃあ行こう。」

「了解。」

まりを先頭に、りととのボードの前を乗せて3人はPARKに向かった。まりとりとは、ビーム攪乱幕の準備をしたが、攻撃してくるものはいなかった。

ガーチューンがアルドアに連絡する。

「そっちに棒人間が行ったが、大丈夫か。」

「私は大丈夫です。棒人間が目の前に現れたときは、血の気が引いて動けなくなってしまいました。ことこさんが、棒人間に取りなしてくれました。」

「それは災難だな。私でも同じ部屋で棒人間といっしょなんてぞっとする。やつはスクーパーズを殺すのが楽しいのかもしれない。竹下通りは全滅だった。第111分隊に生存者を探しに行かせたが、負傷兵さえ一体もいなかった。棒人間が残らず殺したようだ。これまでパイプラインを攻撃しなかったのも、皆殺しをするための作戦だったのかもしれない。こちらとしては、もうあれを使うしかない。」

「デストロイヤーズの力を取り込む結晶ですか。」

「そうだ。やつらは第7連隊を壊滅させるほどの力を持っている。その結晶を使う以外に勝つ方法はない。」

「わかりました。地球での使用は厳禁でしたが、この状況では連隊長のおっしゃる通り仕方ありません。4体分しかありませんが、至急準備します。」

「頼む。あと、戦艦のビーム砲が1台無事だ。その整備もお願いする。」

「わかりました。」

「あと、お願いばかりで悪いが、こういうものを作っておいてくれ。」

ガーチューンはそう言って、製作を依頼するもののデータを送った。アルドアは驚いた。

「これは。」

「生体センサーを組み合わせるだけだ。お前ならば3分できるだろう。」

「そうですか。」

「頼む。」

「わかりました。」

アルドアは、ラフォーレに置いてあるその結晶と連隊長に頼まれたものを作るための部材を取りに向かった。

PARKに着いた3人は、モニターで原宿で活動しているスクーパーズがほとんどいないのを確認して少し安心した。まりが2人に話しかける。

「少し休もう。紅茶を入れてくるわ。」

りしが答える。

「まり、有難う。」

ことが二人に話しかける。

「りとちゃん、まりちゃん、お願い聞いて。」

まりは台所でお湯を沸かして聞いて聞こえていないようだった。りとはスクーパーズがここに優しかったのは何かの作戦としか考えていなかったが、約束だったので、ことこの話を聞こうとする。

「うん、スクーパーズの話しね。もちろん聞くよ。アルドアというスクーパーズが優しかったの?」

「それはそうなんだけど、その話じゃなくて、スクーパーズが私たちを攻撃してくる理由。」

「何て言ってた。私たちがスクーパーズの王女様のみさちゃんを誘拐したって?」

「そう、その通り。りとちゃん、何でわかるの?」

「みさちゃんがスクーパーズというのは本当だと思う。王女様というのも本当かもしれない。エビふりヤーが侍従かな。でも、あのスクーパーズたちの本当の狙いはみさちゃんなんだと思う。」

「何でそう思うの。」

「何でかな。良くわからないけど、みさちゃんは地球に逃げてきたという感じ。あのスクーパーズはそれを追ってきた。だいたい私たちはみさちゃんを誘拐なんてしていないじゃない。」

「それはそうだけど。」

「アルドアは、ことを騙して、みさちゃんを連れ出そうとしていたんだよ。」

「アルちゃんは、そんなスクーパーズじゃない。絶対にそんなことはないよ。」

「うーん、ことがそこまで言うならば、そうなのかもしれない。アルドアはいいスクーパーズで、偉いスクーパーズが悪いやつで、アルドアもそいつに騙されているのかも。」

「そうなのかなー。」

「もう少しだから。スクーパーズを地球から追い出して。アマツマラを壊して、全てが元通り。ことが暗い顔をしたので、りしが続けた。

「わかった、方がアルドアがまだ原宿に残っていたら、攻撃しないで警告するから。約束する。」

「うん、有難う。」

まりが戻って来て、紅茶をいれながらここに話しかける。

「何？アルドアさんはイケメンだったの？」

「そういうんじゃない。でも、技術担当みたいで、二人でアマツマラを解析していたの。」

「そうか。何だ、オタクどうし気が合ったのかな。」

「うん、そうかも。でも真面目で悪いスクーパーズじゃなかったよ。」

3人が紅茶を飲み始める。りとがまりに話しかける。

「サンキューまり。美味しい。」

「そう、有難う。」

「少し、落ち着ついた。」

ことこもまりにお礼を言う。

「まりちゃん、有難う。美味しいよ。」

「ことこも有難う。」

3人が少しゆっくりしていると、センサーからの警報があった。モニターを見ると、キャットストリートの防衛線を突破して、蟹爪ふりヤーがPARKに向かって来ていた。りとが、まりとここに話しかける。

「行かなくちゃ。二人は地下室で待ってて。」

まりが言う。

「私も行く。ボードにはだいたい慣れてきたし、バリヤーも強力になってきているわ。あまり嬉しくないけど。蟹爪の周りにスクーパーズがいたら私が何とかする。りとは蟹爪に集中して。」

「有難う、まり。じゃあ、ことこ、悪いけど地下室にみさちゃんと一緒にいてくれる。」

「うん、わかった。」

「じゃあ、まり、行こう。」

「了解。」

ことこが地下室に降りていき、りととまりはキャットストリートに向けて飛び出した。りとがまりに話しかける。

「蟹爪の他に、残っていきそうなのは、速いやつとそのグループの計3体。それと、ビームが強いやつが1体というところ。アルドアも残っているかもしれない。」

「とりあえずは、蟹爪ね。」

「うん。でも、速いやつが来たら、まりはPARKまで逃げた方がいいと思う。その4体はPARKの防衛力でなんとかなりそう。蟹爪だけはそれを突破するかもしれない。」

「大丈夫、心配しないで。自分で何とかするから。」

「わかったけど、無理はしないで。」

「それはこっちのセリフ。」

「蟹爪が見えてきた。まり、周りを見ててくれる。」

「わかった。その前に、ここが戦艦用に用意した、モードイレブン・ポジションワンを使ってみる。」

「うん、賛成。ここが強力と言っているんだからすごいと思う。私はまりの周りを見張っている。」

「りとが見てくれていれば安心。」

「蟹爪がこっちに向かってきた。じゃあ、行くよ。」

「OK。エネルギーはさっきから充填しているから、すぐに撃てるわ。」

「じゃあ、まずはここからお願い。」

距離百メートルぐらいで、まりがリア銃を撃つ。

「モードイレブン・ポジションワン、発射。」

強力なビームが蟹爪ふりやーを襲う。蟹爪ふりやーは、その銃でビームを払おうとするが、大きく弾き飛ばされ、装甲であるころもボロボロになって、一度普通のスクーパーズの姿に戻っていた。それを見たまりが喜んで叫ぶ。

「やったー。」

りとが蟹爪ふりやー目掛けて突進する。

「あともう少し。まり、時間を稼ぐから再チャージ！」

「わかったわ。」

吹き飛ばされた蟹爪ふりやーは、ボロボロになりながらも、気持ちを集中していた。

「エビふりやー閣下から教わった教えだ。諦めるな。諦めるな。絶対に諦めるな。あいつらを何としても倒すんだ。あいつらを倒せるスクーパーズはこの銀河に私以外いないんだ。諦めるな。絶対に諦めるな。」

接近しているりとが蟹爪ふりやーの異変に気付いた。

「何だろう、あいつ光ってる。また蟹爪フライになるみたいだけど、今度はずっと大きくなっている気がする。」

それでも突進して切りかかると、りとは今までよりずっと大きな力で弾き飛ばされた。

「何？」

りとは、不思議に思って蟹爪ふりやーを見つめる。蟹爪ふりやーが喜びながら叫ぶ。

「私も第二形態に進化した。エビふりやー閣下しかできなかった形態が私にも。これで、やつらを倒せる。」

蟹爪ふりやーは十メートルぐらいの大きさになっていた。りとは大きくなった分、動きは遅くなったんじゃないかなと考え、銃と反対側に回り込み切りかかろうとする。しかし、第二形態の蟹爪ふりやーは逆に俊敏になったと思えるぐらい、瞬間に向きを変え、りとの棒を銃ではじき返す。りとは大きく跳ね飛ばされたが、今度はスラロームのように進みながら、蟹爪ふりやーの横から攻撃しようとする。しかし、蟹爪ふりやーは接近する最後の瞬間に向きを変え、りとの棒を銃で

挟んだ。蟹爪ふりやーが叫ぶ。

「よし。」

りとも言葉がもれた。

「くっ、棒が挟まれた。」

蟹爪ふりやーは棒を離さないりとを棒ごと道に叩きつけた。

— PARKに残ったことは、確かめたこともあって、地下室に向けて降りて行った。そして、地下室の扉の前でみさに話しかける。

「みさちゃん、扉を開けて。りとちゃんが地下室で待っててだって。」

「わかったですな。ちょっと待ってるですな。」

扉が開くと、真剣な顔をしていることに、みさが嬉しそうに話しかける。

「ここちちゃん、無事ですな。よかったですな。怖い顔をしているけれど、怖かったですな？」
エビふりやーも嬉しそうだった。

「私は無事と確信していたでございます。」

しかし、ここは違う話をする。

「やっぱり、みさちゃんとエビふりやーさんは、スクーパーズのなんだ。」

「何を言っているですな。私はアメリカ人ですな。」

「私はエビフライ星人でございます。」

ことが答える。

「いま、地球の言葉を使っていないの。スクーパーズのテレパシーで話しかけて、みさちゃんたちもテレパシーで答えているの。」

みさはハッとして黙ってしまった。エビふりやーもかなり驚いたが、すかさずみさとことこの間の、みさのすぐ前に移動した。ことが続ける。

「みさちゃん、スクーパーズの王女様なんでしょう。スクーパーズのみんな、すぐくちゃんとして、勇敢で正義感も強いのに、何で私たちに殺させるの。みんな、みさちゃんを助けようと必死に戦っているんだよ。」

「それはですな。」

エビふりやーが口を挟もうとする。

「それはでございますな。」

しかし、ことが静止する。

「エビふりやーは黙ってて。みさちゃんから聞きたいの。」

しかし、エビふりやーは止めない。

「わたくしは、みさ王女様をお守りする立場でございます。こと様がスクーパーズの兵をおほめ下さるのは大変嬉しいでございますが、みさ王女様に乱暴するならば、こと様と言えども容

赦はできないでございます。」

「少し、黙ってて。」

そう言う光の盾が6枚現れて、エビふりヤーを包んで部屋の隅に追いやった。エビふりヤーはもがくが、動くことができなかつた。エビふりヤーが叫ぶ。

「こうなつたら仕方がないでございます。第二形態へトランスフォーム。」

しかし、何も起きなかつた。

「第二形態になれないでございます。この光の盾から精神を攪乱するものが放出されているでございます。」

「エビふりヤーさん、心配はいらないよ。みさちゃんを傷つけたりするつもりは全然ないから。」

エビふりヤーはことこの顔を見てから少し安心した表情をした。

「アマツマラを、スクーパーズのアルドアさんと解析したの。その結果から考えると、スクーパーズさんが死ぬときに情報を取り出して、その情報を処理したものを私たちに投射して、私たちがスクーパーズにしようとしているんだよね。」

「それはですな。それはですな。」

「私はいいの。例えスクーパーズになつても。でも、そのためにたくさんスクーパーズを殺すというのが許せないの。みさちゃん、みんなはみさちゃんの国民なんだよ。」

「父上の命令なんですな。」

「お父さん？スクーパーズの王様？」

「そうですな。」

「王様は何でそんな命令を出すの。」

「それはですな。この数百年、スクーパーズの王室は国民に秘密で代々このようなことを繰り返してきたんですな。新しいものを生み出せなくなつたスクーパーズは、天の川の銀河から創造性のある生物をスクーパーズにして、スクーパーズ本星で暮らしてもらい、その才能を発揮してもらっているですな。そのためのサポートは何でもするですな。それが新しいものを生み出せなくなつたスクーパーズの宿命ということなんですな。」

「ひどい。みんな命があるのに。それに私たちだったら、そう言ってくれば、スクーパーズ本星に行つたよ。」

「ことこちやんの言うこともわかるですな。でも、スクーパーズ星に他の星の人が住むというのは、なかなか上手く行かなかつたらしいんですな。それに、往復の宇宙船の中は放射線などとても過酷な環境になるですな。スクーパーズならば大丈夫でも、宇宙にあまり出ていない生物だと死んじゃうんですな。」

「みさちゃんの立場が難しいことはわかつた。けど、もうその話しいいから、戦いを止めて、お願い。このままだと、アルドアさんが死んじゃうかもしれない。」

「みさも止めたいんですな。捕虜になつたパドが目の前に死ぬのを見て怖かつたですな。でも、

このことを普通の兵に話すことは厳禁なんですな。知っているのは、王族の近衛兵の一部だけなんですな。」

「そんなの無視して、スクーパーズのみんなに正直に話しちゃえばいいんだよ。」

「でもですな、そんなことをしてスクーパーズ王室が倒れたら、この天の川銀河が大混乱になってしまふんですな。みさにも、どうしていいかわからないんですな。」

「わかったよ。私が止めてくる。アルドアさんたちを助けなくちゃ。」

そう言うてことは地下室を出て行った。光の盾は消えて、自由になったエビふりやーが言う。

「この光の盾はなんだったんでございましょう。全く動けなくなってしまったでございませう。」
みさはことこの言ったことを思い返していたので、短く答えた。

「うんですな。」

「アマツマラからあんなエネルギーの盾が出せるのでございませうか。あれも、ことこさま独創性の高さかも知れないでございませう。」

「うんですな。」

「ことこ様が、スクーパーズ兵を、勇気と正義感があると言つて下さったのは本当に嬉しかったですでございませう。」

「うんですな。」

「スクーパーズ兵や人間の善意を利用して、命まで奪つて、本当に悪いのは私たちなのでございませう。」

「うんですな。」

「蟹爪ふりやーに地面に背中から叩きつけられそうになったりとは、地面につく直前、地面に足から着地し衝撃を和らげた。そして、その反動で十メートルもあろうかという蟹爪ふりやーを、
「重い。けど。」

という声と共に、頭の方に投げ飛ばす。蟹爪ふりやーは投げ飛ばされても棒を離さずに、すぐに体勢を立て直す。りとはルナ銃で攻撃するが、フライの衣の装甲が厚くあまり有効ではなかった。蟹爪ふりやーもりとを叩きつけようとするが、逆に投げ返されるので、決定打に欠けていた。そのとき、まりから連絡がはいる。

「チャージ終了。りと離れて、蟹爪を撃つから。」

「棒を鉄に挟まれて離れられない。そのまま撃つて、こいつを押さえておくから。」

「でも。」

「大丈夫。」

「わかった。」

まりはボードでりとの方向に向かい、りとの隣に並んで、盾としてボードを前に立てた。

「りと。」

「まり。」

りとも足を使って自分のボードを盾にすると、ふたりはうなずいた。

「モードイレブン、ポジションワン。発射。」

明るい光あたりを満たした。リア銃のビームが至近距離で蟹爪ふりやーに当たった。蟹爪ふりやーは、その衝撃でりとと棒を離して、30メートルほど吹っ飛び建物に衝突した。しかし、すぐに蟹爪の鋏の部分で建物を蹴って跳ねて飛んできた。りとは避けたが、まりがボードごと鋏に挟まれた。

「よくも私の部下たちを皆殺しに。お前から真つ二つにしてやる。」

ボードがつかえて、まりがなんとか切られずにすんでいたが、ボードからミシミシ音がして、もうそんなにはもたなそうだった。まりが叫ぶ。

「りとー！」

「待ってて、まりー！」

りとは鋏に棒と足をかけて必死に棒でこじ開けようとしたが、開くことはできなかった。蟹爪ふりやーも渾身の力を込めていた。鋏がだんだんと閉じようとしていた。

「痛い。りとー！」

まりの目から涙がこぼれていた。りとも必死だった。りとは時間稼ぎのために自分のボードを鋏の間に差し込んだ。そして、蟹爪ふりやーの方を見ると、さっきのリア銃の攻撃で、衣の装甲の一部分がぼろぼろになっていた。

「狙うならあそこ。」

それも気が付かれないように最速で、かつ最強の力で攻撃する必要があった。りとはその場から、少し下がった。まりがりの方を祈るような目で見ていた。りとは、ルナ銃のタンクの部分を棒の後ろに取り付けた。そして、前に2歩ダッシュしてから前方少し上にジャンプして、エビぞりになった。蟹爪ふりやーもそれに気が付いたようので、りとの方を見ていた。

「ルナボルグ！」

ルナ銃が後方に強力なエネルギーを発すると共に、りとは持っていた棒を蟹爪ふりやーにめがけて投げた。蟹爪ふりやーは避けようとしたが、動く間もなく棒は蟹爪ふりやーを貫通した。そのショックで、蟹爪の鋏が開いた。着地したりとは急いでまりを抱きかかえて後ろに下がった。棒が戻ってきたので、それを片手で受け止めた。蟹爪ふりやーは、道でうずくまって、テレパシィで叫ぶ。

「エビふりやー様、エビふりやー様、私はあいつらにどうすれば勝てるのでしょうか。教えてください。さい。エビふりやー様。お願いします。」

そして、蟹爪ふりやーは、りとを見つけると大げがにもかかわらず向かって行った。

「お前だけは。お前だけは。」

それを見たりともまりを左手で抱えながら、右手で棒を持って構える。

「よくも、まりを。次はお前の急所を貫く！」

蟹爪ふりやーは鉄で攻撃しようとする棒人間に突撃していった。りとは、まりを抱えたまま最小の動きでそれを避け、少し前に進みながらすれ違いざま、傷口から急所の方向へ棒を差し込んだ。蟹爪ふりやーの姿が、普通のスクーパーズに戻った。そして最期に、

「エビふりやー様。」

とだけテレバシーを放って動かなくなった。そして消滅してしまった。

蟹爪ふりやーの消滅を確認したりとはまりの方をみた。まりの体から血が流れていた。りとの顔が青くなった。

「まり、血が。」

「大丈夫、蟹の鉄のとがったところが刺さっただけ、怪我はそんなに深くないの。」

「でも。」

「大丈夫。それに私よりりの方が顔が青いわよ。」

「私は全然平気。私より、まり。」

「大きな傷跡ができるとお嫁に行けなくなっちゃうかな。まあ、元から行けそうもないけど。」

「そんな冗談を言っている場合じゃない。PARKに戻るわよ。」

「そうだ。りが責任を取って、りにもらってもらおうかな。」

「分かった。もらう、もらうから、今はPARKに急ごう。」

「へへへへ。」

りとはまりをボードに乗せ、まりのリア銃を持ってPARKに急いだ。

PARKからそう離れていなかったため、蟹爪ふりやーの最期のテレバシーはエビふりやーまで届いていた。

「なんていうことでございましょう。蟹爪ふりやーまでも。」

みさが覚悟を決めたように言う。

「とりあえず、まりちゃんの手当をすすな。」

「私はあまり気が乗りませんでございませぬ。第7連隊の隊員や蟹爪ふりやーを殺した人間でございませぬ。」

「りとちゃんやまりちゃんは何も悪くないですな。悪いのはスクーパーズの王室ですな。まりちゃんの手当が終わったら、戦いを止めるですな。たとえ秘密がばれても、私がどうなっても仕方がないことですな。それがみんなのためと気づいたですな。エビふりやーは隠れていれば良いですな。」

「みさ様！みさ様、まだお若いのに立派なお覚悟でございませぬ。エビふりやー、感服したでございませぬ。みさ様にお仕えして幸せでございませぬ。それに比べ、エビふりやーの心の小ささ、恥ずかしい限りでございませぬ。この命、みさ様に捧げるでございませぬ。ですが、うかつに秘密を公開

して王室が倒れると、この銀河の柱がなくなってしまおうでございます。そうすると、デストロイヤーズの思うがままにされてしまいます。それはもっとひどい悲劇を生むでございます。それだけは何としても避けなくてはなりませんでございます。それを避けるために、どうぞ全てこのエビふりヤー一人が悪いことにして頂きたく思うでございます。」

「その話は後でいいですな。とりあえず、まりちゃんの手当が先ですな。PARKに上がるですな。」

「はいでございます。」

りどがまりかかえながらPARKに向かう下の道を、ことがラフォーレに向かって走っていた。ことが変身をしなかった理由は、スクーパーズに敵意がないことを示すためである。

「りどちゃんとまりちゃんがPARKに戻っていく。まりちゃん怪我をしているのかな。どうしよう。」

こともPARKに戻るべきか考えた。しかし、今はそのまま行くべきと決心した。

「まりちゃん、痛そうだけれどりとちゃんと話しているようだし、今は戦いを止めるのを先にしなくちゃ。」

ことがラフォーレ前の明治通りに着いたが、スクーパーズの姿は見えなかった。

「どうしたんだろう。みんなどこにいるのかな。逃げちゃったんならいいんだけど。」

ただ、アルドアは逃げていないような気がした。それで、ラフォーレの中をテレパシーで呼びかけながら、上の階に上がっていった。

「アルちゃん！アルドアさん。どこ。ここだよ。一人で来たよ。お願い返事をして。」

しかし、返事はなかった。6階のことが連れていかれた部屋に到達した。ドアは壊れて開いていた。中には分析装置が稼働した状態で放置されていた。アマツマラと別のものを分析したようだった。

「アルちゃん・・・上から探してみよう。」

そうつぶやいて、ことはラフォーレの屋上に上がっていった。

第9章 黒いスクーパーズ

りとたちがスクーパーズと戦っているところ、局所銀河群のある銀河に属する惑星の地下収容施設の中で、デストロイヤーズの捕虜ガリラドと一般市民ジャルベルトの二人が自分たちのことに関して雑談をしていた。その施設には、デストロイヤーズの捕虜や一般市民が収容されていた。収容者たちはデストロイビームが発せられないように特別な手枷が付けられていた。さらに、それは勝手な行動をすると爆発すると脅されていた。二人は男性ばかりが100名ほどいる牢の中にいた。

「もう、ここに連れてこられて2年にもなるが、捕虜交換の交渉は進んでいるだろうか。」

「私なんかは一般市民なのに、急にスクーパーズがやってきて、前線基地を建設することですくープビームで捕らわれ、ここに連れてこられた。家族とは離ればなれだし、条約違反も甚だしい。」

「そうか、ジャルベルトは軍人ではなかったな。それにしても、外の様子が全くわからない。この収容施設には他にも牢があったけれど、仲間がだいぶ減ってきているようだ。」

「時々、新しい同胞も入ってきているようだ。」

「人数は少ないし、どこかの収容所からまわされてきているようだ。」

「しかし、ここからいなくなってしまった同胞はどうなったんだろう。」

「やつらが、局所銀河団条約を守るか心配だ。やはり、前皇帝が甘すぎたのだ。スクーパーズなんて、とつと叩き潰すべきだったんだ。我々はアンドロメダ星雲に帰れないかもしれない。」

「それにしても、看守の中にスクーパーズ兵以外のいろんな外見の兵がいる。中には外見が我々に近いものもあるけれど、言葉は違うし、なんかいろいろと違う。」

「あー、形は近いけれど、色とりどりだ。赤いもの、緑のもの、青いもの。それに、スクーパーズとも我々とも全く形の違うものもある。ここはどこなんだろう。中には、昔図鑑で見た、大マゼラン星雲を支配している知的生命体の形に近いものもあるけれど、そればかりじゃないし。いろんな、生命体が集まっている感じだ。」

「そうだな。それにしても腹が減ったな。」

「なんだ、急に、話しの腰を折るなよ。」

「ごめんごめん。」

「まあ、もうそろそろ飯の時間だな。」

「あー、あんまり美味くはないがな。だが、飯だけが楽しみだ。」

「そうだな。軍の野戦食よりはまともかな。」

「そうなのか。この飯よりひどいって。」

そのとき、看守がやってきた。

「おっ、飯の時間かな。」

しかし、看守は別のことを言う。

「風呂の時間だ。ドアの前に2列縦隊で集合。」

デストロイヤーたちは少し不審に思っ話し出す。

「何だ、シャワーはこれまでもあったが風呂は初めてだな。」

「何かあるのか。」

看守はそれを無視して強い調子で言う。

「つべこべ言うな。さっさと来い。」

デストロイヤーたちは、2列縦隊になって指示された道を進んでいった。看守はいつもより多く、全員武器を携帯していた。

「なんだ。やたら警備が嚴重だな。」

「ああ、なんかいやな予感がする。」

全員脱衣所で服を脱ぐと風呂場の方に誘導された。風呂場は単なる広い部屋で下側は防水処理になっていた。入って来た扉が閉められた。

「ここにお湯が入るのか。」

「大丈夫か。ここで俺たちを溺れさせるつもりか。」

「俺たちを殺すためだけに、こんな設備まで作って、そんな面倒なことをするか。」

不安な気持ちで辺りを見回すと、側面のうち3面が壁で上の方に窓があり看守が見張っていた。右側の側面はカーテンで仕切られていた。すると、カーテンの向こう側でデストロイヤーの女性たちの話し声が聞こえた。

「カーテンの向こうは、女だ。」

「そうだな。カーテンの下は動きそうか。」

「おいおい、覗く気か。」

「こんな時だからいいじゃないか。」

「それもそうだな。」

風呂場の上の操作室でオペレーターたちが、データを見ながら話していた。

「今回のブレンドはこんなものか。」

「パワータにもスピード的にも、少し面白くないブレンドだな。」

「仕方がない、所詮一般人と一般兵だ、本当はアムロディー並みのデストロイヤーが欲しいところだ。」

「何を言っている。そんなのが来たら逆にこっちが危ないだろう。」

「それもそうだな。」

「よし、作業開始だ。調合した情報抽出液を注入するぞ。」

「了解。」

オペレーターがスイッチを操作すると温かい液体が部屋に入り始めた。部屋では、デストロイヤー

―ズたちが次第に高くなるお湯に関して話していた。

「お湯が入ってきた。なんか少し匂うな。」

「伝染病予防の薬品みたいな匂いだけれど。」

「消毒剤か？」

お湯は高くなり腰の高さになって止まった。看守から指示があったため、デストロイヤーズは座って、そのお湯につかっていた。

「温かくて気持ちがいいが。」

しかし、お湯の水位が高くなってきた気がしたため、全員立ち上がった。

「やつら、やつぱり、我々を溺れさすつもりだ。」

誰かが看守に向かって叫ぶ。

「お湯を止める！」

しかし、お湯は出ていないようだった。そのとき、ジャルベルトが部屋にいるデストロイヤーズの間隔が広がっていることに気付いた。

「違う！水位は変わっていない。俺たちが小さくなっているんだ。くそー、何をするつもりだ。」

看守を睨みつけたが、看守は平然として見ていた。そのとき、カーテンの奥から声がした。

「ジャルベルト！あなたなの！カデリナよ！」

「カデリナ！」

そう言っ、ジャルベルトはお湯の中を潜り、カーテンの下をくぐって反対側に出た。目の前には、娘のユリアナを抱きかかえていた妻のカデリナがいた。

「カデリナ！、ユリアナ！」

「パパ！」

3人は顔を寄せ合って強く抱きしめあった。まわりの女性のスクーパーズは、嬉しそうに見ていた。しかし、そんな幸せも長くは続かなかった。体が小さくなって、カデリナも足がつかなくなっていた。ジャベルトとカデリナはユリアナだけでも助ける方法がないか必死に考えたが見つかるはずもなかった。溺れて3人がバラバラになるのは、3人ともいやだった。ジャベルトは部屋の隅に急ぎ、周りのデストロイヤーズに言った。

「我々から、離れてくれ！」

そして、カデリナとユリアナに言った。

「これで、3人はずうっと一緒だよ。」

ジャベルトとカデリナはそれぞれの少し大きくなった手枷を思いっきり壁に打ちつけた。すると、手枷が爆発して、ジャベルト、カデリナ、ユリアナは離ればなれになることなく命を断った。

操作室では、オペレーターたちが対応に追われていた。

「手枷が爆発しました。2個です。」

「3人のデストロイヤーズが死亡したようです。情報不純物が抽出液に混入します。」

「どうだ。これくらいならばいけるか。」

「はい、なんとかあります。」

「よし、操作を続けてくれ。」

捕まっていたデストロイヤーズたちは抽出液の中に消え、床に手枷だけが残された。

「抽出液は濃縮行程に回せ。その後に結晶化だ。」

2週間後、この抽出液は黒い小さな結晶に変わっていた。この施設では、このような作業を毎日続けており、1日に1個の結晶を生産している。ただ、このときの結晶は普通の結晶と異なり、中にだれも気づかないほどの小さなシミが結晶構造の中に入っていた。

スクーパーズの戦艦は、明治神宮上空で待機すると共に、艦首主砲の跳ね返った弾による損傷箇所の修復を急いでいた。艦長のダウザは艦橋で艦全体の指揮を取っていた。すると、パイプラインが切断されたとの報告が入った。

「どうしたんだ。」

「わかりません。囲いの内部で何かあったようですが、現在連絡がつきません。囲いの穴のすぐそばにも誰もいないようです。」

「情報収集を急げ。修理を中止して第2級戦闘態勢を取れ。」

「わかりました。」

しばらくして、情報将校が艦橋に上がって来て、ダウザに報告した。

「ガーチューン連隊長からの報告です。第7連隊は敵の攻撃で壊滅、第11連隊も連隊長以下、指揮官兵員とも全滅したとのことです。第11連隊は文字通り1体残らず消滅し、第8連隊も事実上壊滅したとのことです。現在、中に残っているのは、第7連隊の唯一の生き残りの蟹爪ふりゃー連隊長と、第8連隊のガーチューン連隊長と数体のみとのことです。」

「第7連隊が壊滅だと。そんなに酷い状況なのか。」

「一般隊員では、全く相手にならないとのことです。第7連隊が攻撃から1分経たずに、蟹爪ふりゃー連隊長以外の全ての隊員が戦死したとのことです。現在、ガーチューン連隊長が決死隊を指揮して、最後の救出作戦を立案中とのことです。」

「そうか。こちらで対応できる状況を越えているな。本星の大本営に指示を上げ。」

「はい、わかりました。」

艦橋に蟹爪ふりゃー戦死の報が入った。

「蟹爪ふりゃー様もか。第7連隊が全滅したとなると、デストロイヤーズとの戦いの戦法を考え直さなくてはならないな。」

そして、本星から返答があった。

「大本営は何と言ってきた。」

「現在、増援の手配をしているから待機しているとのこと。」

「今ごろ増援の手配か。とても間に合わんな。」

「ただ、大本営でも第7連隊の壊滅は予想外だったようです。小型の装甲戦闘機フライングアーマーが原宿駅側の穴から入りそうということで準備中です。」

「そうか。ただ、戦艦の装甲に穴を開けるぐらいだ。フライングアーマーの装甲では持たんだろう。」

「はい。最新鋭のビーム攪乱幕も大量に持って来るようですが。」

「ビームは攪乱するが、視界はそれほど妨げないやつか。」

「はい、そうです。」

「わかった。それで、丸野王は何とおっしゃられているか情報はあるか。」

「大本営でもスクーパーズ王の意向を伺ったところ、慌てず対応しろとの指示だったことです。」

「王女様が人質に取られているのに、さすがは、丸野王でいらっしゃる。わかった、我々は原宿から出てきた兵の救護と艦隊の修復に専念する。原宿には入るな。我々では相手にならない。昨日も旋回主砲の砲手を失ったばかりだ。ただ、囲いの穴の警戒は怠るな。いつ棒人間たちが出て来るかわからん。」

「わかりました。」

りととまりがPARKに到着した。そこには、みさが待っていた。りとはみさに注意した。

「みさちゃん、地下室で待ってなきゃだめだよ。」

「急いで、まりちゃんの手当をしますな。」

怪我のための消毒薬や包帯が準備してあったのを見たりとがみさに謝る。

「まりが怪我をしたのを見たから、上がって来たのね。大きな声を出してごめん。」

「それはいいですな。それより手当が終わったら、話しがあるですな。」

「重要そうなことね。いいよ、なんでも聞くとよ。」

「ありがとうございますな。圧迫止血をしますな。みさじゃ力が足りないので手伝って欲しいですな。」

「もちろん。」

「一緒に、引っ張って欲しいですな。力を入れすぎてもだめですな。」

「わかった。ゆっくり引っ張るから止めて。」

「少しづつ引っ張ってですな。」

「ゆっくりと。」

そう言いながら、りとは少し引っ張ったが、みさはすぐに止めた。

「ストップですな。」

まりの出血は止まったようだった。

「こんなんでいいの。」

「大丈夫ですな。今のりとちゃんが思いっきり引っ張たら、まりちゃんが切れちゃうですな。」
「えっ。」

「本当ですな。それより、念のためまりちゃんを地下室に運ぶですな。」

「わかった。よしよっと。それにしても、まりは軽い。」

「今のりとちゃんに力があるだけですな。」

「そうなんだ。みさちゃんの言う通りかもしれない。」

そう言いながら、2人と1尾は地下室に向かった。地下室に到着すると、まりをソファアの上に寝かせた。ここで、りとが重要なことに気付いた。

「ここがいない。上にも下にも。みさちゃん、どこに行ったか知ってる？」

「戦いを止めると言って出て行ったですな。」

「何でここを止めて・・・止めても止まらないか。ごめん、ここを探してくる。扉を閉めて待って。」

「その前に、話を聞いてほしいですな。」

「ごめん、ここを連れ戻したら、絶対に聞くから。」

「りとちゃん。」

りとはみさが止めるのを振り切って、外へ飛び出した。りとは、ここが一番行きそうなラフォーレに向かうことにした。周りの様子を見るために、上昇するとラフォーレの屋上にここが普通の姿で周りを見ているのが見えた。

「ここ、良かった無事で。」

りとは、ラフォーレ屋上に急行した。

生き残った第111分隊を中心とする決死隊のスクーパーズ兵が、竹下通りの明治側に集まっていた。しかし、原宿で生き残ったスクーパーズ兵は、ガーチューン連隊長、アルドア技術参謀と第111分隊のガジメ分隊長、ゼクル（軍曹）、ゴモ（上等兵）、ザトム（二等兵）、バンクス（1等兵）ワクチュン（1等兵）の8体だけだった。ガーチューンが皆に話す。

「残っているものは、私を含め8体だけになった。王女様を救出するため、みんな私についてきてくれるか。」

ガジメが答える。

「もちろんです。連隊長にお供します。この命、ご自由にお使ください。」

ゼクル、ゴモ、ザトム、バンクスも同意する。

「はい、絶対に棒人間を倒して、王女様を救出して見せます。」

「頑張ります。」

「私は前にもこのような目にあっています。絶対に王女様を助けて生き延びます。」

「最初に、棒人間に蹴られて、デツホを失う結果になった汚名を晴らして見せませうとも。」
ガーチューンがガジメに話しかける。

「それにしても、健在なのはラフォーレにいたアルドア以外は第111分隊だけになったな。さすが、ガジメの分隊だ。」

「連隊長の教育のたまものです。」

「いや、ガジメのすぐれたスクーパーズ性がなしたことだ。誇りに思っていないぞ。自分と自分の隊員を。」

ガジメと第111分隊の全員が答える。

「有難うございます。」

ガーチューンがアルドアに話しかける。

「それで、あの結晶は使えるようになったか。」

「はい、大丈夫です。地球では開かないような特殊なロックが施されていました。初めはこちらの分析装置で調べたのですが、解析ができないため仕組みが良くわからず、ロックを解除することができませんでした。」

「そうか、それでどうしたんだ。」

「はい、昨晚ことこさんがアマツマラを分析するために制作した分析装置にかけて調べましたら、構造と内部プログラムを解析することができ、比較的簡単に鍵を開けることができました。」

「そうか、それは良かった。見たところ、ことこさんは民間人と言うわけではないが、本当の戦闘員というわけではなさそうだった。」

「その通りです。自衛以外でこちらを攻撃してくることはないと思います。」

「わかった。今回、棒人間と射撃手は降伏の意を示すまで攻撃するが、ことこさんは相手が攻撃してこない限り、こちらから攻撃はしないことにする。全員いいな。」

「連隊長、有難うございます。それでロックを解除して開けた中身がこれです。」

アルドアはロックを解除した蓋を開いた。そして、箱の中をみんなに見せた。全員が、息を飲んだ。そこには黒い結晶が4つ入っていた。ガーチューンが尋ねた。

「これをスクーパーズで取り込めばいいのか。」

「はい、そういうことです。それでデストロイヤーズの力がプラスされるようになります。具体的には、反射神経や移動速度が向上し、デストロイビームを撃つことができ、デストロイヤーズのバリアーが展開できるとのことです。」koko

「そうか、それは嬉しいな。」

「これで、射撃主の強力な散弾や、棒人間の射撃にも数発程度ならば耐えることができると思いますが、射撃主の強力な一撃と棒人間の棒には対応できないと思います。なんで棒で切れるのか不思議に思っていたのですが、あの周りにはサイコブレードが展開されているようです。それが

極めて強力で、我々のバリアーにデストロイヤーズのバリアーを加えても、シミュレーションの結果からすると、防ぐことは無理だと思えます。」

「わかった。注意する。それでも、散弾や棒人間の銃にある程度対応できれば、攻撃が楽になる。」
「はい、ただ向こうも能力を隠している可能性もあります。また、デストロイヤーズの力が使える時間は1時間、その後は副作用でスクーパーズの力も弱くなります。絶対に1時間以内で作戦を終了する必要があります。」

「説明ありがとう。それでは作戦を伝える。」

ガーチューンが隊員を見渡し、作戦を伝える。

「デストロイヤーズの結晶を使うのは、ガジメ、ゼクル、ゴモと私とする。ガジメと私が棒人間を抑える。ゼクルは王女様の救出に専念しろ。ゴモは射撃手への対応とゼクルの補佐だ。蟹爪ふりゃー様のセンサーからのデータによれば、射撃手は負傷している可能性が高く、戦闘には出てこないとも考えられる。蟹爪ふりゃー様が命をかけて作られたチャンスだ。射撃手が出てこない場合、ゴモはゼクルを補佐することに集中してくれ。」

ゼクルが意見を言う。

「連隊長！棒人間の対応には私が入ったほうが良いと思います。」

ガジメが反対する。

「ゼクル、お前が一番王女様を助けたいんだろう。」

「もちろんそうです。そうですが、王女様を助ける確率を上げるためです。」

「連隊長と私では、棒人間を抑えられないと言うのか。」

「残念ながら、そうです。現状でも対応が難しいのに、アルドア少佐が言われるように棒人間はまだ実力を出し切っていないように思えます。」

ガーチューンがそんなことは分かっているというふうの話し出す。

「ゼクルが言うこともわかる。実力を出し切っていないというより、どんどん実力が上がっている感じだ。本当に厄介な存在だ。本心を話そう。ガジメと私では抑えきれない可能性は考えている。それでも、そんなに簡単にやられはしない。時間を稼ぐことはできる。また、棒人間を疲勞させることもできる。その後でゼクルが相手をした方が良い。その間に、ゴモができればエビふりゃー様と協力して王女様を救出する。それが今回の作戦だ。」

「連隊長！」

ガジメがゼクルをなだめる。

「なに、勝負は時の運。我々が負けるとは限らんよ。それにゼクルたちが王女様を早く救出してくれば、我々もビーム攪乱幕のタンクを撃つとっとと逃げ出すさ。」

ゼクルが、ガーチューンとガジメを見た後に決意を込めて言う。

「分隊長！分かりました。少しでも早く王女様を救出することに全力を尽くします。」

ガーチューンとガジメが答える。

「そうだ。それでいい。」

「頼んだぞ。」

「はい。」

ガーチューンが作戦の説明を続ける。

「作戦の説明に戻る。アルドアはここで、ビーム砲で支援射撃をしてくれ。ただ、危険を避けるために、自分は隠れて遠隔で操作すること。その他の第111分隊の隊員の役割は観測だ。建物に隠れて、棒人間や射撃手の位置や状況を逐次報告してくれ。今回はガジメ、ゼクールをはじめ、全員が携帯型通信装置を持って行ってくれ。戦闘中にこちらから送信することは難しいが、聴くことはできる。」

ガーチューンが地図を見せながら続ける。

「各隊員の最初の配置は、この地図を見てくれ。戦闘中だから、相手や全体の状況に応じて各自の判断で動いても良い。しかし、観測員は原則として戦闘をするな。見つかったら逃げろ。少なくとも、我々と戦闘中ならば追ってくることはないだろう。」

ワクチュンが質問をする。

「戦闘中でなかったら。」

「それは我々が負けたということだ。そのときは撤退して構わない。お前らがどうこうできる相手ではない。」

ワクチュンが反対意見を言う。

「棒人間がほぼ無傷で残っていましたら、連隊長がおっしゃる通り撤退することにします。ただ、棒人間が倒れるか大げがをしている場合、我々が王女様の救出を行いたいと思います。射撃手だけならば、我々だけでも注意しながら連携すれば、何とかなるように思います。」

ガーチューンが少し考えて言う。

「その通りだな。分かった。相手が射撃手だけになった場合は頼む。」

「ありがとうございます。ザトム、バンクスいいな。」

「はい、その時は覚悟を決めます。」

「棒人間がいても私は行きますよ。」

ガーチューンが、この発言を聞いて、ガジメに話かける。

「ガジメ、お前の部隊の隊員はみんな立派だな。」

「有難うございます。みんな立派なスクーパーズ兵です。」

「そうだな。我々も、なんとしても、刺し違えてでも、棒人間だけは倒さないと。」

「分かっています。頑張りましょう。私が近くでひきつきますから、連隊長は少し後ろから、強力なビームをぶちかまして下さい。」

「私が前に出たいところだが、ガジメの言う通りだな。そうしよう。ただ棒人間は予想もしない攻撃を仕掛けてくる。近づき過ぎるなよ。ゼクールたちに近づかせないことが我々の役割だ。」

「分かっております。連隊長。」

「そうだな。長い付き合いだからな。作戦を開始する。ガジメ、ゼクール、ゴモ、この結晶をスクープビームで吸引するぞ。副作用があるかもしれないとのことだ。アルドア、全員の体調をモニターしておいてくれ。」

「了解です。」

「ガジメ、ゼクール、ゴモは結晶を取り出して、各自の前に置いてくれ。」

「わかりました。」

3体は結晶を取り出して、各自の前に置く。ゴモが結晶を見ながらつぶやく。

「それにしても、気味の悪い黒色だな。」

ゼクールはそのパワーを早く使いたいと思っていた。アルドアが連隊長に報告する。

「生体データの観測の準備完了。」

「ありがとう。では、結晶を吸収するぞ。」

ゼクールは直ちに吸収を開始した。ガジメは一瞬ためらったがすぐに吸収を開始した。ゴモは2体が吸収を開始するのを見て吸収を開始した。その間にガーチューンがアルドアに尋ねた。

「それで、頼んであったものはできたかな。」

「はい、これがありますが。このスイッチを入れるとセンサーが起動します。あとは自動で……」

「わかった。何も言わなくていい。このスイッチだな。有難う。」

「連隊長……。」

ガーチューンはそれを吸引すると、続けて黒い結晶を吸引した。吸引が終わると、4体の色が黒く変わっていった。ゴモがゼクールに言う。

「ゼクール軍曹、体が黒くなっています。」

「お前もだよ。ゴモ。それに、連隊長閣下も分隊長も黒くなっている。」

ゴモが見回した。

「本当にゼクール軍曹の言う通りですね。あははは。面白いですが、うーん、あまり綺麗とは言えないですね。」

ガーチューンがアルドアに向かって尋ねる。

「これが副作用か。それで我々の体調は大丈夫か。」

「はい、色が変わるのは副作用の一つです。体の機能には異常はありません。肝臓（スクーパーズにも肝臓に相当する内臓が存在する。）に通常の10倍ほど負荷がかかっていますが、4体とも十分耐えることができると思います。」

「そうか、これで思い残すことなく行ける。」

ガジメがガーチューンを諫める。

「連隊長。思い残すことなく、のようなことは言わないで下さい。」

「すまん。連隊の隊員を8割以上失ってしまった後悔の念があるのかもしれない。ガジメの言

う通りだ。王女様を救出して全員生きて帰るぞ。よし、全員5分間、向上した能力を試してみろ。5分後、ここに集合だ。」

「分かりました。」

3体が効果の試験のために、飛び立った。ゼクルールが全速でジグザグに動いて、興奮して言う。「速いです。さつきよりずうっと速い。加速も方向転換も断然いい。これなら棒人間にも対抗できます。」

ガジメが喜びながら言う。

「ゼクルールの言う通りだ。ビームを撃ってみるぞ。発射。」

スクープビームにデストロイビームがプラスされたビームが発射された。

「すごい威力だ。こんなビームは見たことない。これが使えれば、デストロイヤーズとの戦いも、もっと容易にできたのに。」

やはりビームを撃ったガーチューンが言う。

「本当にビームがすごい威力になっている。」

アルドアが確認する。

「ビームが2種類混ざっていますが、観測の結果、3倍以上の破壊力になっています。」

「そうかそれはすごいな。」

「ただ、現在のビームは破壊にしか使えません。」

「今はそれでいい。しかし、この結晶が普通の戦闘に使えないのは、副作用があるということだろうか。」

アルドアが補足する。

「それだけでなく、この結晶を製作することが非常に難しいという話は聞いたことがあります。」
ガジメが納得する。

「そうだろうな。それだけの力はある。ゴモ、どうだ。」

「はい、俊敏に動けるようになっていきます。棒人間はともかく、射撃手の方は1体でも対応できると思います。」

「そうか、それは良かった。」

そのとき、ゼクルールが叫んだ。

「棒人間！ラフォーレ上空。」

全員がラフォーレ上空を見上げる。ガーチューンが命令を発する。

「事前配置ができなかったが、作戦開始だ。ゼクルールとゴモは王女様の搜索、アルドアはビーム砲の操作、ガジメは私の補佐、他の第111分隊隊員は各自所定の場所に向かい観測結果を報告してくれ。」

「わかりました。」

「それじゃあ、ガジメ行くぞ。」

「わかりました。ぶちかましてやりましょう、連隊長！」

「分かった、強力なやつを食らわしてやる。ただ、繰り返し返すが棒人間には近づきすぎるなよ。」

「はい。今度は本当に連隊長と共同行動になりそうですね。胸が踊ります。」

「ああ、おれもそうだが、油断はするなよ。」

「了解です。」

隊員が散って観測場所に向かった。ガーチューンとガジメは、りとの方に向かって行った。ゼクルルはやはり連隊長と分隊長が心配だった。

「大丈夫かな。隊長たち。」

しかし、命令通り王女様の救出のために、ゴモとPARKに向かった。

PARKでは、まりがみさに傷の手当のお礼を言っていた。

「みさちゃんのおかげで、だいぶ楽になったわ。まだ、ちょっと痛いけれど、血も止まったみたいだし。」

「それは良かったですな。まりちゃんは、ここで休んでいると良いですな。」

「まりちゃんはって、みさちゃんはどうするの。」

「ここちゃんを探してくると、戦いを止めに行ってくるですな。」

「外に出るなんて、だめ。危ないわ。りにも怒られる。」

「大丈夫ですな。詳しいことは後で話すですな。けれども、みさは本当はスクーパーズなんですな。」

「みさちゃん、何を言っているの。」

みさが一度スクーパーズの姿になって、また、みさの姿に戻った。まりが驚いてみさを見る。

「みさちゃん。」

「騙していて、ごめんなさいですな。理由は後で話すですな。その後どうするかは、まりちゃんたちが決めていいですな。」

「うん。」

「戦いを止めてくるですな。みさとエビふりヤーが出て行ったら鍵をかけて休んでるんですな。」

「でも、やっぱり危ない。」

「大丈夫ですな。エビふりヤー、行くですな。」

「わかりましたでございます。」

そう言い残して、みさとエビふりヤーが地下室を出て行った。みさの後姿にまりが声をかけた。

「みさちゃん。」

エビふりヤーがみさに話しかける。

「それでどこに行くでございますか。」

「とりあえず、ラフォーレに行ってみるですな。」

「それならば、走るより擬態を解除して飛んで行った方が速いと思うのでございます。」

「それだと、万が一りとちゃんとすれ違ったときに危ないですな。」

「その通りでございますね。りと様がみさ様と分らないと、エビふりヤーでも姫様を守るかどうかかわらないでございます。」

「その通りですな。りとちゃんがエビふりヤーを先に見つけければ大丈夫ですな。でも先にスクーパーズのみさを見つけると、ビームや投げた棒で私が気づかないうちに死んでしまうですな。それを、エビふりヤーが防ぐことは難しいですな。」

「容赦ないお言葉ですが、おっしゃる通りでございます。それでは走ってラフォーレへ急ぐでございます。」

「でも、この体だと走るのは大変ですな。」

みさが息を切らしながら、ラフォーレに向かって走って行った。

ラフォーレ屋上では、到着したりととことが話をしていた。

「ここ、変身もしないで危ないよ。」

「大丈夫。こちらから攻撃しなければ、攻撃しないよ。それより聞いて。みさちゃんはスクーパーズなの。スクーパーズのテレパシーが使えるの。」

「そんなこと分かっている。スクーパーズの狙いは、みさちゃん。蟹爪はスクーパーズだったし、エビふりヤーもそう。でも、みさちゃんは友達だし守る。絶対に見捨てない。」

「そうじゃないの。私たちを戦わせているのはみさちゃんなの。」

「みさちゃんが、私たちを戦わせて、面白がっているというの。」

「りとちゃん、違うの。みさちゃんたちは、殺したスクーパーズから情報を取り出して、私たちをスクーパーズにしようとしているの。」

「ここ、何を言っているの。アルドアのこと、頭がおかしくなったんじゃない。」「
「ここから連絡が入る。」

「みさちゃんが、地下室から出て行っちゃった。戦いを止めるって。」

「まりは止めたんだよね。でも、みさちゃんは出て行った。」

「うん、そう。止められなくてごめんさい。でも、みさちゃん、スクーパーズだった。一度スクーパーズの格好に変わったの。」

「そう。」

「驚かないの?」

「なんとなく分かってた。それで、今は人間の格好なの?」

「うん、人間の格好で走って出て行った。」

「良かった。スクーパーズの格好だと、見分けがつかないかもしれない。わかった。今はいい。扉に鍵をかけて休んでいて。怪我しているんだもの。私は何とかする。」

りとかここに穏やかに話しかける。

「ここ、さっきはごめん、ひどいことを言って。みさちゃんを探してこなくちゃ。」

「りとちゃん。だから、スクーパーズさんたちは敵じゃないの。」

そして、少し強い調子で言う。

「わかった、スクーパーズが攻撃してこないならば、こちらからは絶対に攻撃しない。約束する。もしかすると、みさちゃんかもしれないし。話しは後で聞くから、今は隠れていて。」

「うん。」

そのとき、竹下通りの方からスクーパーズが2体上がってきた。

「黒いスクーパーズ！ここ、隠れて。なんか、やばいかもしれない。」

りとはことこの前に立った。

ガーチューンが言う。

「棒人間が屋上にいる。攻撃開始だ。」

ガーチューンがビームを放った。りとは、いつもの通りに棒でビームを払おうとした。しかし、思いのほか強力で、ビームに弾き飛ばされ、飛び散ったビームの一部がモノアイディスプレイに当たり、壊れて落ちて行った。りとは、後ろを振り返ると、ここは無事なようで少しほっとした。そして被害状況を調べた。

「ディスプレイが壊れた。タンクのビームの照準ができない。でも大まかなコントロールはできそう。みんなとの通信は受信も送信もできない。」

そして、ここに言う。

「ごめん、ここ。新しいスクーパーズがいきなり攻撃してきた。スクーパーズのビームでは今まで一番強力だった。やっぱり無理。お願いだから隠れて待っていて。」

「りとちゃん！」

ここは、どうして良いか分からなかった。ただ、飛び立つりつとを見つめていた。りとはビームを放ったスクーパーズを見ながら、西側へ飛んで行った。りとはつぶやく。

「みさちゃんは裏原だろうから、原宿駅の方で片づけないと。」

ガーチューンがガジメに言う。

「ありがたい。自分で西側に行ってくれた。」

「これでゼクールとゴモが自由に活動できます。」

2体はりとの後を追う。りとも2体が追ってくるのを見て良かったと思っただ、ことがまだこちらを見ているのを見て、さらに西側に向う。

「あの2体を少しでもみんなから遠ざけなくちゃ。」

ゼクールとゴモは、低空を飛んでキャットストリートの防衛線の破壊を行っていた。ゴモがゼクールに話しかける。

「ビームもバリヤーも強力で、防衛線の破壊は楽です。」

「そうだな。」

「これを使っていれば、第3連隊は全滅しなくてすんだのに、何で使えないんでしょう。」

「上の考えることは分からない。ただ、この力が尋常でないことは感じる。」

「そうですね。」

りとは低空を飛んで、地の利を活かそうとする。ガーチューンがガジメに指示をする。

「ガジメは奴の後を追ってくれ。俺は上から攻撃する。無理はするな。近づき過ぎるなよ。接近戦ではあの棒は危険だ。距離を保ってビームで攻撃だ。」

「了解です。」

りとが竹下通りに沿って低空を飛んでいると、上と後ろから攻撃があった。上の攻撃は棒で、後ろの攻撃はボードで避けた。しかし、ビームを受けるたびに、体勢が崩れそうになる。

「ビームが今までより全然強力。スクーパーズは、上と後ろか。狭い道を行った方がいいかも。」りとはクレアズの角を代々木側に曲がった。そして、右、右と曲がって、ストロボカフェに通じる路地で後ろから追ってくるスクーパーズを待ち構えた。薄っすらとビーム攪乱幕が漂っていた。しかし、上のスクーパーズから攻撃があったため、その場を離れて、来た道を戻り、後ろから追ってきたスクーパーズと正面から対抗することにした。しかし、後ろのスクーパーズは見えなかった。上からは、強いビームによる攻撃が断続的に続いていた。

「どうして。曲がった後は上からも見えなかったはずなのに、隠れた場所が分かっていた。」

りとはスイートボックスを渋谷側に曲がった。そうすると、スクーパーズが現れて、後ろから追ってきた。りとはビーム攪乱幕を撒きながら、舟橋マンションの前を曲がる。後ろのスクーパーズの視界を遮ったのである。そして、煙の動きから後ろのスクーパーズがいつか来たことを確認した上で上昇して、上のスクーパーズを追いかけてやうとする。上のスクーパーズは横に逃げながらビームを撃ってくる。しかも、今までと違って高速で移動していて、すぐには追いつけそうもなかった。また、それほど正確な射撃ではなかったが、下のビーム砲からの強力なビームも飛んできた。そして、少しの時間が経ったあと下のスクーパーズからの射撃が始まる。りとはとりあえず、竹下通りに降下して、またクレアズの角を曲がり、右に曲がって真っすぐ行ってみた。そうすると、前方上方から攻撃があった。

「曲がる方向が分かっている?」

周りを見渡した。

「監視装置?どこかにスクーパーズが隠れているの?」

ガーチューンとガジメも決定力に欠けていたが、冷静だった。ワクチューンから連絡が入る。

「棒人間、今度は角F21を直進してきました。」

ガジメが答える。

「よし、やつの前に回り込んで西に押し返す。ガジメも距離を保って、西側に押し返す攻撃を頼

む。」

「わかりました。やつを裏原、ゼクルたちの所には行かせません。」

ガジメは西側に誘導しようと、りとの主にも東側にビームを撃った。りとは、細い道を回りながら監視装置を探していた。

「どこ。」

上のスクーパーズの前に回り込まれる場所から、それがありそうな場所をだんだんと絞っていった。

ここは、ラフォーレの屋上からアルドアを探していたが、動いているものは竹下通の上空では、移動しながらビームを撃っている黒いスクーパーズしか見えなかった。ただ、射撃音と下からビーム攪乱幕が立ち上っているのが見えて、戦闘中であることはわかった。

「りとちゃん。」

ここはアルドアもりとも心配で、どうしていいのか迷っていた。

まりは、地下室のモニターでキャットストリートの防衛線が破壊されるのを見ていた。

「キャットストリートの防衛線はもうもたなそうだわ。あの防衛線が破壊されたら、あとはPARKの防衛装置だけね。りとも頑張っているんだし、私がPARKを守らなくっちゃ。」

まりは、リア銃を持って地下室を出て、歩いてPARKに上がっていった。

「具合はかなり良くなったわ。これならいけるかな。」

階段を上るときに、少し痛くて、

「痛っ。」

という声が漏れたが、そのまま階段を上がりPARKへ向かった。

「PARKの壁はここが強化したから、そんなに簡単には壊れない。2体しかないみたいだから、不意打ちを食らわすのがいいわね。」

まりは入り口が見える壁際でパーカーがかけてあるハンガーの後ろにボードを立ててその後ろに隠れた。パーカーの背中の中柄を見ながらつぶやいた。

「見るたびに思うけれど、なんか、のんきそうなアルパカの縫いぐるみの画像ね。サングラスなんてかけて。」

みさは、表参道の囲いの内側をラフォーレに向けて走っていた。しかし、小さい女の子の体のためか、ラフォーレに走って向かう途中でかなり疲れてしまった。

「あそこにコンビニがあるですな。飲み物を買ってから行くですな。」

「姫様、状況がわかりません。急ぎませんと。」

「分かっているですな。でも、ちょっとだけ、休むですな。」

エビふりヤーもみさの少し青くなった顔を見て、みさの状況が理解できたようだった。

「分かりましたでございます。少し休憩をとるのがよろしいでございます。」

みさとエビふりヤーがコンビニエンスストアに入っていった。

アルドアは、ビーム砲の遠隔操作による攻撃に限界を感じていた。

「だめだ。棒人間の動きについていけない。僕が外に出て直接視認して、照準系を僕のスクーパーコアと連携させなくては。」

そう言うとアルドアは外に出て、ビーム砲の照準システムをコアリンク経由で操作し、自分の考えと直結できるように同調作業を開始した。

りとは高速で移動しながら、監視しているものを探していた。先回りされることが多い位置から、だんだん目星はついてきていた。ただ、止まって探すわけにはいかなかったため、探し出すのに苦労した。しかし、ブリスベージュの植え込みにスクーパーが隠れているのを発見した。「いた。あそこね。」

りとはそのまま少し進んでからUターンして、後ろのスクーパーズを攻撃するそぶりを見せる。ワクチンからガーチューンとガジメに連絡が入る。

「棒人間、Uターンしました。角F21を曲がってくる分隊長を待ち伏せるのではないかと思います。」

ガーチューンが指示をする。

「ガジメ止まって隠れる。棒人間が角から出てくるようならば、2体で攻撃する。」

「わかりました。」

ガジメはファンシーポケットの陰に隠れた。ガーチューンもその上空で待機した。棒人間はすぐには現れなかった。ワクチンから連絡が入った。

「棒人間、こっちに來ます！見つかりました。」

ガーチューンが指示をする。

「ビーム攪乱幕のタンクを撃って、急いで上に退避しろ。」

続けてガジメに指示を出す。

「ガジメは待機、俺が上空から援護する。」

だが、ガジメはその命令を無視してワクチンの援護に向かった。ワクチンは道のわきに設置したビーム攪乱幕を撃ったが間に合わなかった。攪乱幕が爆発的に広がっていくのを背景にそれより速くルナ銃のタンクが現れ、ついで棒人間が現れ迫ってきた。

「分隊長！援護射撃を！」

ワクチンはテレパシーでそう叫んで、必死に西に移動した。ガジメのところに行こうとしたのである。ガジメも答える。

「全速で逃げろ。あと3秒で着く。」

りとはそれより速く動き、スクーパーズを追い越していき、照準が不正確なため至近距離から追い越しざまにルナ銃の散弾を発射した。スクーパーズは穴だらけになった。瞬間にそれを確認したりとがつぶやく。

「覗き魔にはお似合い。自分の穴でも覗くといひよ。」

ワクチュンはテレパシーで最期の叫びを上げた。

「棒人間め！」

そして消えていった。りとは後ろから追ってくる黒いスクーパーパーズにすでに照準を絞っていた。

「次はスクーパー。」

ガーチューンとガジメは、ワクチュンからの通信やテレパシーが途絶えたことで、ワクチュンの消滅を悟った。ワクチュンが撃つて放出されたビーム攪乱幕で辺りの視界が悪くなった。ガーチューンが現場上空に到着したとき、煙の中を高速に東に動いていくものが見えた。

「ガジメ、やつは東に向かう。お前はまた後を追ってくれ。」

「了解。ワクチュンの仇を討ちます。」

「だめだ。近づき過ぎるな。やつをこのあたりに留めておけばそれでいい。」

「了解です。」

ガジメは、必死に自分に言い聞かせた。

「ちくしょう。でも王女様を救出するまでは堪えるんだ。救出したら、あとは好きにさせてもらう。」

煙の中を動くものを上空から追っていたガーチューンがガジメに叫ぶ。

「ガジメ、上昇だ。やつが乗っていない。」

「はいっ?!」

「ボードだけが東に進んでいる。」

ガジメは上昇を始めようとしたが、ストロボカフェに通じる小道の脇のジュースの自動販売機の上から棒人間が飛び出して来て、ガジメに上から突き刺そうと降りてきた。

「くっ！」

ガジメはなんとか右によけて棒を避けた。しかし、棒が振られ、棒からついているホースに巻き付かれました。りとはルナ銃の推力を使って、ホースでスクーパーパーズを切り裂こうとする。

「このスクーパーめ、消えろ。」

しかし今までと違って、スクーパーパーズは切れなかった。ガジメは最大のエネルギーでバリヤーを張っていた。ただ、ガジメもビームを撃つとバリヤーが弱まりホースで切断されそうだった。

「連隊長! やつのひもに巻き付かれました。」

「分かった。待ってろ! 今行く。」

ガーチューンは煙の中に飛び込んでいった。

「ガジメ、どこだ！」

「ここです。」

テレパシーの方向を見ると、棒人間とホースに巻き付けられながらも上昇しようとしているガジメが見えた。ただ、棒人間の足が地面に吸いついているかのように固定されていた。ガーチューンは、棒人間にかなり接近して最強のビームを放つ。

「棒人間、くらえ。お前の最期だ。」

しかし、撃つ瞬間に、戻ってきたりとのボードがガーチューンに衝突して、照準がずれて近くの壁に当たり、飛び散ったビームの一部がりとガジメに当たった。両者ともバリヤーのおかげで大きな怪我はしていなかったが、ストロボカフェの方に吹き飛ばされてしまった。それでも、りとはホースを離していなかった。りとは立ち上がると、ホースを手繰り寄せはじめた。ガーチューンははりとに向けて再度ビームを放つ。そのビームはりとが自分の所に戻ってきたボードで防いだ。強い衝撃だったが、ホースは離さなかった。逆にボードで反射したビームがガジメを襲う。

「痛っ」

ガジメから声が漏れる。バリヤーが弱まり、ホースが食い込み始める。りとも2体のスクーパーズや周りを気にしながら、ホースをさらに手繰り寄せる。ガジメも全力を出していた。それでも、だんだんとりに近づいて行った。ガーチューンはガジメを助けるために距離を取っている場合ではないと考え、棒人間に目掛けて突っ込んでいく。

「ガジメ、今行くぞ。頑張れ。」

「連隊長！無理はなさ。うっ。」

ガーチューンが接近すると、ボードが飛んで来て、盾のように前をふさいだ。左右に動くとボードも左右に動いた。左にフェイントをかけて、ボードを右から抜けようとした瞬間、ガジメから声がかかった。

「棒人間、そっちに行きました。」

りとは瞬間ホースを緩めて、ボードの後ろまで来ていたのである。りとは胸のペン用のポケットに刺してあったペンタブのペンを右手に持ち、ガーチューンに突き刺そうとする。

「下だ。」

ガーチューンはガジメからの連絡もあったため、そう叫びながらなんとか下にかわしたが、棒人間に蹴り飛ばされてしまった。強力な蹴りで数十メートル以上飛ばされた。

「連隊長！」

ガジメが心配そうに叫んだ。りとはペンを持ったまま、ストロボカフェのすぐ前に移動して手繰り寄せながらつぶやく。

「ここなら、強いビームのスクーパーズが攻撃できる角度が限られる。」

ガジメも全力で離れようとするが、次第に手繰り寄せられていった。

「くそ。」

ガーチューンは、助けに行こうとするが、狭い路地で、近づくとホースの先のルナ銃の攻撃もあり接近することができなかった。上からの攻撃を試みたがボードで防がれてしまっていた。

「ガジメ！」

ガジメとりとの間隔は1メートルもないほどに迫ってきた。

「このままでは、あれに刺されて死ぬだけだ。」

ガジメは決心してビームを撃つことにした。バリヤーが弱まり切断される可能性も高いが、この距離ならばビームが当たらないことはないし、上手くいって棒人間が倒れる方が先ならば、助かる可能性もあると考えたからだ。ガジメは棒人間を見つめた。

「いくぞ。集中するぞ。3、2、1。」

キャットストリートの防衛線のPARKの方に渡る部分を破壊したゼクールとゴモは、一つ角を曲がればPARKが見える位置まで来ていた。

「軍曹、気をつけて下さい。このビーム砲は強力です。」

「知ってるさ。俺がおとりになって、ビームを撃たせるから、ゴモは物陰に隠れながらその発射装置を破壊してくれ。」

「分かりました。お気をつけて。」

「じゃあ、行ってくる。」

ゼクールが飛び出し、それに対してPARKの防衛装置が作動した。しかし、ゼクールは機敏に避けて、ビームがかかる以上に当たるとはなかった。そして、ゴモが一つずつ、ビーム発射装置を破壊していった。まりはPARKの入り口が見えるところに隠れていた。

「来た。2体ね。増えていないのは良かったわ。ここで応戦しても仕方がないから静かに待とう。不意打ちを食らわせてやるわ。」

数分でゴモがPARKのビーム発射装置の全てを破壊した。

「ゴモ、そこで待っている。」

ゼクールが建物の周りを飛んで、ビーム発射装置が残っていないか確認した。2つほど残っていたが、難なく破壊することができた。ゼクールは地上に降りて、みさをテレパシーで呼んでみる。

「みさ王女様！みさ王女様！助けに参りました。スクーパーズ宇宙遠征軍第8連隊のゼクールです。いらっしやいましたら、お返事をして下さい。」

返事がなかった。

「みさ王女様！エビふりャー様、いらっしやいましたらご返事ください。助けに参りました。」再度呼びかけても返事がなかった。ゼクールはゴモを呼び出した。

「ゴモ、誰もいないようだ。こっちへ来てくれ。」

「わかりました。」

PARKの建物の入り口までゴモが来た。モニターで様子を見ていたまりは、リア銃を肩に乗せて構えた。ゼクールがゴモに話しかけた。

「王女様はいないようだ。」

「はい、以前には王女様は地下室にいますとおっしゃっていましたが。」

「そうだったな。とりあえず地下室に行ってみよう。」

ゼクールとゴモは地下室への通路を降りて行った。扉は少し開いていた。ゴモが扉を開き、ゼク

ールが突入する。そして、続けてゴモも突入する。しかし、部屋の中には誰もいなかった。ゼクルとゴモが部屋の扉を一つずつ開いて確認したが、やはり誰も居なかった。ゴモがゼクルに話しかける。

「誰もいませんね。」

「そうだな。だが、この服はラフォーレから、明治通りの反対側の建物の屋上で王女様を見つけたときに着ていらした服だ。」

「そうですか。さすが王女様一筋だけのことはあります。でも、においは嗅がないで下さいね。」

「そんなことはしないよ。一人じゃないんだから。」

「一人だったらするわけですか。」

「そうかも知れないが、そんなことは今はどうでもいい。王女様を探すのが先だ。」

「ごまかしましたね。まあ、いいです。手分けして探しますか。」

「いや、私が探しに出る。王女様が戻ってくる可能性もあるから、ゴモは近くに潜んで、この建物を見張っててくれ。」

「分かりました。この建物が見えるところに潜んでいます。」

「棒人間が戻って来ても一人で戦うんじゃないぞ。」

「はい、分かっています。」

ゼクルとゴモは外に出て、ゼクルはPARKから離れて行った。

「さて、どこへ行くか。竹下通りの方は今来た道だから、とりあえず、ラフォーレの方に行ってみるか。」

一方、ゴモは見張るために良い場所を探していた。

「どこに隠れようか。」

まりもモニターで、2体のスクーパーズが地下室から出て、二手に分かれるのを見ていた。

「今なら1体だけだけど、無理に仕掛けることはないか。」

そうつぶやきながら、壁に寄りかかり監視を続けた。

ラフォーレの屋上で、辺りを見ていたことは、竹下通り近くのビーム砲のすぐそばに普通のスクーパーズが現れたため注視した。

「アルちゃんだ。」

そうつぶやくと、そのスクーパーズに向かってテレパシーを使って叫んでみた。

「アルちゃん。アルちゃん。ことこだよ。アルドアさん。」

しかし、テレパシーの到達範囲外なのか、そのスクーパーズが反応することはなかった。ことこは、ラフォーレの階段に向かい、急いで降りて行った。しかし、急ぎすぎたため、階段の途中でころんでしまった。

「あいたたたた。」

それでも、ここは足を引きずりながら、竹下通りの方に急いだ。

みさはコンビニの小さなイトインスペースで、エビふりヤーと小休止していた。

「人間の体は、水分を取らなくてはいけないので不便ですな。」

「それに人間は、宇宙に出ると空気がないために死んでしまいますでございませう。ですが、銀河系の中の生き物は、ほとんどそうでございませう。ですので、歴代の王様は、他の生物をスクーパーズ化しようとお考えになったのだと思います。」

「でも、そのために何百、何千ものスクーパーズの命を犠牲にすることは、してはいけないことなんですな。初めてこの作戦を指揮してわかったですな。みさを必死に助けようとしているパドたちが、りとちゃんに殺されるところを見てしまったんですな。でも、りとちゃんもみさを助けようと全力で戦っていたんですな。悪いのは全部みさたちなんですな。」

「しかし、姫様。エビふりヤーとしましては、今回の作戦で死んでしまったスクーパーズの命を無駄にするのは無念でございませう。蟹爪ふりヤーや第7連隊の部下たち。第3、8、11連隊の隊員たち。最後は私の命を差し出してよろしいでございませうので、りと様だけでもスクーパーズになって頂きたいと思うでございませう。りと様ならば、私が防ぎきれなかったアムロディーの先鋭部隊にも勝利することが可能と思うでございませう。」

「エビふりヤーの気持ちもわかるですな。しかし、もしりとちゃんがスクーパーズになってこの作戦がスクーパーズにとっても有効とわかったら、父上はこの作戦をどんどん実施するかもしれないですな。そうすると、この作戦で犠牲になるスクーパーズがもっと増えるですな。」

「・・・。悲しいこととございませう。」

「少し休んだら、だいぶ体が楽になったですな。出発するですな。」

「わかりましたでございませう。出発するでございませう。」

「0。」

棒人間を見据えたガジメがそう叫んでバリアーを緩めビームを放った。しかし、ビームを撃つ直前に棒人間が操作するルナ銃の先の尖った部分が上から突き刺ささり、ガジメは地面に落ちて、ビームは横の扉に向かって放たれた。扉に大きな穴が開いた。りとは、地面に落ちたスクーパーズのビームを発射するところから踏みつけた。そして、ホースをより強く引いた。ガジメがガーチューンに向かって叫ぶ。

「連隊長！私には構わずに、こいつを撃つて下さい。」

ガーチューンは上からだど両者に当たるため、前に回り込もうと移動する。

「連隊長！早く今です。」

棒人間が足でガジメを抑え込み、両手を添えて思いつきりホースを引っ張ると、ホースがガジメのバリアーを破り、ガジメが4つに切断された。

「連・・・」

それがガジメの最期の言葉だった。そして、ガジメは消滅していった。スクーパーズの消滅を確認したりとが呟く。

「春奈るなのFCイベントのおかげで土地勘があつて助かった。お前も参加していれば、ここで死なずにすんだかも。スクーターにはふさわしい最期。」

とつぶやいて、上を飛んでいるボードを見る。前に回ったガーチューンは棒人間にビームを放とうとする。

「ガジメの仇を・・・」

しかし、ビームが届く前に、棒人間は人間のジャンプ力とは思えないほどの高さまでジャンプしてボードに飛び乗り上昇し、逆に棒を構えてガーチューンに襲い掛かった。ガーチューンが横にかわすと、今度は後ろからタンクからのビームが飛んでくる。ビームにかすりながら何とかかわすが、今度は上から棒人間が迫ってくる。ガーチューンは前に進んでぎりぎりかわすが、今度は下方後ろから前方に移動しているタンクからのビームの攻撃があり、次には前に出たタンクについているホースが下からガーチューンを襲い、続けて棒人間が後ろから迫つて来た。ガーチューンは避けるのに精一杯でビームを発することさえできなかった。振り下ろす棒はなんとか避けたが、棒人間に蹴りあげられてバランスを崩してしまった。棒人間は、振りかざし突入して来る。ガーチューンはビームを放つが棒で弾いてそのままやって来る。弾いて飛び散ったビームが棒人間にかすって当たっているが、棒人間は速度を落とすどころかますます加速して突っ込んでくる。りとがつぶやく。

「これでおしまい。」

しかし、その瞬間、りとはビーム砲のビームが左からやって来るのを感じた。急停止してビームをかわす。さつきより正確な狙いだった。ビーム砲の方を見ると、普通のスクーパーズが見えた。しかし、それよりも気になったことができた。PARKの方から煙が上がっているのが見えたのである。

「別動隊がいるの？連絡ができないから。まり。」

りとは、ガーチューンを放っておいて、ビーム砲のそばにいるスクーパーズ目掛けて急降下する。

「まずこれを黙らせる。」

ガーチューンがつぶやく。

「ビーム砲の方が先なのか。」

そして、後ろから撃とうと思ったが、射線の先にビーム砲とアルドアがいるため、りとより降下を優先して下から棒人間の背後を狙うことにした。りとは高速でアルドアに迫る。ガーチューンが叫ぶ。

「アルドア！隠れる！」

そして、下から棒人間に向けてビームを放つ。アルドアも逃げずにビーム砲のビームを撃つが、

りとは下のスクーパーズからのビームはボードで防ぎ、ビーム砲のビームはかわしてアルドアに迫る。最後のビームをかわしてアルドアまで25メートルぐらいになったときに、りとは棒を構える。基本的には戦闘員でないアルドアから恐怖の悲鳴が出る。

「わーっ！」

しかし、棒人間は棒を持ったまま、そのまま過ぎて行ってしまった。りとの後を追っているガーチューンも、アルドアの横を歩き過ぎる。

「良かった。アルドアは無事か。あいつらの基地への帰還を急ぐのか。さっき煙が見えたが、ゼクル達はどうしているんだ。」

棒人間との戦闘が激しくて、ガーチューンも戦闘中では通信機でゼクルたちに尋ねることができず、あまり状況が分かっていなかった。りとはビーム砲のそばのスクーパーズに近づいたとき、そのスクーパーズがアルドアとわかって、とりあえず棒を納めて横を通過した。

「ビーム砲を撃っているのはアルドアだった。やっぱり残っているの。どうしよう。ううん、あいつは何とでもできる。今はPARKが先。」

りとは通信ができない状況で、PARKにいるまりの方が心配だった。

ゴモは、PARKの近くでPARKを見張ることができ隠れ場所を探していた。そのとき、建物の壁の絵が目に入った。

「それにしてもいい絵だな。家族の絵。あの棒人間が描いたなんて信じられない。そんなに悪い生命体じゃない気もするんだが。いけない、いけない。敵への気持ちは命取りだ。」

隠れ場所を探すことに戻ろうとしたときに、その絵の隣の絵にも気がついて、初めは斜めの位置から見て、だんだんと絵に近づいていった。

「ああ、そう言えばもう一枚絵を描こうとしていたな。すごい、スクーパーズの絵だ。綺麗な空だな。街の上を飛ぶスクーパーズだ。悠々としている。あまり絵からスクーパーズへの悪意は感じないな。」

さらに絵に近づいた、ゴモは言葉を失っていた。

りとはPARKへ低空を飛んで急いでいた。後ろから黒いスクーパーズが同じ高さで飛んで追ってきたが、道が狭く曲がっているので射撃できないようだった。キャットストリートを通過すると、防衛線が破壊されているのが見えた。

「まり。」

ガーチューンは、必死にゼクルとゴモに通信機を使って呼びかけていた。

「ゼクル、ゴモ、棒人間がそっちに向かっている。追ってはいるが抑えるのは無理だ。聞こえるか、ゼクル、ゴモ！」

しかし返事はなかった。

「あっちも戦闘中か？」

ガーチューンもキャットストリートを通ったところで、防衛線が破壊されているのに気付いた。「作戦は、順調のようだが。」

りとがPARKの前の道に着きPARKの方を見ると、モニターで様子を見ていたまりが窓を開けて身を乗り出して、りとに向けて叫ぶ。

「りと、反対側に黒いスクーパーズがいる。」

「まり！」

まりが無事と分かって、少し安心しながら反対を見ると、黒いスクーパーズがいた。棒を振りかざし、そのスクーパーズに迫る。

ラフォーレの方にみさの名前をテレパシーで呼びかけながら進んでいたゼクールがコンビニから出てくる、みさとエビふりヤーを発見した。

「みさ様とエビふりヤー様だ。ご無事だ！」

周りを見渡したが、棒人間も射撃王もいなかった。これなら大丈夫と思ったゼクールがみさとエビふりヤーの方に高速で向かいながら呼びかける。

「みさ様、エビふりヤー様！」

みさとエビふりヤーが振り向いた。ゼクールはその前に停止した。

「スクーパーズ宇宙遠征軍第8連隊第111分隊のゼクール軍曹です。お助けに参りました。急いでこの囲いの外に参りましょう。ご案内致します。その前に隊へ現状を報告させて下さい。」

「わかったですな。」

ゼクールはみさ王女に許可をもらって、通信機で全員に状況を報告した。

「ラフォーレ近くのコンビニ前で王女様とエビふりヤー様を発見しました。周りに人間はいません。エビふりヤー様の指示も仰ぎながら、王女様の救出作戦を遂行します。」

その通信は、PARKへの道を目前にした、ガーチューンにも届いた。

「でかしたぞゼクール。よくやった！これでガジメの死も無駄ではなくなった。」

「分隊長が戦死なされたのですか。」

「そうだ。だが今はその話をしている時間がない。5分間は棒人間を足止めするから、急いで囲いから脱出して王女様を戦艦まで護衛してくれ。」

「承知しました。王女様を戦艦にお連れしましたら急いでそちらに向かいます。ですので、連隊長、絶対に無理はしないで下さい。」

「いっちょ前の口を。だが、分かった。」

「ご武運を。」

「ああ。」

ゼクルルの目から涙が出てきた。そんなゼクルルを見ながら、みさが答える。

「ゼクール軍曹、ご苦勞様ですな。ありがとうございます。でもですな、みさには逃げる前にこの戦

いを止める義務があるですな。」

「みさ様、いつもながら、ご立派なお考えと思います。ですが今はお逃げ下さい。現在、ガーチューン連隊長が棒人間をなんとか抑えています。残念ながら我々が全力を上げて、あの棒人間に勝てる保証はありません。みささまのご無事を保証できません。戦艦に戻られて、急いでこの星系から離れるのが一番良いと思います。」

「棒人間ですな？」

「はい、棒を持ってボードで飛び回る人間です。非常に強力で、残念ながら蟹爪ふりやー連隊長も戦死されてしまいました。現状の我々には棒人間に勝つ手段がありません。戦場が混乱している今こそが脱出のチャンスです。」

「ああ、りとちゃんのことですな。」

「りとちゃん!？」

「りとちゃんなら大丈夫ですな。りとちゃんは、この原宿を守りたいだけですな。我々が出て行けば、戦いを止めるですな。」

「でも、王女様を人質に。」

「それは、違うですな。りとちゃんは敵ではないですな。これには深いわけがあるですな。聞くですな。」

エビふりやーがそれを止める。

「みさ王女様、その話しは極秘でございます。一般の兵に話すような内容ではないでございます。」

「エビふりやー、そんなことを言っている場合ではないですな。この戦いを止め、スクーパーズの行いを正すためには、真実を語る必要があるですな。」

「しかし。」

「これは、みさの命令ですな。黙っているですな!」

「はい、分かりましたでございます。」

ゼクールは、何だろうと思いつつも話を聴くことにした。1回だけの射撃だったが、白いデストロイビームのことも気になっていた。

「棒人間が敵ではないとすると、デストロイヤーズが関係するの。何か複雑な事情がありそうだな。」

ゼクールは王女様救出にはまだ大変なことがあるかもしれないと思い、気を引き締めた。

ゼクールからの通信を受け取ったガーチューンは隊員たちの活躍に喜びながらも、決意を固めていた。

「俺はここでやつらの足止めをしなくては、皆に合わせる顔がない。ガジメのかたき討ちはその後だ。」

足止めが困難なことは分かっていたが、自分が絶対にやらなくてはいけない役割と覚悟していた。

「蟹爪ふりゃー様、ギンシア連隊長、ガジメ！、私に勇気と力を貸して下さい。」

ガーチューンもPARKの前の道に到達した。敵の拠点PARKがある左を見ると、射撃主が窓から身を乗り出していた。右をみるとゴモに迫る棒人間がいた。

「ゴモ！逃げろ！右の建物に入れ！」

ゴモは、この通信にも棒人間の接近に気付かずに絵をみていた。

「これ僕だ。すごい、僕が絵になっている。うーん、本物より可愛いかも。でも、この辺りすごくいい。悠々としている感じもいい。この絵、欲し・・・あれ!？」

ゴモは周りの景色から、自分が回りながら下に落ちていくのがわかった。

「あっ、棒人間。これもお前が描い・・・」

ゴモは真つ二つになった後に棒人間の後姿を見て、消えて行った。りとはまりの傍にいた黒いスクーパーズを倒して少し安心した。

「ラッキー。何か考え事でもしていたのか。」

ただ、前に自分の絵が描いてあるのを見てつぶやく。

「私の絵を見ていたの？まさか。そんなことより、もう1体。待ち伏せをするか。」

ガーチューンは、

「ゴモ！」

と叫びながらも、冷静に考えていた。

「時間を稼ぐならば、射撃主が先だ。やつも助けに来るはずだ。」

ガーチューンは、棒人間とは反対のPARKの方に向かった。りとは後ろを振り返ると、追ってきたスクーパーズがPARKの方に向かうのが見えた。スクーパーズとPARKとの距離はもうほとんどなかった。

「しまった。」

りとはボードから飛び降り、ボードだけを先に向かわせた。まりは黒いスクーパーズが向かって来るのをみて、貯めてあったエネルギーを使って、モイドレブンの強力な散弾を放つが、蟹爪ふりゃー同様にこのスクーパーズには効かなかった。迫ってくるスクーパーズを見て、部屋の中に隠れた。ガーチューンはPARKの窓目掛けてビームを放つ。りとのボードも間に合いそうもなかった。ビームが部屋の中に命中し、爆発したように煙や火が飛び出した。ガーチューンは次に走ってくるりとの向けてビームを放つが、予想した通り、ビームは棒で弾かれ有効な攻撃にならなかった。そして、りとのボードがガーチューン目掛けて飛んできたので、ガーチューンは少し上昇してそれをかわす。

「時間稼ぎが目的だ。ここで無理は禁物。ラフォーレから囲いの出口なら、5分稼げは十分だ。」

PARKの建物に到着したりとはジャンプして2階の窓からPARKに入る。PARKの中

はめちやくちゃだった。まりは見えなかった。りとが大声を出す。

「まり。まり。どこにいるの？大丈夫？」

レジの裏からまりが顔を出す。

「りと。私は大丈夫よ。部屋の中もことが強化していたから、レジカウンターで助かった。」

「まり！良かった。」

「金庫を守らなくちゃとここに飛び込んだけれど、中のお金は全部銀行に預けていたんだっただも、飛び込んだおかげで助かった。」

「助かったからいいけれど、金庫だなんて、こんなときに何言っているの。怪我はない？」

「今の攻撃ではないわよ。それより、お金は店を運営するのにとても重要なのよ。」

「そうだけど。うん、怪我なくて良かった。」

「たぶん、ビームがまた来るわよ。」

まりの言う通り、窓を通したビームの攻撃があった。まりは、レジカウンターの後ろに隠れた。りとは、ボードで防いだ。

「りと大丈夫？」

「こんなの全然平気。それより、まりはそこに隠れていて。今、やつつけてくる。」

しかし、続けざまにビームの攻撃があり、りとも動けなかった。ガーチューンは、

「あと4分。二人をあの建物の中に足止めすれば、作成は成功だ。」

とつぶやき、自分の位置を変えながらもPARKに少しずつ接近し、PARKの窓目掛けてビームを放った。様々な破片が飛び散った。その直後、りとは、

「じゃあ、行ってくる。」

と言って、走ってPARKの出口に向かった。PARKを出たりとは通路でボードに乗って建物の横の階段から飛び出る。建物からか出てくるところを見たガーチューンは、PARKの窓に飛び込む。りとは、またあのスクーパーズにしてやられたと思った。

「頭のいいスクーパーズ。」

りとはUターンをして来た道をPARKに戻った。PARKに入ったガーチューンは、射撃主を探して周りを見渡した。

「ここが、やつらの基地か？ラフォーレとあまり変わらんな。」

窓から何か入って来たので、まりは、りとが窓から戻ってきたのかと思って、レジから顔をだした。

「りと？」

しかし、そこにいたのは黒いスクーパーズだった。すぐにしゃがんでレジに隠れ、リア銃のモードを設定した。

「PARKは私が守る。モードイレブン、ポジションワン。」

しかし、まだエネルギー充填は完了していなかった。ガーチューンはレジを攻撃したが、レジは

壊れなかった。

「装甲が施されているのか。もう、棒人間が戻って来るな。撤退だ。」

窓の外を見ると外に棒人間がいなかったため、ガーチューンは窓の方から外へ出た。離れ際に、PARKに向けてビームを放った。まりもスクーパーズが出ていくときに、モードエイトでリア銃を撃とうとしたが、スクーパーズがビームを撃ってきたため撃たずにレジの中に隠れた。PARKから少し離れた位置で、ガーチューンがつぶやいた。

「あと3分。」

扉から入って来たりとがまりに尋ねる。

「まり、大丈夫？」

「スクーパーズが入って来た時にはドキットとしたけど大丈夫。」

「どうしようか。」

「私がおとりになって外にしようか。」

「ううん、それだとまりが狙われると思う。あいつはビームが強力だからやめた方がいい。まりは、ここに隠れていて。」

PARKの室内にスクーパーズのビームの攻撃で宙を舞っていた、のんきなアルパカの縫いぐるみの絵が描いてあるパーカーがまりの所に落ちて来た。それを見たまりが服を脱ぎ始めた。

「何やっているの。」

まりが脱いだ服をりとに渡して、自分はアルパカのパーカーを着た。スクーパーズ化が進んでいるまりを見たりとの表情が一瞬固くなったが、何も言わずに表情をわざと緩め、自分に言い聞かせた。

「もうすぐ終わる。」

まりが続けて説明する。

「私の服を着てみるのは。相手が油断して寄ってくるかも知れない。でも、リア銃で有効そうなモードはモードイレブンポジションワンだけだと思う。」

「モードイレブン？ サッカーかなにか？」

「蟹爪に使った一番強力なビーム。エネルギー充填に3分かかって、一発のビームだけ撃てるの。」

「ああ、あれね。でも急に使えるかな。」

「安全装置を外して、引き金を引けばいいようにしておく。」

「そうね。わかった。あいつを引き付けて一発撃ってくる。」

「お願い。これが安全装置でこれが引き金。ここを覗いて照準できるわよ。」

「ありがとう。」

りとは棒をまりに渡して、自分の服を脱いだ。りとのスクーパーズ化はそれほど進んでいなかった。まりは、少し安心していった。りとは、すぐにまりの服を着た。

「布があちこち余っている。まりが私の服を着るのは無理そうね。」
そして、リア銃を担いだ。

「じゃあ、行ってくる。」

ガーチューンは建物から飛び出て来た人間に注目した。

「射撃手だ。おとりか？ 棒人間が窓から出て、後ろから攻撃する気か。」

ガーチューンは後ろを気にして、回り込みながら射撃手に迫った。りとはリア銃のビームが当たらなかつたら、胸のペンで攻撃するつもりだった。それにはスクーパーズを引き付けなくてはいけなかった。そのため、リア銃の照準器を照準しつづけながらもビームは撃たなかった。

「少しでも引き付けないと。」

近づいてきたガーチューンがまだ距離はあつたが離れたところからビームを放つとボードで防がれた。しかし、それで違いに気が付いた。

「むっ、棒人間のボードだ。こちらを引き付けるために撃たないのか。」

ガーチューンは無理をしないで離脱していった。

「あと2分だ。」

りともまりのためにリア銃のエネルギーを使わないことにした。

「変装がばれたのか。まりのところに戻らなくちゃ。」

また、レジの裏に戻ったりとがまりに話しかける。

「ばれたみたい。やっぱり無理。まりと私とはスタイルが違いすぎる。」

「あー、そうか。りとの脚はとっても綺麗なものね。」

「えっ、そう？ そうなの！ ありがとう。バレたのはそのせいじゃないと思うけど嬉しい。」

「本当のこと言うと、いつもりとのスタイルが羨ましくて、いじいじしていることがあるの。」

「えっ。私は逆。まりのスタイルが羨ましい。私なんか劣等感の塊だけど。でも、だから、そう

言ってもらえると嬉しい。」

「体を取り換えられるといいのかな。女同士の体の交換じゃアニメにならないけど。」

りとがクスツとして。

「そうよね。でも、この話は終わってから。」

二人は服を戻しながら、りとがまりに尋ねる。

「ところで、私に来る前にスクーパーズはいくつ来た？」

「黒いスクーパーズが2体。1体は残って、1体は渋谷の方に向かった。」

「私の方も黒いのが2体。じゃあ、あの1体とあともう1体いるということか。悠長なことではいられない。みさちゃんとかがまだ外にいるし。」

「りと、二人で一緒にやっつけようよ。」

「やってみようか、まりが見える位置の方が守りやすい。」

「ごめんね、足手まといで。」

「ううん、全然。まりがいるから頑張れる。じゃあ、いつもの通りあのスクーパーズから私の後ろに隠れるようにしていい。」

「分かった。怪我もだいぶ良くなったから、何とかする。頑張つて、りと。」

「うん。じゃあ行くよ。」

ガーチューンは少し離れた上空から休みながらPARKの様子を伺っていた。

「あと1分だ。」

すると、二人がPARKから飛び出して来た。

「今度は、二人同時か。挟み撃ちにするのか？」

しかし、二人は離れなかった。ガーチューンは距離を取りながら、照準が付けれられないように、それほど急がずにランダムに動きながら、二人の周りを大きく回っていた。りとは、まりとスクーパーズの間に入るような位置取りをして、回っていた。ガーチューンは渾身のビームを放つべく、力を溜めていた。りとはPARKの上空へ移動していった。まりに話しかける。

「合図をするから、ビームを撃つて。したら、PARKの屋上の物陰に隠れて。」

りとは何をするか気になったけれど、短く、

「わかった。」

とだけ答えた。時間が経過して、ガーチューンがつぶやく。

「よし、5分経ったぞ。これだけあればゼクルたちは脱出できただろう。」

ゼクルに通信してみたが、返答はなかった。たぶん囲いの外に出て、戦艦の中にいるため通信が届かないのだろうと考えていた。

「しかし、何のタイミングをはかっているのだろう。射撃手が撃つた後、位置的に射撃手を下に逃がして、棒人間がこっちに飛び込むつもりか。ならば、相手が攻撃した瞬間にいくぞ。」

少しだけ降下すれば、まりが隠れることができそうな位置に来た時、りとは叫んだ。

「まり、撃つて！」

まりが発射すると同時に、りとはスクーパーズめがけてダッシュしていた。まりのビームがりと左側を通っていった。まりはビームの発射が終わると、下降して建物の陰にかくれようと降下した。ガーチューンは下にビームをかわし、迫ってくる棒人間より先に射撃手に向かって連続したビームを放った。りともスクーパーズが下降した瞬間、自分ではなくまりを狙っていると直感し、下降してスクーパーズとまりの間に割って入った。真正面から強力なビームが来た。

「避けたら、まりがやられる。」

正面からビームを棒で切り裂きながら、そのまま前進する。ガーチューンもできる限りのエネルギーでビームを発射する。

「この化け物め。落ちろ！」

飛び散ったビームがりとに当たっても、りとはひるまずに前に進んだ。

「まりには手を出させない。」

逃げて追われるだけだと覚悟したガーチューンもビームを放ちながら前進する。

「連隊の仇だ。思い知れ。」

1メートルぐらいに近寄ると、ビームの圧力で両者が近寄れなくなった。お互いが目を見ていた。ガーチューンは考えていた。

「どうする。ビームが出なくなったらやつに切られるだけだ。左に少し避けながらビームを撃つか。それとも少し下がるか。しかし、動いた瞬間が危ない気がする。」

りとも後ろのまりが気になっていた。

「この強力なビームを浴びたら、隠れていてもまりが危ない。正面から受けるしか。」

まりは隠れながらリア銃のエネルギー充填を急いでいた。

「早く充填が終わって！りとが。」

膠着状態が続いた。それでも、りとはまりが少しでも安全になるように、スクーパーズを道の方に少しずつ押し込んでいった。

「なんて力だ。推力にパワーを回すとビームが弱くなるか。」

「このスクーパーズ、ここで殺さない。絶対まりには手を出させない。」

りとはPARKの向かいの建物の扉のへこんだ部分と道が交わる場所にスクーパーズを追い込む。ビームの発射に集中していたガーチューンが気付いた。

「しまった、ここは。」

りとは全力を込めて斜め右に傾けた棒を押して、そのまま棒で黒いスクーパーズを押し切ろうとする。ガーチューンのビームが激しく飛び散る。

「壁と地面に囲まれて、もう逃げられないはず。後は押し切るだけ。」

エネルギーの充填が終わったまりが上からリア銃を構えた。しかし、スクーパーズは壁で囲まれ、りとの死角にいて射線を取ることはできなかった。そのため、りとの背中に向かって叫んだ。

「りと！頑張れ！。スクーパーズなんかには負けるな！」

ガーチューンは、下左右と囲まれ、斜め上から棒人間の棒の刃に押し込まれていた。

「どちらにも動けないか。」

だんだんとビームの威力も落ちていき、刃が少しずつ迫ってくる。

「今はビームに集中だ。」

集中してビームを発する。ビームが棒に当たってさらに激しく飛び散る。少し棒を押し戻すことができた。しかし、ガジメのときもそうだったが、ボードから降りたりとは重力を制御して左足を固定した。そして右足を棒にかけ、体重の何百倍もの力で棒を押し込む。棒はだんだんスクーパーズに近づき、やがて刃がスクーパーズの体に当たり、1ミリメートル、5ミリメートルと少しずつ食い込んでいった。ガーチューンがうめく。

「うう。」

勝利を確信したりとが、スクーパーズの目を見つめながら静かに話しかける。

「ずる賢いスクーパーズさん、残念ね。今、二つにしてあげる。どんなに考えても、もうあなたには逃げ道はないの。」

りとは力を緩めず棒を押し込んでいく。それで、棒の刃がガーチューンの体に食い込む速度が上がっていった。そして刃が食い込んだため、スクーパーズはもがくこともできなくなっていた。りとは微笑みを浮かべ、言葉は通じないと分かっていたが、また話しかけた。

「あはは。そう、あなたはこの隅で死ぬの。それは私の大切なまりを狙った報い。」

5センチメートルぐらい食い込んだ時に、ガーチューンは最後の覚悟を決めた。

「くそ、押し返せないか。ガジメ、今お前のところに行くぞ。だが棒人間、お前も道連れだ。」

ガーチューンは通信機のスイッチを入れた。

「スクーパーズに栄光あれ！丸野王、万歳！」

ガーチューンがビームを止めた。ガーチューンが二つに切り裂かれ消滅していった。しかし、小さな丸い塊のようなものがスクーパーズの消えたところから落ちようとしていた。りとがうめく。

「爆弾?!」

それはアルドアが作成したガーチューンの生命反応が止まると爆発する対デストロイヤーズ用の爆弾だった。爆弾は地面に落ちる寸前に爆発した。まりが爆発の爆風で後ろに倒れこんだ後、起き上がりながら叫んだ。

「りとー！」